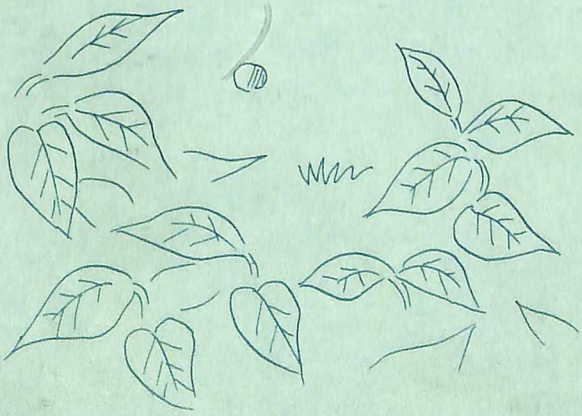
教会学校教案誌

2013.1.2.3月号



No.48

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2013年1～3月カリキュラム（第48号）

―『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム	教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
1月6日 新年	キリストとの結合	問30	ウ小教理29－32、ハイデ86
		ヨハネ15:1－5	ヨハネ15:5
	聖霊によりキリストと結び合わせられている。キリストとの絆のうちに歩もう		
13日	罪の赦しと義認	問31	ウ小教理33、ハイデ56
		ルカ18:9－14	イザヤ1:18b
	神によって義とせられ、罪赦される喜び、打ち砕かれることの祝福に生きよう		
20日	神の子とされる幸い	問31	ウ小教理34、ハイデ56
		ローマ8:12－17	ローマ8:17
	神の子とする霊を受けている者として、神を「父よ」と呼ぶ幸いに生きよう		
27日	聖化の恵み	問32, 33	ウ小教理35, 36
		ルカ19:1－10	エフェソ4:24b
	キリストがわたしたちのうちに生きておられ、聖とされていることを喜ぼう		
2月3日	愛の歩み	問32, 33	ウ小教理35, 36、ハイデ60, 61
		エフェソ5:1, 2	エフェソ5:1
	神の完全な愛に覆われている。わたしたちも喜びをもって愛に生きていこう		
10日 （信教の自由）	良心の自由と尊厳	―	子どもカテキズム43, 44
		ヨハネ16:33	ヨハネ16:33
	勝利者である主イエスと共に、信仰の戦いに生きていこう		
17日 レント	主イエスと共に歩む	問34	ウ大教理64－66
		マタイ28:18－20	マタイ28:20
	信仰者の歩みは孤独ではない。主イエスと共に歩み、神の民と共に歩もう		
24日 レント	再臨の約束	問35	ウ小28、ウ大56、ハイデ52
		使徒1:6－11	使徒1:11b
	神の右に座しておられる主イエスが再び来られる。約束の実現を待ち望もう		
3月3日 レント	再臨に備える	問35	ウ小36、ウ大56、ハイデ52
		テトス1:11－15	テトス2:13b
	主の再臨を待ち望み、地上の生を光の子として大切に生きることに励もう		
10日 レント	死のときの祝福	問36	ウ小教理37, 38、ウ大教理84－90
		ヨハネ14:1－3	ヨハネ14:3
	主イエスに結ばれて死ぬことの幸いを知り、恐れから解き放たれて歩もう		
17日 レント	苦難のキリスト	―	子どもカテキズム24
		ルカ23:13－25	イザヤ53:8
	ピラトによって裁かれ、苦しみを負ってくださった主イエスを見つめよう		
24日 受難週	十字架のキリスト	―	子どもカテキズム24
		ルカ23:32－43	ルカ23:43
	十字架上で「楽園」を約束してくださった贖い主キリストを見つめよう		
31日 復活祭	復活のキリスト	―	子どもカテキズム24
		ルカ24:36－49	―コリント15:20
	共に食事をして体の復活を指し示し、平和を与えてくださった主イエスを喜ぼう		

日本キリスト改革派教会中部中会
教会学校教案誌

2013年1・2・3月号
第48号

もくじ

2013年1・2・3月カリキュラム
まえがき…… 久保浩文 ……4
巻頭説教「子育てと聖書」…… 貫洞賢次 ……5
日曜学校・教会学校訪問
　新浦安教会の日曜学校の紹介…… 芦田高之 ……7
編集部からのお知らせ…… 相馬伸郎 …… 12
副読本のご案内…… 13
自由募金のお願い…… 14

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例…… 15
　1月 6日 …… 16
　1月13日 …… 24
　1月20日 …… 32
　1月27日 …… 40
　2月 3日 …… 48
　2月10日 …… 56
　2月17日 …… 64
　2月24日 …… 72
　3月 3日 …… 80
　3月10日 …… 87
　3月17日 …… 95
　3月24日 …… 103
　3月31日 …… 110

2013年4・5・6月カリキュラム …… 117
2013年度年間カリキュラム …… 118
執筆者よりひとこと・あとがき …… 120

まえがき

久保浩文（高知教会牧師）

私の奉仕している四国中会は、その地域性から、少子高齢化の煽りを直接受けている。それは、毎年の礼拝出席者数と受洗者、信仰告白者数の減少という形で表れている。

さらに、高齢化によって、長年、教会役員として教会や伝道所を支えてこられた方々の教会生活が困難になりつつある。次代を担う後継者の確保と育成が大きな課題である。

教会の教育事業といっても、いわゆる信仰告白準備会や求道者への信仰の基本的、基礎的な教理教育、カテキズム教育に終始している感が否めない。一度信仰告白をしてしまうと、あとは一応、一人前の扱いをし、本当は一番大切な、信仰生活、教会生活の基本といった、実践面での教育が十分ではないように思われる。徒らに年数のみが経過して、役員適齢期になったから、という理由で教会役員に選出し、任職就職させている場合が多いと思う。候補者の試問事項である職務についての知識は、候補者に選出されてからでも学ぶことができるが、本人の「信仰と生活」については、一朝一夕にできるものではない。

小会または執事会において、議員は等しく発言権があり、議決権を有してはいるが、それをいかに行使するかが問題である。処理すべき問題の本質を、いかに的確かつ霊的な視点から認識し、世の処世術ではなくして、聖書の真理に照らして、神の御心を問いつつ判断し、処理できる人物が求められている。異教的な文化や習慣が根強く残っている地方こそ、明確な、聖書的、信仰的な判断ができる人材が求められる。このような人材を生み出す、霊性の涵養のための教育事業とプログラム、その一助となる教材が必要である。

私達の改革派教会は、一つの見えざる教会を、信仰告白、教会政治、善き生活をもって一つの見える教会として具現することを主張して六十年の歩みを刻んできた。しかし、信徒一人ひとりが信仰告白を実際の信仰生活において実現する善き生活の具体化とそれを確立するための長老主義政治、となると、必ずしも三者が有機的に機能していない感がする。将来の教会役員の候補者の適正基準が求められるとすれば、まさに、二元論的な生活ではなく、「善き生活」を日々の日常生活の目標としているか否かが大きな分かれ目ではないだろうか。「霊性の変革と涵養」こそが、教育の最重要課題だと思うのである。

そこで、将来の教会役員候補者の養成のための10年計画、プログラムなどを大会規模で作成できないであろうか。その理由は、①各中会のもつ歴史と特異性は尊重しつつ、大会的・中会的な視野に立って判断できる人物の養成を目指すため。②御言葉の教師に、ある一定のレベルの神学的教育が求められているように、長老・執事も職務遂行にあたってのある程度の水準を保つ必要がある。特に私達の教会の信仰基準であるウェストミンスター信仰規準についての誓約が求められ「ゆだねられた群れの中に、教理と道徳の腐敗が生じないように見守る」任務がある以上、役員の資質として、敬虔さと同時に信仰基準に精通していることが求められる。

たとえば、神学校で教会役員候補者のためのカリキュラムを通信教育を含めて開設できないものだろうか。それは「善き生活」を定着させるための方法としても有益だと思う。

巻頭説教

子育てと聖書

貫洞賢次（札幌伝道所宣教教師）

子育てについて、聖書から励ましと導きを得たいと思います。

1. 子育てに、王道はない

子育ては、人生の中で最も困難な課題のひとつです。聖書に登場するすぐれた人物たちでさえ、自分の子供たちを育てることに大きな困難を覚えていました。

〈祭司エリ〉

「エリの息子はならず者で、主を知ろうとしなかった。」（サムエル上2:12）

〈預言者サムエル〉

「サムエルは年老い、イスラエルのために裁きを行う者として息子たちを任命した。長男の名はヨエル、次男の名はアビヤといい、この二人はベエル・シェバで裁きを行った。しかし、この息子たちは父の道を歩まず、不正な利益を求め、賄賂を取って裁きを曲げた。」（サムエル上8:1－3）

〈王ダビデ〉

彼の子アムノンは、腹違いの妹タマルに乱暴をしました。それを怒ったアブサロムは、腹違いの兄アムノンを殺しました。さらにアブサロムは、父ダビデに反逆しました。子育ては、国を治めるよりも困難な務めと言えるかもしれません。見事に国を治めた者たちでさえ、立派に子供を育てることは難しかったのです。

信仰者はもちろん、子育てについても聖書に学び、その教えに従うべきです。しかし、それで万事がうまく行くと考えることはできないでしょう。むしろ、他の事柄と同様に、聖書に従いつつ、悔い改めと信仰をもって主の恵みに依り頼むのみです。安易にまた性急に子育てについての成功、失敗という評価を持ちこむべきではありません。

2. 親の価値観の検討

親が何を賞賛し、何を喜ぶかを、子どもは敏感に感じ取ります。それにしたがって、自分自身の価値を見積もるようになるのではないかと思います。そして、残念ながら、その価値観にはしばしば狂いが生じているのではないかと思います。この狂いを子どもの成長に合わせて悔い改めつつ軌道修正しながら、主の恵みを待ち望むのが、行くべき道ではないでしょうか。

〈容姿の美しさ〉

容姿の美しさは、人々の間で価値を持っています。しかし、聖書が単純にその価値を認めているわけではありません。

「彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。しかし、主はサムエルに言われた。『容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。』」（サムエル上16:7）

「あでやかさは欺き、美しさは空しい。主を畏れる女こそ、たたえられる。」（箴言31:30）

〈能力、人間的魅力〉

能力と人間的魅力もまた、人々の間で大いに価値を認められます。ソロモン王は、そのよう

な人物を代表しています。

「神はソロモンに非常に豊かな知恵と洞察力と海辺の砂浜のような広い心をお授けになった。ソロモンの知恵は東方のどの人の知恵にも、エジプトのいかなる知恵にもまさった。彼はエズラ人エタン、マホルの子らであるヘマン、カルコル、ダルダをしのぐ、最も知恵ある者であり、その名は周りのすべての国々に知れ渡った。彼の語った格言は三千、歌は千五首に達した。彼が樹木について論じれば、レバノン杉から石垣に生えるヒソプにまで及んだ。彼はまた、獣類、鳥類、爬虫類、魚類についても論じた。あらゆる国の民が、ソロモンの知恵をうわさに聞いた全世界の王侯のもとから送られて来て、その知恵に耳を傾けた。」(列王記上5:9－14)

しかし、聖書が彼を単純に認めることはありません。キリストはこう言われました。「栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」(マタイ6:29)

神の国と神の義をまず第一に求める人々が、ソロモンの栄華の光に迷ったままではいけないでしょう。しかし、世は、キリストの御言葉の意味を悟ることはできません。

「自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊によって初めて判断できるからです。」(第一コリント2:14)

3. 親の信仰の成長

ソロモンの才能や魅力や成功を単純に評価する価値観ではなく、神の国の価値観をもって、子どもたちを見る目を持ちたいと思います。主がわたしたちをそのような目を持つものとしてくださいますように。

もし、信仰の父アブラハムが75歳で旅立ってすぐに、子どもを与えられ、その子がソロモンのような子だったとします。そして、100歳を越えたころに、ソロモンの王国が目の前に実現したとします。「ユダとイスラエルの人々は海辺の砂のように数が多かった。彼らは飲み食いして楽しんでいた。」(列王記上4:20) おそらく、アブラハムは、その光景こそ、神の約束の成就であり、神の国の実現だと考えたことでしょう。(創世記22:17) そして、ソロモンを心から誇りとして、何一つためらうことはなかったでしょう。

しかし、試練を通して信仰を訓練されたアブラハムが、ソロモンの栄華に満足することはありえませんでした。「あなたたちの父アブラハムは、わたしの日を見るのを楽しみにしていた。そして、それを見て、喜んだのである。」(ヨハネ8:56)

4. 結語

世の価値観は、見える結果を伴うものであり、想像以上にその影響は強力です。しかし、そのような価値観を心に秘めたままで子どもを育てるなら、信仰による教育はとても複雑なものとなり、子どもを怒らせてしまうのではないでしょうか。「父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい。」(エフェソ6:4)

神の国の価値観をもって子どもを見守りながら、子どもを育てることがこの上なく大切なことです。世の価値観は文句なく栄華をきわめたソロモンを認めます。しかし、神の国の価値観は、十字架につけられたキリストを愛します。そして、世の声や目に振り回されずに、キリストが愛されたように、子どもたちを愛することへと私たちを導きます。「世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。」(第一ヨハネ5:4)

日曜学校・教会学校訪問

新浦安教会の日曜学校の紹介

芦田高之（新浦安教会牧師）

1. 新浦安教会の歴史と立地

新浦安教会は1994年に船橋高根教会の開拓伝道所として伝道が始められました。当初は、船橋高根教会と北米キリスト改革派教会の相互協力関係の中でこの開拓伝道は出発しました。

小池正良牧師、ド・ベルト宣教師夫妻、そして、船橋高根教会が開拓伝道担当長老としてこの開拓伝道に派遣された宇佐美三郎長老が、東京湾岸新興住宅地の新浦安地域にて伝道を開始されました。やがて、この開拓伝道は船橋高根教会所属伝道所から、東部中会記念開拓伝道へと責任の主体が移行しました。2001年のことです。翌年、JR京葉線の電車から見える場所に現在の新会堂が建てられました。2002年のことです。おもに足立正範牧師と宇佐美三郎長老が中心になって、土地取得、新会堂建築という大きな事業を成し遂げました。

その後、2006年6月から私（芦田）が新浦安伝道所宣教教師として奉仕するようになり、2010年、主の恵みにより教会設立へと導かれました。

新浦安教会は東京ディズニーランドから最も近い所にあるキリスト教会です。私が知る限り、新浦安教会よりもディズニーランドに近い所にあるキリスト教会の存在を知りません。東京ディズニーランド外周まで、自動車で5分以内です。また、東京駅まではJR京葉線快速で17分です。そういう立地条件のもとに教会はたてられていますので、新浦安地域住民の年齢層は比較的若いと思います。子どもたちもたくさんいます。

しかし、教会のまわりには小中学校はなく、ちょうど校区から離れている場所に教会は位置しています。通学路でもないので、町全体としては子どもたちが多いのですが、教会を取り巻く環境としては、必ずしも「子どもたちが多いなあ……」という印象はありません。

2. 教会学校の現状

子どもたちへの伝道は、私が赴任するまでの間、北米キリスト改革派教会の宣教師や石井正治郎先生、足立正範先生、そして何より、船橋高根教会から派遣された開拓伝道担当長老の宇佐美三郎長老が、精力的に近隣の子どもたちに働きかけ、町の子どもたちが集まっていました。しかし、無牧の期間がありましたので、日曜学校はお休みしていました。

一度休止した活動を再開するのは思いのほか大変でした。私が赴任してから2006年以降、再開しましたが、なかなか町の子どもたちが集まることは難しく、結局、日曜学校生徒のほとんどは、教会員の子どもたちです。

ここ2〜3年、朝の日曜学校礼拝は5〜7人の子どもたちが出席しています。5〜7名の内訳は幼稚園児1名と小学生5〜6名です。朝の9時30分から10時まで、日曜学校朝礼拝を行っています。もちろん、教材は「教案誌」です。

同じ時間帯に、高校生科、中学生科を同時並行で行っています。現在、月に一度、第一主日は幼稚園児から高校生までが合同で日曜学校礼拝をしています。

小学生の分級は残念ながら今のところ開設していません。理由は、まず、出席する子どもが少ないこと。次に、分級のための部屋を確保できないからです。

また、今現在、私たちの教会の日曜学校に通ってきている教会員の子どもたちは、自分たちの校区以外から教会に来ています。ですから、自分の学校のお友だちを日曜学校に誘って来ることはほとんど無理です。

3. 感謝なこと

そうした中で現在感謝なことは、大学生たちが日曜学校活動に参加し始めたことです。はじめは補助として参加して、日曜学校礼拝の司会などを担当してもらいました。そして、今では日曜学校礼拝のお話（子ども説教）を担当して頂いています。これは本当に感謝なことです。

御言葉のご奉仕に当たるようになった大学生たち自身、子どもたちに仕える喜びを味わいますし、何より、彼ら自身が主の僕として成長・成熟していく上で、この奉仕の場はとても有益だと思います。

子どもたちにとっても、お兄さんお姉さんたちがお話してくれるのを、とても興味深く聞いています。自分たちと年が近い人たちが語るメッセージには、親近感とインパクト、両方があるようです。この子どもたちが、「やがて、自分たちも大きくなったら、このお兄さんお姉さんたちのように、小さな子どもたちに仕える者になって行くんだなあ……。早くそうなりたいなあ……」と、聖なる憧れを持ちつつ、先輩のお兄さんお姉さんたちを見ながら育って行ってほしいと、切に願っています。

4. 課題：内なる課題

今、集まって来ている数名の子どもたちは、教会員あるいは客員の子どもたちです。通常の主の日の朝の礼拝に出席している大人たちの子どもが現状の日曜学校生徒です。

私たちの教会には、大人たちと一緒に通常の主日礼拝に参加している子どもたちが、毎週7～8名います。日曜学校には参加していないけれど、通常の大人と共にささげる主日朝礼拝には参加している……という子どもたちが結構多いのです。そういう子どもたちが、日曜学校にも出席できるようになると、私たちの教会の日曜学校の参加者は今の二倍くらいになるでしょう。

5. 課題：外なる課題

外なる課題は、何と言っても、町の子どもたちとその家庭に対する伝道です。これは、私たちの教会だけが抱えている問題ではないと思います。日本中のキリスト教会が抱えている課題でしょう。今から30年くらい前までは、少なくとも首都圏の教会では、普通に日曜学校を続けるだけで、100人かそれ以上の子どもたちが日曜学校に殺到していたと聞きます。しかし、現代は、遊びや、友だちづき合いの変化、ゲームや塾、習い事、スポーツクラブ等々、子どもたちを取り巻く環境が著しく変化しました。今、教会学校に行くよりも楽しいことは、子どもたちの回りにあふれています。

そういう状況下、私たちは教会の外にいる町の子どもたちやその親、家庭に、どのように福音を伝えて行ったらいいのでしょうか。

今、被災地の二つのボランティア・センターがとても感謝な取り組みを続けてくださっています。宮城県亘理山本にある「のぞみセンター」でも、東仙台教会ボランティア・センターが繰り広げている野蒜・新東名地区でのボランティア活動でも、いずれも、放課後の子どもたちをお預かりして、一緒に遊んだり、勉強のお世

話をしたりして、子どもたちとの関わりを続けています。被災地域の子どもたちにとって、その二つのセンターは、きっと心のよりどころとなっていると思います。

近所の町の子どもたちは、「のぞみセンター」や「東仙台教会ボランティア・センター」のスタッフたちとの「人格と人格が触れ合う関係」を経験しています。そこには、テレビゲームにはない、「人と人とのつながり・ぬくもり」があるのだと思います。これまであまり経験したことのない「なにか」を、二つのボランティア・センターのスタッフたちをとおして、その地域の子どもたちも大人たちも実体験しているのです。

そうしてそういう真実な体と心のぶつかり合いの中で、人と人との信頼関係は築き上げられて行き、やがては、「じゃあ、日曜学校に……、教会の礼拝にも行ってみようか……」という思いへと導かれて行くのでしょう。

この二つのセンターのスタッフがしていてくださっている「放課後のミニストリー」は、実に大事なことを私たちに教えてくれています。口先で神の愛、キリストの愛を伝えても、おこないが伴わないなら、キリストの御人格を人に伝えることはできないでしょう。二つのセンターのスタッフは、時間を割き、体力・気力を使い、愛を注ぎ、子どもたちと一緒に遊び、子どもたちの話を聞いてあげ、子どもたちの勉強を助けてあげ、子どもたちに時間と体と愛を差し出しているのです。だから、毎回、その「放課後のミニストリー（プログラム）」にたくさんの子どもたちが参加しているのです。また、そのご家庭も喜んで子どもたちを託し、そのプログラムへと送ってくださっているのです。

私たち新浦安教会が二つのセンターと同じことをすることは到底できません。でも、テレビゲームでも塾でもスポーツクラブでも提供できない「なにか」を提供できないなら、近隣の町の子どもたちやそのご家庭の信頼を勝ち取ることは難しいでしょう。それができなければ、伝道としての日曜学校活動は衰退の一途をたどるのではないかと思います。

では、私たち新浦安教会では何ができるのか。この町にいる主の民とその子どもたちのために。今のところは、決定的な打開策はありません。時間をささげ、身をささげ、地域の子どもたちに体と心でぶつかり合って行くプログラムを提供するのは、とても難しいことだと思います。

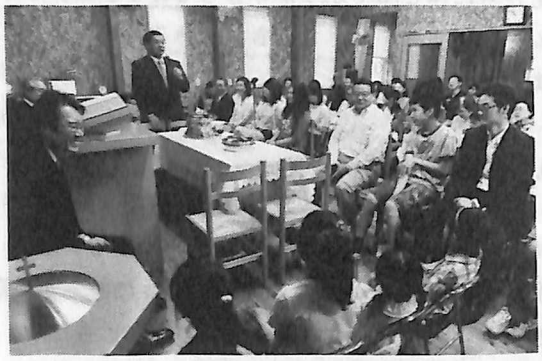
6. 今後の取り組み

ということで、教会の外の子どもたちへのアプローチは、目下非常に難しい状況にあるのが、現在の新浦安教会の実態です。それにしても、通常の主日朝礼拝には、10人近い子どもたちが親と共に参加しています。この「教会内の子どもたち」にいかにすれば更に栄養をより豊かに提供できるか。これも一つの大きな課題です。通常の礼拝時における「子どもへの教育」が一つのカギだと私は考えています。この教案誌は、日曜学校（教会学校）のためのものですので、以下、私が述べることは趣旨に反することかもしれませんが、打開策の一つとなりうるかもしれない……という思いでお読みいただけると感謝です。

私たちの新浦安教会の日曜学校は、残念ながら、今のところ教会の外の地域の子どもたちの参加はほぼゼロです。このことは伝道の課題として常に取り組み続ける必要があるのですが、現状においては、教会の中にいる子どもたちへの教育にさらに力を入れてはどうかと考えています。

通常の礼拝時、私たちの教会では大人に対する説教の前に「子どもメッセージ」を導入しています。私なり長老なりが輪番で行っています。5分程度の短いお話を幼稚園児から小学校低学年の子どもたちを対象に行っています。もちろ

んそれを大人も聞いています。なるべく子どもも大人と一緒に主の日の通常の礼拝に礼拝者として参加できるようにと、教会としては配慮しています。信仰問答や讃美歌は、字が読める子どもたちは大人と一緒に参加できるように、ひらがなで子ども用の週報プログラムを作ったりしています。



その結果、子どもたちの多くが賛美や信仰告白で大人に加わって礼拝に参加するようになりました。大人への説教前の子どもメッセージも、大人だけが主の日の礼拝に招かれているのではなく、子どももまた主が招いてくださっている事実を、子どもも大人も共に確認し合う時と場となっています。

しかし、やはり、大人への説教の時間になると子どもたちは、別の本を開いたりして、その時間帯は「過ぎ行くのを静かに待つのみ」というのが現状です。やっと中学生くらいになって礼拝説教を聞く子どもが出て来るくらいでしょうか。

そこで、実際におこなってはいませんが、一つの可能性を探っています。それは、通常の礼拝時、子どもメッセージが終わり、大人への説教が始まったなら、3歳～小学校2、3年までの子どもたちは、別室にて特別な教育プログラムを用意することです。その内容は、教案誌を用いたらいいかもしれません。就学前の子どもたちと小学年少の二つくらいのプログラムを用意して、礼拝説教時、だいたい30～40分、子どもたちへの別プログラムを提供する、というものです。

アメリカの教会などでは恒常的にこのスタイルで子どもたちが養われて行っています。しかし、日本ではまだそのようなプログラムを実践している教会は多くはないと思います。問題はスタッフです。いかにスタッフを確保できるかです。スタッフとなる教会員もまた礼拝説教で自らが養われる必要があります。ですから、毎週のようにスタッフとして子どものお世話をすることは、その方々の信仰の養いのためにはあまりに大きな犠牲です。

スタッフが10人以上確保できれば、毎週のように2～3人のスタッフで子どもたちに信仰的な別プログラムを大人の説教時に提供できます。しかも、そのための奉仕が月に一度くらいで大丈夫です。でも、現住陪餐会員50名程度の教会でそのためのスタッフを10名以上確保するのは至難です。そうなると、礼拝説教時の子どものための別プログラムを用意するのは、現在の新浦安教会では、出来たとしても月に一度くらいでしょうか。しかし、これは教会の中ではまだ議論が始められたばかりのことです。

このことが実現したとすると、幼稚科と小学下級科くらいまでは、日曜学校のプログラムが通常の礼拝に組み込まれることになります。しかし、小学校上級科に対しては、やはり彼らに見合ったプログラムが別途必要です。

7. 今後の新浦安教会日曜学校のあり方

日曜学校は、(1) 教会の外の町の子どもたちを対象とするか、(2) 教会内の契約の子たちが必然的に対象となるのか、それとも (3) 教会の外の子どもたちと教会の中の契約の子どもたち両方が対象となるのか。この三つの形態が考えられるでしょう。

現在の新浦安教会は (2) の「教会内の契約の子たち」が日曜学校の対象となっていますの

で、上記のような「今後の取り組み」も考えられるようになりました。

たえず教会の外にいる子どもたちを招き続ける方策を練りつつ、祈りつつ歩む。他方、実際には現在集められている契約の子たちが、いかに礼拝者・信仰者として成長していくようにと教育プログラムを整えて行くか。「これだ！」という決定打を持たぬまま、「何とかしなくては……」という思いと格闘している。これが偽らざる現状です。

8. 最近のトピックス

10月のよく晴れた日。日曜学校主催のBBQ（バーベキュー）大会を海の見える広い公園で開催しました。子どもたちはお友達を誘って、大人たちは孫を連れて、息子家族を連れて、普段来られない御主人を誘って、総勢59名の参加者が与えられ、ある意味、特別伝道集会のようなひと時でした。日曜学校に集う子どもたちの数は決して多くはありませんが、多くの大人たちの祈りと支えと協力に囲まれて育てられている子どもたちです。

編集部からのお知らせ

相馬伸郎（中部中会日曜学校委員会委員長、教案誌編集長）

弊誌は、2001年4月に創刊号を刊行していらい、第48号まで継続して発行して参ることができました。この企ては、そもそも有志の奉仕者の志にもとづき、出発いたしました。有志で始めたものを中会で拾い上げるというのは、日本キリスト改革派教会の中では、珍しい体制であったかと思います。あれから、ほぼ12年間、途切れることなく発行することができました。これは、皆さまのお祈りと用いて下さる諸教会の子どもの教会の教師の皆さまのご支援の賜物であると思います。採用してくださっている教会、伝道所は70余を数え、定期購読部数は312部となっています。わずかですが、他教派の教会でも定期購読されています。経済的にも、ほぼ半年先までの見通しが立てられ、安定的に支えられております。心から感謝を申し上げます。

このように記すと、大変、順調のように思われるかもしれません。しかし、実は、私ども編集部は、現在のカテキズムカリキュラムが終了する2013年度の第52号、つまり2014年3月で休刊、もしくは廃刊せざるを得ない状況にあります。その最大の理由は、2013年4月、編集実務者としてすばらしい賜物をもって奉仕を担ってくださっていたひとりの教師が退かれることとなるからです。弊誌は、この有能な編集者の奉仕に大きく支えられてまいりました。それは逆に、この奉仕者を欠いたまま発行を維持することは、残念ながら、不可能であることを意味します。

ただし、二年間のカテキズムカリキュラムを終えるまでは、変則的な形を余儀なくされると思いますが、継続発行を堅く決意しています。

具体的には、分級展開例部分をこれまでのように、幼稚科・小学科下級・上級・中学科をすべて毎回掲載することを休止します。各号、一人の執筆者に分級展開例を担っていただき、任意の選択によって、毎号一つのクラスだけを掲載することといたします。

皆様には、ぜひ、この一年の内に、新しい編集実務者が起こされることを、お祈りくださるようにお願いいたします。

なお、私自身も12年間、編集長という立場で奉仕を継続しています。これまで何度か、交代を願ってまいりましたが、かないませんでした。現在の教会学校教案誌じしんをさらによきものとするために、編集長の交代が必須であると考えて来たからです。

日本キリスト改革派教会につらなるすべての教師、長老、執事、その他特に女性信徒、特に子どもの教会の教師や重荷をもって取り組んでおられる会員の皆様に、編集部に加わっていただき、何よりも編集実務の奉仕そして編集長の奉仕を担って下さる方を心から募集いたします。また、ふさわしい方をぜひご紹介ください。具体的なことは、ぜひ、編集部までお気軽に声をかけてください。

第57回定期大会において教育委員会から、私どもの教案誌を大会として刊行する提案が出され、継続審議となり、第58回定期大会では、提案は取り下げられました。あれから10年。定期刊行物としての教会学校教案誌がなくなることは、どのような意味を持つのでしょうか。皆様のお知恵をお借りしたいと思います。何よりも奉仕者が起こされるように、お祈り下さい。

Soli Deo Gloria !

（名古屋岩の上伝道所宣教教師）

副読本のご案内

『主は羊飼い―中高生のための教理入門―』

価　格　800円
著　者　木下裕也
（名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師）

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的――神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問１を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました―わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことなってくるのではないでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問１を見ましょう。

問　人のおもな目的は何であるか。
答　人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーヴ教会信仰問答の問１はこうです。

問　人生の目的は何ですか。
答　神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりでです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための
自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあがめます。

中部中会日曜学校委員会（2007年４月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年４月に始まり、すでに12年目に入り、第48号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円／年
送 金 先	郵便振替　伊藤治郎 00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

1月6日　キリストとの結合　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 15章1〜5節
子どもカテキズム　問30
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問29〜32
ハイデルベルク信仰問答 問86

問30　神さまの恵みは、どのようにして私たちに与えられますか。
答　聖霊なる神さまが私たちに信仰を与え、
私たちを主イエス・キリストと一つに結び合わせてくださることによってです。

〈聖書テキストの解説〉

主イエス・キリストの有名なたとえによる教説の一つである。主イエスは、父なる神さまを農夫に（1節）、そして、ご自分と信じる者との関係をぶどうの木とその枝とにたとえられた（5節）。旧約聖書では、ぶどうの木が神の民イスラエルにたとえられることがある（詩編80）。

ところで、ぶどうの学名（Vitis）には「結ぶ」という意味があり、それは、ぶどうの木、特につるが他の物にからみつく性質があるからと言われている（『新聖書辞典』、いのちのことば社）。地中海沿岸地方では、日本のような棚作りとは違い、垣作りだそうだが、石垣につるが絡んで、そこにたくさんのぶどうの実がなっている光景を見かける。主イエスは、そのようなぶどうの木（つる）にご自分をたとえられた。

主イエスがぶどうのつるであるというたとえには、主イエスがまず罪の状態に堕落している私たちに絡みつき、ご自分に結びつけて救いの状態へと引き上げてくださらなければ、救いのないことがよく示されている。

本来、私たちは、主イエスというぶどうの木の枝（つる）ではあり得ない。しかし、主イエスが私たちに結びついてくださるならば、私たちも枝（つる）とされる。そして、豊かに実を結ぶ。その際、父なる神さまが豊かな実を結ぶようにと手入れをしてくださる（2節）。余分な枝葉をきれいに刈り込んでくださる。それは、父なる神さまが御言葉によって罪と汚れから清めてくださるということである（3節）。逆に実を結ぶことがないならば、父なる神さまが取り除かれる、と厳しいことが言われている。具体的には、イエスさまを信じていると言いながら、隣人を憎むという悪い実を結んでいる人を父なる神さまが取り除かれることが、17節まで読み進むと分かる。

主イエスというぶどうの木につながって豊かに結ぶ大きな実の一つは隣人愛である。この隣人愛の実は、主イエスとつながらなければ結ぶことは決してない（4,5節）。また、主イエスにつながるならば必ず豊かにその実を結ぶ。隣人愛の源、主イエスにつながって愛の枝（つる）とされてこそ、私たちも、隣人に向かって伸びていける。

〈子どもカテキズムの解説〉

「キリストとの結合」は、私たち罪人の救いの中心、あらゆる益に生かされる要である。

主イエス・キリストは、その地上のご生涯において、特に十字架の死からの復活において、私たちの罪からの救いに必要な全てのものを獲得して下さった。そして、天に昇られて、今は、天の王座に全世界の真の王として君臨しておられる。その主イエスにこそ、私たちの救いとあらゆる益が満ち溢れている。主イエスこそ、私たちの救いとあらゆる益の源である。ところが、私たちが主イエスからかけ離れた存在である限り、救いとあらゆる益は私たちのものとはならない。

天におられる主イエスが獲得してくださった救いとあらゆる益をこの地上の私たちにもたらすために、聖霊なる神さまは降っておいでになった。それで、今日、聖霊なる神さまは、私たちに主イエスを信じる信仰を起こし、その信仰を絆として、地上の私たちを天上の主イエスと結びつけてくだ

さり、救いとあらゆる益をお与えくださる。何よりも、聖霊なる神さまご自身が、主イエスと私たちとの切っても切れない絆となってくださる。

主イエスに結びつけられることで与えられる救いと益の数々を『ウェストミンスター小教理問答』で確認しておきたい。「問32　有効に召命される人々は、この世において、どのような益にあずかるのですか。／答　有効に召命される人々は、この世において、義認、子とすること、聖化、またこの世においてそれらに伴い、あるいはそれらから生じる、さまざまな益、にあずかります」（松谷好明訳、一麦出版社）。

〈黙想〉

テレビのあるクイズ番組を見ていたら、オレンジ類なのに、どうしてグレープ・フルーツと言うのか？　その意味をはじめて知った。オレンジ類の中でも、グレープ・フルーツは、ぶどうの房のようにまとまって実がなるからだそうである。主イエスは、ご自分のことをぶどうの木に、そして、私たちのことをそれにつながる枝（つる）にたとえられた。そして、主イエスは、ご自分につながるならば、豊かな実を結ぶと約束してくださった。少し欲張りかも知れないが、グレープ・フルーツのように大きな実が結んだら良いのにといつも思わされる。

さて、聖霊なる神さまが信仰を絆として主イエスに結びつけて下さることで、私たちに生じる実は本当に豊かである。それは、『ウェストミンスター小教理問答』問32によると、義認・子とすること・聖化、そして、それらに伴いそれらから生じるさまざまな益と、簡潔に表現できるが、救いの恵みへの感謝の応答として、やはり、恵みとして与えられる善い業の中でも最大のものは愛ではなかろうか。使徒パウロは、聖霊なる神さまによって主イエスに結びつけられて生じる実を列記している。「これに対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません」（ガラテヤ5:22,23）。愛が筆頭に挙げられている。さらに別の箇所で、「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」（コリントー13:13）と言っているぐらいである。

主イエスから愛を与えられるならば、愛という大きな実を結び、隣人愛という善い業となる。主イエスからの愛は、自分自身で独り占めしておくことができず、隣人へと及ばざるを得ない。救いの恵みへの感謝の応答としての愛の業を巡って、私の心にある信仰の言葉を書き留めておく。それは、『ハイデルベルク信仰問答』の問86である。「第86問　それでは、わたしたちが、一切の、わたしたちの功績なしに、ただ、キリストの恩恵によってのみ、悲惨から救い出されたのであれば、なぜ、わたしたちは、善き業を為さねばならないのでしょうか。／答　キリストは、尊い御血潮をもって、わたしたちを贖い出してくださったのち、聖霊によって、わたしたちを新しくし、ご自身の像（かたち）に似る者としてくださったからであります。それは、わたしたちが、この恵みに対して、全生活をもって、神に感謝を示し、わたしたちによって、神があがめられるためであります。さらにまた、わたしたち一人一人が、自分の信仰を、その結ぶ実によって、いっそう確信し、わたしたちの祝福された行いによって、隣人をも、キリストのもとに、導くためであります」（春名純人訳、神戸改革派神学校出版局）。私たちの隣人愛の業を通して、主イエスが隣人におぼえられることを願いながら、主イエスの愛の手となり、足となりたい。

〈子どもたちに対して〉

主イエス・キリストに結ばれて、私たちに生じるぶどうの実は、多様である。ぶどうの房にたくさんの実がついているようにである。今回の教理は、聖書テキストのぶどうの木のたとえを用いるならば、子どもたちにとってイメージしやすいだろう。さらに視覚教材を用いるならば、幼児にも、よりイメージしやすくなるのではないか。たとえば、ぶどうの房を絵に描いて、ぶどうの実一つ一つに救いとさまざまな益の数々を書き入れて説教したら、どうだろうか。

（長谷川潤）

1月6日　キリストとの結合　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 15章1〜5節
子どもカテキズム　問30

〔単元のねらい〕

「キリストとの結合」の教理は、救いの教理の要である。そのような教理を年頭に取り上げることのできる幸いを感謝したい。子どもたちが、特に聖書テキストを通して、「キリストとの結合」を具体的にイメージできるように。「教理説教のための聖書黙想」の〈子どもたちに対して〉でも言及したが、ぶどうの房を絵に描くなどして、視覚教材として用いることができれば、より具体的にイメージできるであろう。

今年も主イエスにしっかりつながろう！

愛するお友だち、おはようございます。そして、今日は、2013年最初の日曜日、神さまを礼拝する主の日で、今年はじめて顔をあわせるお友だちもいるので、もう一度、年のはじめのごあいさつをしましょうね。明けましておめでとうございます。

さて、みんなは、それぞれに一年のはじめですから、今年一年の天のお父さまへのお願いがあるかと思います。ミーちゃんはどんなお願いを天のお父さまにしましたか？

……。

秘密かな？　それならば、先生のお願いをみんなにお話ししましょうね。先生は、何をお願いしたかというと、今年も、イエスさまにしっかりつながっていることができますようにって、お願いしました。だって、イエスさまがこう教えてくださったからです。『わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである』(ヨハネ15:4,5)。イエスさまは、ご自分にしっかりつながっていれば、豊かな実を結ぶって約束してくださいました。だから、今年も、イエスさまにしっかりつながって、このぶどうの房のように、たくさんの良い実ができますようにってお願いしたの。そして、ちょっと先生、欲張ってしまいました。お金なんかだったら欲張ったら大変な目にあうけれど、イエスさまにつながって与えられる良い実だったら、別に問題はないのではないかと先生、思っています。みんな、グレープ・フルーツ好き？　先生も大好きなんですが、グレープ・フルーツというのは、木にぶどうの房のようにまとまってできるんだって。だから、オレンジなのに、グレープ（ぶどう）・フルーツって呼ばれるの。そんなグレープ・フルーツのように大きな良い実が与えられたらなと思っています。

それは、どんな大きな良い実かというと、人を愛することです。そして、人を愛することも、お家の人やお友だちを愛することだけではありません。自分の嫌いな人とか、自分に意地悪する人も愛せるようにということです。普通、たとえば、自分に意地悪するような人は、憎んだり、無視したりすると思いますが、先生は、イエスさまのお弟子の一人だから、いつも、イエスさまの教えが心に響いて来ます。『しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正

しくない者にも雨を降らせてくださるからである。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか。徴税人でも、同じことをしているではないか。自分の兄弟にだけ挨拶したところで、どんな優れたことをしたことになろうか。異邦人でさえ、同じことをしているではないか。だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい』(マタイ5:44－48)。敵をも愛するというのは、何か特別なことをするかのように思ってしまいますが、そういう場合もあるでしょう。でも、イエスさまがおっしゃっているように、その人のためにお祈りする。その人がもうこれ以上、人を言葉で殺すような罪(悪口)を犯すことがないように天のお父さまにお祈りするだけでも良いのです。

こんなに大きな愛は、イエスさまにしかありません。私たち、ぼくたちの誰も、こんな大きな愛は持っていないのです。ですから、敵ならば憎んでしまうのです。しかし、イエスさまは違います。イエスさまは、ご自分を十字架にはりつけにした人たちを愛されました。そして、天のお父さまにお祈りされました。『父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです』(ルカ23:34)。そして、何よりも、イエスさまは、ご自分に背中を向けている全ての人のために、十字架にかかって死んでくださったのです。全ての人のために身代わりで死ぬことで、天のお父さまが全ての人の罪を赦してくださるためにです。それは、ここにいるみんなのためにもです。

そういう大きな、大きな愛を持っておられるイエスさまに結びつくことができるんだね。どうやってかというと、今日の『子どもカテキズム』の問30にあるように、聖霊なる神さまが、イエスさまを信じる信仰を与えて、地上にいる私たち、ぼくたちを天におられるイエスさまと結びつけてくださるの。それで、イエスさまは、ご自分のことをぶどうの木にたとえられました。ぶどうの木を見たことあるかな？ ぶどうの木の枝、つるって言うのだけれど、つるは、どんどんどんどん伸びていって、いろんな物に絡みつくの。そのようにイエスさまも、イエスさまの側から私たち、ぼくたちに救いの御手(聖霊なる神さま)を差しのべてくださって、私たち、ぼくたちに結びついてくださるんだね。そして、私たち、ぼくたちをご自分のつるの一部にしてくださって、私たち、ぼくたちに、ご自分にある、大きな、大きな愛をくださるの。愛ばかりではありません。人を愛するのは、救いの恵みへの感謝だから、何よりも、罪を赦してくださったり、神さまの子どもとしてくださったり、罪と汚れをきれいにしてくださったりと、救いの恵みをお与えくださるのです。ですから、イエスさまにしっかりつながって与えられる実は、本当に豊かです。

イエスさまにしっかりつながるためには、イエスさまをしっかり信じることです。そのために大事なことは、今年も、こどもの教会(日曜学校)で、イエスさまのことを聖書の御言葉からよく知って、そのイエスさまに信頼することです。そして、何よりも、イエスさまにいよいよ信頼できるように、聖霊なる神さまのお働きをお祈りすることです。だって、聖霊なる神さまが、信仰によって、私たち、ぼくたちをイエスさまと結びつけてくださるからです。

今年も、毎週日曜日、こどもの教会(日曜学校)で、聖書の御言葉に聴いて、お祈りするみんなの生活が豊かに祝福されますように。聖霊なる神さまが、みんなをしっかりとイエスさまに結びつけてくださって、ひとりひとりに大きな良い実がたくさん結びますように。 (長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕 ヨハネによる福音書 15章5節

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。
人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、
その人は豊かに実を結ぶ。

1月6日　キリストとの結合　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまとつながっていようと、心に決めて過ごせるように。

〈展開例〉

みなさんはブドウを食べたことありますか。(ブドウの絵を見せる。)

それでは、ブドウの木を見たことはありますか。(ブドウの木の絵を見せる。)

イエスさまは、ご自分はブドウの木、天の父なる神さまはブドウ園の農夫、わたしたちはブドウの枝だとお話なさいました。枝は木につながっていなければ枯れてしまいます。つながっていれば、美味しいブドウの実を結ぶことができます。みなさんはイエスさまにつながって、ブドウの実を結びたいですか。今年一年もイエスさまにつながって、実を結びましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、今年もイエスさまにつながって、実を結ぶことができますように導いてください。アーメン。

〈工作〉

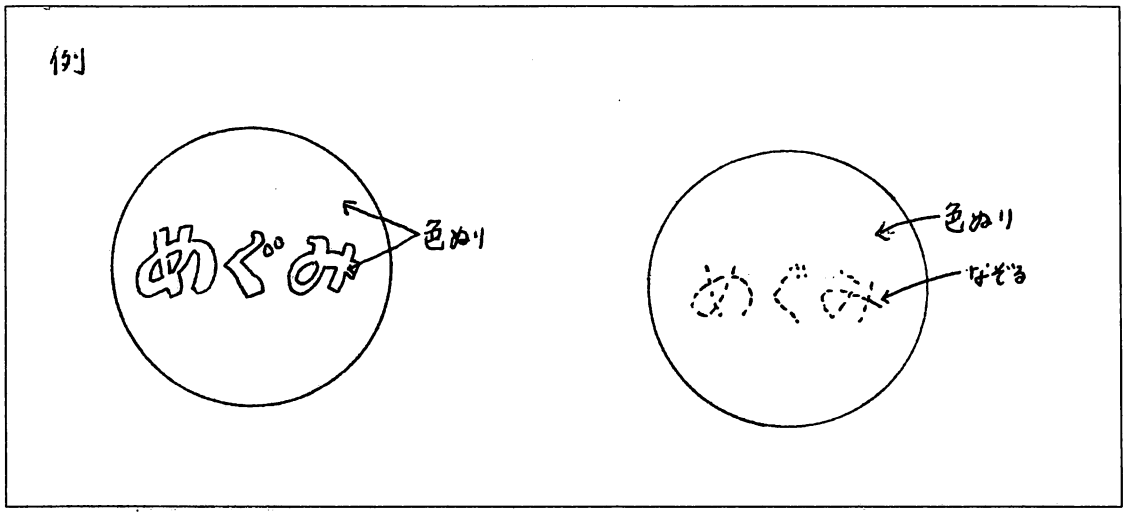
ブドウの木を作り、壁に貼る。

子どもたちには、その木に貼れるようにブドウの実を円で作り、名前を書く。

名前の書けない子どもには、名前を色塗り出来るよう準備する。

字の練習中の子どもには、自分の名前を書く練習用に薄くなぞれるよう準備する。

円の縁は紫や赤や黄緑で塗らせるか、塗っておく。



1月6日　キリストとの結合　小学科下級

〈主旨〉

聖霊なる神が、イエス・キリストとの結合を最後まで守りぬいてくださる。(ウエストミンスター信仰告白17章1節参照)

〈展開例〉(ヨハネ15章5節を中心に)

○新しい年、みんなの目標は何かな？(教師自身のことも言っても良い)

それを頑張ってできたとき、「実を結ぶ」って言ったりするんだよ。今日の聖書の箇所にも出てきたね(ヨハネ15:5)。またみんなで読んでみよう……。

ここには「豊かに」実を結ぶって書いてあるね。この実はさっきみんなが言ってくれた目標よりもっともっと大きな実のことなんだ。神様からみんなへ「ずーっと大切にするよ」という実、目には見えないけど一番大切な実なんだ。

○でもここにはその実を結ぶための条件が書いてあるよね。何と書いてあるかな？(イエス様とつながっていること)

○じゃあイエス様とつながるためには何をしたらよいと思う？(教会、礼拝、聖書……)

そうだね。教会に来たり、聖書を読んだり、お祈りしたり、いろいろあるね。

これからも毎週頑張って教会に来て、毎日頑張って聖書を読んだり、お祈りしたり、友達のために良いことをしましょう！

○……っていつもできているかな？

実は、私たちが教会に来たり、聖書を読んだり、お祈りしたりしてイエス様とつながっていられるのは、聖霊なる神様が頑張ってくださっているからなんだ。私たちの心を動かして、同時に私たちの思いもちゃんと尊重して、教会へ導いて、イエス様にちゃんと結びつけてくださっているんだよ。

不安で不安でしょうがない時、怖くて怖くてしょうがない時……、いろんな時があって、祈りさえ忘れてしまいそうになる時にも、この聖霊なる神様がちゃんと祈ってくださっているんだ(ローマ8:26)。

みんなの目標や夢は、毎年のようにころころ変わるかもしれないけれど、神様の目標は変わらないよ。それは私たちを「ずーっと大切にするよ」という目標。この豊かな実を神様に感謝してみんなで分け合っていこうね。

〈祈り〉

(手をつないで祈ってもいいかもしれない)

神様。私たちをイエス様に結びつけてくださってありがとうございます。私たちが離れそうになる時も、聖霊なる神様がちゃんと手を握っていてくださっていること、ありがとうございます。どうかあなたが私たちを大切にしてくださっているという実を友達と分け合って、一緒に楽しむことができますように。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

1月6日　キリストとの結合　小学科上級

〈ねらい〉

新年、初めての教会学校です。

私たちが神様に繋がっていることの意味と大切さを考え、今年一年、日々の歩みの中でそのことを願い、神様に導いていただけるように祈り合いたい。

〈展開例〉

1. イエス様はぶどうの木、父なる神様は農夫、私たちは枝である

私たちは罪に汚れた者です。イエス様の十字架の救いによって、悲惨な状態から引き上げていただいた。本来ならば、イエス様というぶどうの木の枝に私たちはなりえない。ただ父なる神様の一方的なお恵みによって、私たちは枝としてイエス様につながっている。ぶどうの木が地中から吸い上げた養分や水分を枝に送り込み、枝は成長してやがて実を結ぶ。それと同じように私たちもイエス様につながってイエス様から霊の栄養をいただき、良い実を結ぶ。

ぶどうを育てる農夫は、良い実がなるようにぶどうの木の手入れをしたり、せっかく大きくなった実が途中で落ちてしまったり、鳥に食べられたりしないように実を守る。それと同じように、父なる神様は私たちが良い実を結ぶことが出来るように、御言葉によって罪からきよめてくださり、聖霊なる神様は私たちがイエス様につながっていられるように助けてくださる。

2. 良い実を結ぶということはどういうことか

イエス様という素晴らしいぶどうの木につながっている枝である私たち。

「良い実を結ぶ」ということはどういうことか、生徒たちに問いかけて考えさせてみる。その上でガラテヤ書5章22、23節を読み、神様によって結ぶことの出来るたくさんの「良い実」について具体的に話してみる。

なかでも一番大切なことは、「隣人愛」の実を結ぶことであることを、第一コリント13章13節を読むことで確認する。

3. 「実をむすばない枝」「悪い実」

イエス様にしっかりつながっていれば良い実を結ぶはずである。しかし、私たちは弱く罪にけがれている。ちょっとした心の隙から、イエス様につながっていることが出来なくなったり、悪い実を結ぶ時がある。父なる神様は「実を結ばない枝」は取り除かれると聖書に書いてある。

2、6節の「悪い実」とは具体的に何であるか。私たちは、どうしたらイエス様につながっていることが出来るのか。どうしたら、「実を結ばない枝」「悪い実がむすぶ枝」にならずに、「良い実を結ぶ枝」となることが出来るのか、生徒に問いかけ、話し合う。

〈祈り〉

神様、罪に汚れた私たちを悲惨な状態から引き上げ、イエス様につなげてくださり本当にありがとうございます。

どうぞこの一年、あなたにつながり続け、良い実を結ぶことが出来るように助けてください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

1月6日　キリストとの結合　中学科

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

イエス様は私たちのために死んでよみがえってくださり、救いの祝福を手に入れてくださいました。では、それはどのようにして私たちのものとなるのでしょうか。それは私たちの努力によって勝ち取ることができるものではなく、聖霊が私たち一人一人にふさわしく「あてはめる」という仕方で、神が「分け与えてくださる」無償のプレゼントなのです。では、「あてはめる」とは、具体的にはどういうことでしょうか。

○信仰を起こす聖霊のお働き

「あてはめる」とは、まず私たちの心に「信仰を起こす」ことです。キリストが私の救い主であると受け入れ、彼にまったく信頼するようにと、聖霊が私たちの心を整えてくださいます。このお働きがなければ、私たちにはキリストを「信じる」ことなどできません。

「私は疑い深くて、どうも信じる決断をすることができない」と嘆いていらっしゃる方がいても、仕方ないことです。神との関係が根本的に歪んでいる私たちは、もう誰一人として、純朴にキリストを信じ従うことなどできません。でも、そんな私たちに主を「信じる」心を起こしてくださるのも、また神の恵みなのです。

「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。」(エフェソ2:8)

○有効召命においてキリストに結びつける

「あてはめる」とはまた「有効召命においてキリストに結びつける」ことです。「召命 calling」とは、神に呼びかけられ招かれることです。私たちの救いの道は、私たちが神を呼ぶことからではなく、神が私たちを呼んでくださることから始まります。

その呼びかけは広く全人類になされますが、救いに選ばれている者は、特別に「有効＝効果的effective」な「召命」によって聖霊にがっちりととらえられ、キリストと強く結びつけられます。このキリストとの「神秘的結合」(カルヴァン)によって、私たちはキリストの義・聖・命・勝利・愛……にあずかる「新しい人(Ⅱコリ5:17)」としての歩みを始めることができるのです

みんなはバラの接木って知っていますか。お店で売られているバラの苗は、ほとんどが接木苗です。丈夫なノイバラの木に、色んな品種を接木するのです。そうすると、ノイバラの丈夫さにあずかって、弱い品種でも丈夫に育つようになります。バラだけでなく、トマトでもスイカでも、そんな風に接木して育てるのですよ。(可能なら、苗を購入して見せてあげては？)

わたしたちはみんな、聖霊によって、イエス様に接木されていると考えるといいですね。罪深く、弱く貧しい私たちが、義であり聖であり、愛に満ちて力強いイエス様に結び付けられることで、義とされ、だんだんきよくされ、イエス様に似せられて、愛と力を得ることができるようになります。

1月13日　罪の赦しと義認　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 18章9〜14節
子どもカテキズム　問31

問31　救いとは何ですか。
答　神さまの子どもとされることです。
そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。
ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、
「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

〈ファリサイ人と徴税人〉

このたとえを、主イエスはとくにファリサイ人たちに向けてお語りになったと言われています(9節の「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」とはファリサイ人たちをさすと見てよいでしょう)。主イエスの福音とファリサイ人たちの信仰理解の違いがきわだって反映されている箇所のひとつであると思います。換言すれば、ここに福音の恵みの秩序が鮮やかに語られているということです。

主イエスはファリサイ人をお認めにはなりませんでした。彼は決して悪い人ではなく、むしろ良心的に救いを求め、救いを得るために努力していた人であったでしょう。熱心に律法の戒めに聞き従おうとしていた人であったでしょう。

一方、徴税人は事実悪いことをして、その罪に責められていたのではないかと思います（徴税人がいかに悪名高い職業であったのかはよく知られています)。事実、彼の神殿での姿はみじめでした。けれども主イエスは、義とされたのは（ファリサイ人でなく）この徴税人であると仰せになりました。ここに福音の逆説があります。

ファリサイ人と徴税人との相違はどこにあったのでしょうか。ファリサイ人には（祈りをしていたにもかかわらず）神が見えていませんでした。彼の関心は自分がどのようであり、自分が他人と比べていかにすぐれた人間であるかという点にありました。そして、立派な行いに生きることができる自分とそうでない人々とを区別し、分離(「ファリサイ」とは「分離」の意）していました。けれども、そのように自分を誇り、他人を見下す罪に彼は気づかなかったのです。

一方徴税人は、神の前での人間の罪と悲惨を自覚していました。神の御目からすれば、すべての人間は罪人です。人間の真相は神の光のもとでこそあらわにされるからです。

神の前に立たなければ、人は自分の罪を認識することができません。罪の自覚は神のもとでこそ与えられます。罪を知らされることも恵みです。自分の罪に泣き、自分の惨めさを嘆くことができるなら、人は救いに近いのです。

〈神の憐れみ〉

神はご自身のあわれみによって罪人を救ってくださいます。わたしたちは自分を繕わず、覆いをかけず、みじめな罪人のままで主イエスの招きにこたえたらよいのです。主イエスがわたしたちを義と主イエス、子とし、聖としてくださるからです。

「神はわれわれに仰せになる。『あなたは救いなき罪人である。あなたを愛したもうわたしのもとへ、ありのままの罪人として来たれ』。神は、罪人に祝福を与えるためにあなたのもとに来たりたもうた。喜び、喜べ—これが福音の恵みなのである。あなたは神の前に自分を隠すことはできない。神の前では、あなたが人の前でかぶっているマスクは役に立たない。あなたは、あたかも罪がないかのように、自分自身とあなたの兄弟とをあざむく必要はもはやない。あなたは罪人であることをゆるされる。あらゆる見せかけはキリストの前では終止符を打たれた。罪人の悲惨さと神の憐れみ、これがイエス・キリストにおける福音の真理で

あった。教会がこの真理に生きるために、主は弟子たちに、罪の告白を聞き、キリストの名によって罪をゆるす権威を与えたもうたのである」(D・ボンヘッファー『共に生きる生活』)。

〈信仰による義〉

「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」(ローマの信徒への手紙1章17節)。

この「神の義」とは能動的な義ではなく、受け身の義であったとの「文法的発見」によって宗教改革の口火が切られたことはよく知られています。神の義とは人がみずから獲得しなければならないものではなく、人が神から譲り受ける義です。

イエス・キリストは十字架に死んで、わたしたちの身代わりに罪の報酬を支払われることによって、神の前に義と認められました。そしてキリストはご自身がかちとられた義を、無力な罪人にそのままプレゼントしてくださったのです。上等の上着を着せてくださるようにして、わたしたちにまとわせてくださったのです。そして、これをあたかも私たち自身がかちとった義であるかのように見なしてくださったのです。

神はひとり子イエス・キリストを通して、わたしたちが救いを受けることに必要なすべてをなしとげてくださいました。わたしたちはこの大いなる贈り物を感謝して受け取るなら、それでよいのです。マルティン・ルターが発見したのはこの事実です。このことによってルターは神が恵みの神であられることを知ったのです。この福音の再発見は、ルターひとりを救っただけではありません。世界中の人々をキリストの救いの恵みと自由のもとにときはなつことになったのです。わたしたちも今、同じ恵みと喜び、また自由のもとにあるのです。

(木下裕也)

お祈りしましょう

1月13日　罪の赦しと義認　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 18章9〜14節
子どもカテキズム　問31

〔単元のねらい〕

「罪の赦しと義認」のテキストとして「ファリサイ派の人と徴税人のたとえ」を選んだ。よく知られた聖書箇所である。そして、ここには福音の真理が明瞭に語り示されている。それだけに、つねにここに語られていることに立ち帰るべきではないだろうか。このたとえは、まさにわたしたち自身のことを問うているのである。そのことを覚えるとき、わたしたちも福音の恵みに近くあることを覚えたい。

神さまの憐れみ

ふたりの人が、神さまにお祈りするために神殿に上りました。ひとりはファリサイ人、もうひとりは徴税人です。

ファリサイ人は立って、こう祈りました。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています」(11〜12節)。

立派な祈りです。ファリサイ人は胸を張ってこのように祈ったのです。この人は確かに立派な人でした。罪を犯さないように、愚かな人にならないようにといつも気をつけていました。律法の戒めにも忠実に従っていました。いや、律法の求め以上に断食し、献金していました。そして、ファリサイ人はそのように神さまの戒めを十二分に守り行うことのできる自分を誇りに思っていました。

けれども、イエスさまはファリサイ人のお祈りをお喜びにはなりませんでした。こんなに立派な人なのに、と不思議に思うかもしれません。けれどもこの人は、いちばん大切なことをわきまえていなかったのです。

一番大切なこと。それは、神さまと向き合うことです。祈りとは神さまと向き合うことです。けれどもファリサイ人には神さまが見えていなかったのです。自分しか見えていなかったのです。自分が立派な人かどうか、ちゃんと律法を守れているかどうか、そのことしか頭になかったのです。神さまが見えていないとき、人は自分と他人とを比較します。そして自分が他人よりもすぐれている、まさっていると思うと優越感をいだき、他人を見下します（ファリサイ人は「この徴税人のような者でもないことを感謝します」と言っていますね)。高慢になり、他人を見下すことは罪です。けれどもファリサイ人には、その自分の罪が見えていなかったのです。神さまが見えていなかったからです。

この人は悪い人ではなかったと思います。信仰に熱心で、まじめに救いを求めていた人だと思います。けれども神さまが見えないとき、人は自分の熱心や努力を自分の手柄とします。そして神さまなしでも自分で自分を救うことができると考えるのです。

徴税人の姿は、ファリサイ人の姿とは正反対でした。「ところが、徴税人は遠くに立って、目を天に上げようともせず、胸を打ちながら言った。『神様、罪人のわたしを憐れんでください』」(13節)。

みじめな、みっともない姿です。彼は目を上げることもできず、ただ胸を打ちたたいて「神様、罪人のわたしを憐れんでください」と言うことしかできませんでした。

けれどもイエスさまはこの徴税人の祈りをお喜びになり、こう仰せになりました。「言っておくが、

義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(14節)

ファリサイ人と徴税人の違いはどこにあったのでしょうか。徴税人は、自分が罪人であることを知っていました。なぜなら、彼は神さまを見ていたからです。人には、自分が罪人であることがなかなかわかりません。それがわかるのは神さまのみ前に立ったときだけです。神さまの光によって自分の姿を映し出されたときだけです。徴税人は神さまのみ前で、自分が醜い、救いがたい罪人であることを知ったのです。だから「罪人のわたしを憐れんでください」としか言えなかったのです。

けれども、神さまの前に正しくあったのはファリサイ人でなく、徴税人です。徴税人は神さまに、わたしを憐れんでくださいと乞い求めています。なぜでしょうか。救いは人間の功績や努力によるのではなく、神さまの憐れみによるのだということを知っていたからです。救いとは自分が立派になることではなく、かえって神さまの前に小さくされることだということを知っていたからです。神さまの憐れみは、イエスさまの十字架によって示されました。イエスさまがわたしたちを罪から救ってくださいました。わたしたちがどんなに自分の罪に打ちのめされていても、自分のみじめさを悲しんでいても、イエスさまはそのままでよいと言われるのです。そのままの姿でわたしのもとに来なさい、わたしがあなたの罪をぬぐい、破れを繕い、立ち上がらせよう、そのように言われるのです。

(木下裕也)

〔今週の暗唱聖句〕　イザヤ書 1章18節後半

たとえ、お前たちの罪が緋のようでも
雪のように白くなることができる。
たとえ、紅のようであっても
羊の毛のようになることができる。

1月13日　罪の赦しと義認　幼稚科

〈ねらい〉

主の十字架の死と復活により、わたしたちは罪赦され、義とされる。それにより、わたしたちは信じることのみ（行いによらない）で救われて、天の御国に行くことができることを学ぶ。

〈展開例〉

イエスさまは、わたしたちの罪を赦し救うために、わたしたちの身代わりになって十字架にかかって死んでくださった。そして、三日目に復活され、天にのぼられた。
そのイエスさまを救い主と信じることのみが、罪赦され義とされる、わたしたちの唯一の救いの道であることを、やさしくわかりやすく、小さな子どもたちに伝わるようにする

◇「ふくいんのきしゃ」を賛美して学ぶ

『ふくいん子どもさんびか』79番
（いのちのことば社）

ふくいんのきしゃにのってる
てんごくゆきに（ポッポ）
つみのえきからーでーて　もうもどらない
きっぷはいらない　しゅのすくいがある
それでただゆく（ポッポ）
ふくいんのきしゃにのってる
てんごーくゆきに

イエスさまを信じている人は「ふくいんのきしゃ」に乗っています。
それに乗っている人は天国に行けるんだよ！
もう神さまから罪はないものとして赦されているんだ。
天国に行くために何かいいことをしないといけないとか、きまりを守らないといけないとか、そういうことはないんだよ。

イエスさまの救いを信じるだけ、それだけでいいんだ！
いや、それしか（信じることしか）ないんだ！
だからイエスさまを信じて生きていこう！
天国に行けること（救われていること）を感謝して喜んで生きよう！

◇「ふくいんのきしゃ」で遊ぼう

ダンボール等で作った「ふくいんのきしゃ」に乗って賛美したり、遊んだりすると楽しいでしょう。時間があれば、ダンボールの汽車に子どもが自分の顔や好きな絵を書くのも楽しいでしょう。

〈お祈り〉

神さまに愛されて生きていることを感謝します。イエスさまを信じて天国に行けることを感謝します。これからも神さまを礼拝し、賛美し、喜んで生きる者とならせてください。

1月13日　罪の赦しと義認　小学科下級

〈主旨〉

神が、イエス・キリストのゆえに私たちの罪を全て赦し、義と認めてくださる。（ウエストミンスター小教理問答、問33参照）

〈展開例〉

○みんなは「良い人」ってどんな人のことだと思う？ じゃあ「悪い人」は？……

（いろいろな答えが出されると思うが、大抵は一般倫理・道徳で分けられることを想定している）

○「悪い人」（とくに一般的な犯罪者を指して）ってどうなるのかな？……

（警察に捕まる。牢屋に入れられる。地獄に落ちる。……）

今日の箇所に出てくる「徴税人」っていう人は、みんなから不正に税金をだまし取っていた人が多かったみたいなんだ。今でいう「詐欺」かもしれないね。捕まってもおかしくないのかもしれない……。

○じゃあみんなは「良い人」かな？「悪い人」かな？……

（「フツー」という答えが多いのかもしれない。または「そこまで悪くはない」など）

○神様の目から見たらどうかな？

（「ん～」……。小さな「罪」も神様にとっては、「悪」（罪）と教える）

実は私たちも本当は、神様から裁かれて牢屋のような地獄に入れられてもおかしくないんだよ。それほど、神様は小さな罪でもお赦しにならない正しい（聖なる）お方なんだ。

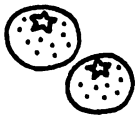
でもみんなの知っている通り、イエス様はみんなが気づかないみんなの罪でさえ背負って十字架にかかってくださったんだよね。みんなの代わりにイエス様が裁かれて死なれたんだよね。このイエス様、私たちの代わりに十字架にかかってくださった「イエス様を信じます」と心から言う時、神様はみんなを「赦す」と言ってくださるんだ。私たちではなくて、イエス様のゆえにみんなを「赦す」、むしろ「あなたは正しい良い子だ」って言ってくださるんだ。それが「義」っていう言葉の意味なんだよ。

神様があなたはイエス様のゆえにまるごと「正しい」と言ってくださる。私たちは、本当はこの罪のためにみんな「悪い子」なんだ。それなのに「イエス様のおかげで」、「神様は」あなたは「良い子」だと言ってくれる。

だからみんなは「良い子」ぶらなくていいんだよ。正直に神様の前で、「ごめんなさい。わたしは悪い子です」というだけでいいんだよ。それが悔い改め。その時、神様は「いや、イエス様のおかげであなたこそ良い子だ」って言ってくれるんだ。このことを感謝して、神様の前で正直に祈って行こうね。

〈祈り〉

神様。私たちは悪い子です。うそをつきます。良い格好をしようとします。正直になれません。イエス様を信じます。お赦しください。イエス様のお名前で祈ります。アーメン。



1月13日　罪の赦しと義認　小学科上級

〈ねらい〉

私たちは神様の前にみな等しく罪人である。罪の赦しは私たちの自分自身の力によらず、ただ神様の憐れみによるのである。

〈展開例〉

今日の聖書箇所の登場人物の二人はどんな人たちだったのでしょう。

ファリサイ人とは律法を忠実に守ろうとした人たちです。当時のユダヤの社会の中でも、品行方正であり、道徳水準も高い人たち。

それに対して、徴税人は、当時ユダヤの支配者であったローマ帝国の手先となって、人々からしばしば規定以上の税金をまきあげ、私腹をこやしていた人々。ユダヤ社会の中で、どんなイメージを持たれていたのか。また、徴税人は本当はどんな気持ちで仕事をしていたのか……、考えてみましょう。

その二人が神殿に入って祈りをささげました。

ファリサイ人は、自分が道徳的に正しい人間で、献げ物もしっかりとささげていることに感謝し、近くにいた徴税人を見て、自分はあのような悪い人間でないことを感謝する祈りをささげました。徴税人は自分の罪深さをよくわかっていたのでしょう、目を上げることも無く胸を打ち、神様の憐れみを求めました。

義とされて家に帰ったのは、徴税人でした。

なぜ徴税人が義とされたのでしょうか。

ファリサイ人は決して嘘をついているわけではありません。自分について本当にそう思っているのでしょう。けれども、忘れてはならないのは、私たちはみな罪人であるということです。ファリサイ人は自分が罪を犯さない立派な人間であると思い、自分の罪に気が付かず、他人を見下す罪を犯していました。

徴税人は自分の罪を認め、神様の前に何も取りつくろうとすることもせず、自分を低くして、ただ神様の憐れみにすがりました。

救いは功績によるものではありません。決して自分の力で手に入れることは出来ません。ただ神様の憐れみによるだけです。どんなに罪に汚れていても、「そのままでいいからいらっしゃい」と神様はおっしゃってくださいます。私たちのありのままを受け入れて愛してくださる神様に心から感謝して、ただ神様にのみより頼みましょう。

〈祈り〉

愛する神様、罪にけがれた私たちを憐れんで下さり、救いの恵みにあずからせてくださることを心から感謝いたします。どうか私たちが自分の力でなく、ただあなたにより頼んで歩むことが出来ますように助けてください。アーメン。

1月13日　罪の赦しと義認　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

○罪の赦しと、神による受け入れ

「義認」とは第一に「罪の赦し」です。原罪を抱え、今も神への背きの罪を犯し続ける、有罪の身の私たちが無罪宣告され、裁きと罰を免れます。また第二に、「神の前で正しい者として受け入れられること」です。赦されただけならば、依然として神は私たちから遠い方のままです。神のほうで「お前を認める」と積極的に迎え入れてくださって、抱きしめてくださるのです（放蕩息子の喩え参照）。

○神の一方的恵みによる決定

「義認」は、私たちの側のわざや功績に対する見返りとしての、神からの合格発表ではありません。神の一方的な（＝代価を求めない無償の）恵みの行為です。完全に不合格な者、神の敵であった罪人のために、神は救い主キリストを与え、またその主を信じる信仰をも与え、合格の最終通知をくださいました。これは最終的な「決定」ですから、もはや覆ることはありません。

○キリストの義の転嫁

なぜそれほどの、ありえない恵みをいただけるのか。それは、本来私たちが果たすべき神への責任（罪の償い、完全な服従）を、キリストが代わって果たしてくださったからです。「転嫁」とは、辞書によれば「罪・責任などを他人になすりつけること」ですが、私たちはまさに自分の罪・責任をキリストになすりつけました。でもそんな私たちにキリストは、ご自分の義をまとわせてくださいます（＝キリストの義の転嫁）。これは「喜ばしい交換（ルター）」です。

「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによるあがないの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」（ローマの信徒への手紙3:23,24）

今日の説教展開例では、品行方正ゆえに自分の罪が見えなくなったファリサイ人と、罪深いおのれの醜さをよく承知していた徴税人が、対比されました。そして、大事なのは自分の罪を知り、神の憐れみにすがりつくことだと示されました。私たちはだれも、ただ神の恵みと憐れみによってだけ、義とされるのです。私たちはだれも、イエス様に「自分の罪をなすりつける」という、図々しいとしか言いようのない仕方でしか、義とされることはないのです。

イエス様は別のところで、借金のたとえをされました（ルカ7:36－50）。50デナリオンの借金をした人と、500デナリオンの借金をした人がいた。どちらも返すことができなかったので、金貸しは、二人の借金を帳消しにしてやった、というたとえです。そしてイエス様は、この両者のうち、多く喜んだのはどちらだと思う？と問われます。もちろん、金額の多かったほうでしょう。でも、よく考えてください。「どちらも返すことができなかった」とイエス様は言われています。本当は、金額の大小なんて大した問題じゃない。どちらも本当なら、返すことができなくて路頭に迷うしかなかった。

罪の問題も同じです。たくさん罪を犯した人、まじめに生きてきた人、その違いはあります。でも、「どちらも神様の前で赦されない罪人」です。それが帳消しにされるのですから、みんな大喜びすべきです。

1月20日　神の子とされる幸い　教理説教のための聖書黙想

テキスト　　ローマの信徒への手紙 8章12〜17節
子どもカテキズム　問31

問31　救いとは何ですか。
答　神さまの子どもとされることです。
そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。
ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、
「私たちの父なる神さま、私の天のお父さま」とお呼びします。

〈産みの苦しみを覚悟せねば〉

○「子とする」「子とされる」という言葉や事柄が、生徒らの話題に上ることはほとんどない。その言葉や事柄に実感を持って語ることのできる教師も少ないだろう。養子縁組の持つ社会的意義は、時代や地域によって異なるに違いない。日本民法が制定する養子縁組で、子はどのような立場に置かれるのか。聖書事例に見る養子縁組や、ローマ文化圏での養子縁組を含め、どのような類似点・相違点があるのか。語り伝えるべき教理の着眼点・強調点はどこにあるのか。少なくとも、養子が享受する恩恵という観点を明確にしなければ、教理を語り聞く営みに現実味は生まれない。説教者は産みの苦しみを覚悟せねばなるまい。

〈日本民法の制定する養子縁組〉

○養子とは、養子縁組の手続きによって、養親との間で法定の嫡出子としての身分を取得した者を言う（民法809条）。かつては、家名を継がせたり、労働力を得るために養子縁組が行われた。現在では、子の福祉のためであり、特別養子縁組はそのための制度である。養子縁組をするには、養親と養子とが縁組の合意をした上で、届け出をしなければならない。

○特別養子とは、幼子の養育を目的として創設された特別養子縁組による養子を言い（民法817条）、これに対し従来の養子は一般養子とも言われる。特別養子縁組は家庭裁判所の審判によって成立する。養親は夫婦に限られること、養子は原則6歳未満であること、実父母の同意を要すること、養子と実方との親族関係は終了すること、離縁も審判によること、養親からの離縁請求はできないこと等が規定されている。

○日本民法を概観して分かるのは、養子縁組によって子が享受する恩恵とは、「養育を受ける」「相続を受ける」その権利が保証されることにほかならない。養親との縁組は、養子との合意による届出、もしくは実父母との合意による審判によって成立する。

〈聖書事例に見る養子縁組〉

○旧約聖書には、実の息子であると認知する養子の事例が見られる（創世記48章5〜22節、ルツ記4章16〜17節）。部族の財産の継承は血族に限定されたが（創世記15章3〜4節）、長男不在の場合は、娘による相続や義兄弟結婚による相続（民数記27章8〜11節、申命記25章5〜10節）も認められた。

○養子縁組の聖書事例は、相続権に関わる養子であり、日本民法における一般養子にあたる。しかし、家名の断絶を神とその民全体に対する不忠実と見なす点には、イスラエル独特の文化と宗教伝統が見られる。

〈ローマ文化圏での養子縁組〉

○ローマでは養子縁組が法的に規制されていた。未成年者を養子とする場合と、成人を養子とする場合で、手続きは異なったが、いずれも遺産相続権に制限が加えられることはなかった。

○聖書事例と同じように、遺産相続権に関わる養子がローマでも重視された。ユダヤとローマに

共通する養子縁組の社会的意義が、「子とする」「子とされる」というキリスト教教理の背景になったことは確実である。

〈霊的意味での養子に関する聖書神学〉

○新約聖書ではもっぱらパウロ書簡において、神とキリスト者との新しい関係が養親子関係と呼ばれる（ローマ8章14～17節、ガラテヤ3章26～29節、4章4～7節）。法的な事柄よりも人格的・内面的な問題が前面に出され、キリスト者は罪の奴隷から解放され、神の養子とされ、キリストと共同の相続人と呼ばれる。それによって受ける利益に強調点が置かれる。ただし、この養親子関係は完成途上にあり、キリスト者は救いの究極の完成において、完全に養子とされる日を待ち望む存在である（ローマ8章23～25節）。

○「子とされる」というパウロの言い回しは、ユダヤ人の信仰が前提となっている。主ヤハウエによる民イスラエルの選びとエジプトからの脱出を通して、イスラエルが奴隷状態から「子である」身分へと贖い出されたという信仰である。「子とされること」は、もっぱら神の決定に根ざしており、神が御ひとり子を人として世に遣わし、聖霊によって罪人をキリストに結び合わせ、御自分の子供とするという決定である。

〈改革派教理における「子とされること」〉

○改革派神学は、神と人との関係を、親子関係の範疇よりも、第一義的に司法上の範疇として提示してきた。その理由は、人が「何に向けて」救われるかという点よりも、「何から」救われるかという点に注目したからだろう。ウエストミンスター信条は、「子とされること」を独立した教理（告白12、大教理74、小教理34）として扱うが、全体の枠組として法廷的である。しかし元来、カルヴァンが認識していたのは、「子とされること」において「神の栄光に導き入れられる」という、キリストにある神の救いの究極目的の重要性である。

〈主題教理を物語るための聖書箇所〉

○子どもカテキズム31は、救いの本質を問いかけ、「子とされる」教理をもって答えさせる。「神が我らの罪を赦し、義と認めてくださる」司法手続、「我らが喜びと感謝をこめて神を父と呼ぶ」親子関係、これら両側面を告白させる。「養子」の教理の着眼点は「神の定め」であり、その強調点は「相続の恵み」にある。

○聖書箇所はパウロ書簡（ローマ8章、ガラテヤ3～4章）から選択したい。前々回（ルカ15章11節以下）と前回（ガラテヤ4章1節以下）との重複を避け、ローマ8章12～17節を取り上げ、同8章17節を暗唱聖句とする。

〈単元目標〉

「私たちが神の子供とされること、キリストと共同の相続人とされること、その恵みを知る。」

（二宮　創）

1月20日　神の子とされる幸い　説教展開例

テキスト　ローマの信徒への手紙 8章12〜17節
子どもカテキズム　問31

〔単元のねらい〕

「子どもカテキズム」問31は、「救いとは何か」を問い、「子とされる」恵みを答えさせる。神が人間の罪を赦して義と認めてくださる司法手続きを経て、神の子とされた人（キリスト信者）は、喜びと感謝をこめて神を父と呼ぶ恵みに与かる。人の世に生まれ、罪と死に囚われた私たちに、父なる神は御ひとり子イエスを遣わし、聖霊によってキリストと結び合わせ、罪人を御自分の養子と定めて、神の国を相続させてくださる。この恵みのありがたさを伝えたい。

わが子と呼んでくださる神

お正月に、お年玉をちゃんと用意していてくれるお父さん。おせち料理で家族みんなを喜ばせてくれるお母さん。毎年のように喜んでいる子供たち。「ありがとう」の気持ちを伝えるのは、1月の元旦と、5月の母の日と、6月の父の日だけになっている息子や娘たち。お父さんとお母さんがいてくれること、いつも養い育て愛してくれること、当たり前だと思いこんでいるそのことは、決して当たり前のことではなく、実は大変ラッキーなこと、奇跡とも言えるほど幸運なことなのです。

想像してみてください。この世に生まれ出た赤ちゃんが、そのまま独りぼっちにされたら、どうなるでしょう。生まれたての赤ちゃんは、自分で寝返りをうつことができません。お腹がすいて目覚めてもお乳を探すことができません。誰かがそばにいなければ、誰かに養ってもらわなければ、一日たりとも命を保つことはできないのです。この小さな命をいとおしいと思う。その弱々しい命を尊いと感じる。死なせてなるものかと奮い立つ。わが子を生かすためなら、自分の持っているものすべてを与えても構わない、自分の命すら犠牲にしても構わない。この憐れみ深い心をお父さんとお母さんに授けてくださったのは、命の源なる憐れみ深い神さまに他なりません。神さまと父母の憐れみ深い心に包まれて初めて、赤ちゃんは養われ、その子は育てられ、愛を知る人に成長することができるのです。これは決して当たり前のことではありません。神さまが御心のままに定めてくださった命の恵み、生きる幸いであります。

ところが、この恵みと幸いが、ある赤ちゃんには備えられないことがある。養ってくれるはずのお父さんとお母さんが死んでしまうことが起こり得る。自分の子を育てることができなくなってしまうことも有り得る。その赤ちゃんを、命の源なる神さまは変わることのない憐れみをもって見つめておられます。その子の父母に代わって養ってくれる男女を定め、その人たちに憐れみの心を授けてくださるのです。聖書に記された大昔から、今の時代に至るまで、父母がそばにいることのできない赤ちゃんのために、養育を受けられない子どものために、養い親を定めて赤ちゃんの命を保たせ、子どもの成長を支える社会のしくみがあるのです。「養子縁組」という制度です。この制度は、憐れみ深い神さまの御心と定めに基づくもので、人間社会に命の恵みと生きる幸いを保たせるものです。

神さまの御定めによって、自分が産んだのではない赤ちゃんの命をいとおしいと思う養母、自分が育てる義務のない子どもの人生を尊いと感じる養父。この養父母がその子を「わが子とする」「養子にする」そのことを世間一般の人々に対して公明正大に保証し宣言するのが「養子縁組」です。「子とされた」赤ちゃんは、実の母親に代わる養母によって養ってもらえる。「養子にされた」子どもは、

実の父親に代わる養父によって育ててもらえる。このように養い育てられる養子は、実の家族とまったく変わらない親子関係に入れてもらえる。養父母から無償の愛を注がれて、養父母から言葉を習い覚え、養父母から暮らしの知恵を教え諭され、養父母から社会生活に必要な教育を受けさせてもらえる。やがて養父母から自立した養子は、養父母の老後を支え、養父母の死を看取り、養父母の全財産を相続することになるのです。

今日みなさんにお伝えしたいことは、今ここにいる私たちが、みな同じ定めにあるということです。この世に生まれ出るすべての人は、貧しい家に生まれた子も豊かな家に生まれた子も、実の父母に養ってもらえる赤ちゃんも養父母に育ててもらえる子どもも、みな同じ定めにあるということです。その定めは、悲しい定めですが喜ばしい定めです。苦しい定めなのですが輝かしい定めなのです。初めは心細い定めでありますがやがて心強い定めとなるのです。

聖書にある神さまの御言葉を聞きましょう。ローマの信徒への手紙8章12節から17節。『兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。』

聖書を通して、神さまははっきりとお語りになりました。この世に生まれ出るすべての人は、みな同じ定めにあると。アダムの子孫である全人類は、人を本当に生きた者とする神の息を失ったまま生まれて来ると。聖霊を失ったまま肉体だけで生きる者はやがて必ず死ななければならないと。この悲しい苦しい心細い定めに、人はみな囚われていると。

しかし神さまは、命を授けた人間が死にゆくのをお望みになりません。アダムの罪を相続した全人類の悲しい命をいとおしいと思ってくださる。生まれながら死に定められた一人ひとりの惨めな命を尊いと感じておられる。人を死なせてなるものか、人を生かすためなら自分の持っているものすべてを与えても構わない、自分の命すら犠牲にしても構わない。そう心に定められました。

憐れみ深い父なる神さまは、御自分の命そのもの、全財産に等しい御独り子イエスさまをこの世に遣わし、神の子としての人生を歩ませ、その尊い命と引き換えに、人間の罪を赦そうと心に定められました。聖霊を注いで、人々をキリストに結び合わせ、罪と死に囚われた一人ひとりを御自分の養子と心に定めてくださいます。父なる神さまの長子であるイエスさまが、死者の中から復活して、栄光の御国に挙げられたように、キリストに結び合わされた者たちも同じ定めに置かれるのです。

人間の悲しみをイエスさまはご存知です。人生の苦しみと死を神の御独り子は味わわれたのです。この御方と共に悲しむ人は、救いの喜びに定められます。キリストと共に苦しむ者は、神の養子とされる栄光に定められます。心細い毎日の暮らしに、聖霊が伴ってくださり、「御子イエスの父なる神さまを私の父と呼んで祈ってよいのだ」と励まし、「君は神の子どもとされたのだ」「キリストと共に永遠の命と神の国を相続するのだ」と慰めてくださる。まことに心強い人生の旅路へと定められるのです。憐れみ深い天の父に、ありがたい御定めに、いつも感謝しましょう。

（二宮　創）

〔今週の暗唱聖句〕　ローマの信徒への手紙 8章17節

もし子供であれば、相続人でもあります。
神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。
キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

1月20日　神の子とされる幸い　幼稚科

〈ねらい〉

神さまは滅びの中にあるわたしたちを愛してくださいました。その愛は、御子イエスさまをわたしたちの身代わりとされたことに示されます。そして聖霊によってイエスさまと結び合わされたわたしたちを神の子としてくださいます。イエスさまを信じて共に歩みましょう。

〈展開例〉

皆さんはお祈りするときどのようにお祈りしますか？

「天の父なる神さま……」と呼びかけますね。どうして父なる神さまと呼びかけることができるのでしょう。

わたしたちはこの世に生まれた時から、罪で真っ黒に汚れています。どんなにきれいに洗おうとしても真っ白にはなりません。

けれども、御子イエスさまがわたしたちの身代わりとして十字架で真っ赤な血を流してくださいました。

天の神さまはイエスさまが流された十字架の血によりわたしたちを真っ白にしてくださいました。そして神さまの子としてくださいました。かけがえのない存在となったのです。

神さまの子どもとなるためには真っ白でなければなりません。イエスさまを救い主と信じて真っ白になった人は神さまの子とされているので神さまを「父」と呼ぶことができるのです。

皆さんのお父さんのように、父なる神さまのお顔を見ることはできません。けれど、「お父さん」と呼びかけることができるほどわたしたちに近づいてくださっている神さまに、安心してお祈りすることができるのです。

わたしたちが、イエスさまを信じて真っ白になるということは、聖霊のお働きによります。真っ赤な血を流されたイエスさまを信じるだけで、父なる神さまはわたしたちを黄金の天国に招いてくださっているのです。

お父さんのように、あらゆるわざわいを遠ざけてくださり、わたしたちを御手の内に守ってくださるのです。

イエスさまを信じ、イエスさまと共に歩むよう子どもたちを励まし、祈りましょう。

〈参考〉

『字のない絵本』

黒（罪）
→赤（イエスさまの十字架）
→白（きよめ）
→緑（みことばに従う生活）
→黄（天国）

〈お祈り〉

天の父なる神さま、あなたの大切な御子イエスさまをわたしたちのために身代わりにしてくださって、ありがとうございます。わたしたちを神さまの子どもとしてくださって、ありがとうございます。イエスさまを信じ、イエスさまと共に歩んでいきますから、神さま、どうかその力を与えてください。

1月20日　神の子とされる幸い　小学科下級

〈主旨〉

父なる神は、神の独り子キリストのゆえに私たちを神の子とする恵みに与る者としてくださる。(ウエストミンスター信仰告白12章参照)

〈配慮する点〉

「子とすること」は、「義認」という法的側面に基づく、「養子関係」、「親子関係」という人格的・内面的な事柄でもあります。それゆえにそれぞれの家族関係が例として引き合いに出されることがありますが、片親、両親がいない家庭、家族関係があまり良好ではない環境にいる子どもたちなど、特に配慮が必要となるでしょう。その中で、神様ご自身が「我が子」と呼んでくださり、私たちも「お父さん」と呼ぶことのできる、まさに「崩されることのない関係」(ウ告の表現では、「捨て去られてしまう」ことのない関係)が確固としてあることを覚えたいものです。また、この「教会」という存在がイエス・キリストを中心とした神の家族であるという事実を覚えて、共に「神の子」とされている恵みにあずかっているという幸いを分かち合えたらと思います。

〈展開例〉

○神様の独り子って言ったら誰のことかな？……(イエス様)

そうだね。イエス様だね。

○じゃあ、私たちは何者なんだろう？……(いろいろな答えが予想されるが、ここでは特に罪の「奴隷」であることをまず見つめたい。ローマ8：15)。

私たちはね、もしイエス様がいなかったら、実は神様の子どもでもない、(罪の)「奴隷」っていう身分なんだよ。

○「奴隷」ってどういうイメージがあるかな？……(自由がない。)

そうだね。何か自由がなくて、苦しい状態だね。

○でもみんなは普段自分が「奴隷」だっていう風に感じているかな？……(ない。)

○それじゃあ、いつも神様のことを考えて、お祈りしたり、感謝したり、神様が喜んで下さることをしているかな？……(ん～。)

私たちの周りには、いろいろ神様から離れさせようとするものが沢山あるね。

(ゲーマ、マンガ、テレビなどそれ自体と言うよりかは、それぞれの中身など)。

それに夢中になりすぎる時、そして神様のことを忘れてしまう時を罪の奴隷っていうんだよ。

でもそんな私たちだからこそ、イエス様が神様の子どもという身分をわざわざ届けにこの地上に来て下さったんだ(フィリピ2：6～8参照)。このイエス様のおかげで、私たちも神様の子どもとして、神様を天のお父様って呼ぶことができるんだよ。今日はそのことを覚えるためにお祈りの最初と最後に注意してお祈りしてみよう。

〈祈り〉

天のお父様。私たちにイエス様を与えて、神様の子どもとしてくださってありがとうございます。いつも見守っていてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

1月20日　神の子とされる幸い　小学科上級

〈ねらい〉

神様は、罪人だった私たちにイエス様を遣わして、神様の子とされ、イエス様と共に永遠の命と神の国を相続できるという大きな恵みを与えてくださいました。心から感謝しましょう。

〈子どもカテキズム〉

問31　救いとは何ですか

答　神さまの子どもとされることです。そのために、神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、「私たちの父なる神さま、天のお父さま」とお呼びします。

〈展開例〉

昔の日本では、家を継がせるため、また貧しかったので労働力を得るため、養子縁組が行われましたが、今は、子の福祉（育ててもらう、家を守ったり財産を引き継ぐ）ために特別養子というものがあります。

聖書の中で、養子とは家を継がせるためでした。兄弟がともに暮らしていて、そのうちの一人が子を残さず死んだら、その者の妻は、その家族の中から再婚しなければなりませんでした。家の断絶は、神とその民全体に対する不忠実とみなされていたからです。神から与えられた嗣業を絶やすことなく受け継いでいくことが重んじられていました。

神様の子どもとされるとは、神様の子どもとしての身分が与えられ、それだけでなく、罪の奴隷から解放され、キリストと共同の相続人と呼ばれることです。そして、今はまだ道を歩いている途中なのですが、完成の時には完全なものとされます。私たちは、神様からの一方的な愛によって選ばれて、神様の栄光の内に入れられることに感謝しましょう。また、お友達も教会の行事などに誘ってみましょう。

〈祈り〉

天のお父さま、私たちを神様の子どもとしてくださってありがとうございます。また、イエス様と共に天国に行けるという大きな希望を与えてくださってありがとうございます。アーメン。

1月20日　神の子とされる幸い　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

○「神の子らの数に入れられる」

私たちは本来、誰もが罪の子であり、「生まれながら神の怒りを受けるべき（エフェソ2:3）」者たちです。全能にして聖なる神に、親しみを覚えることは赦されていません。しかし、神は恵みにより、キリストを信じる者に「神の子ら」の身分を与え、まことの神の子キリストを長子とする神の家族の一員として迎えてくださいます（つまり、養子としていただく）。

○「神の一方的恵みによる決定」

「義認」と同じく、「子とされること」も神の一方的な（＝代価を求めない無償の）恵みの行為であり、最終的な「決定」ですから、もはや覆ることはありません。たとえ私たちが父を見捨てても、神は子である私たちを見捨てることはありません。

○「神の子らの特権」

神の子とされた私たちには、様々な特権が与えられています。

- 父なる神の特別な愛を確信できる。
- 永遠の相続財産、栄光の御国を受け継ぐことができる。
- 聖霊をいただき、親しく御座に近づくことができる。
- 祈りを聞き入れていただける。父の保護と配慮を受ける。
- 父の愛による訓練を受ける……etc。

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。」（Ⅰヨハネ3:1）

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッバ、父よ』と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。」（ローマ8:15－7）

「あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。」（ヘブライ12:7）

ちょっと前に、山本キッドっていう天才的な格闘家がいまして、自分のことを「神の子」だって言っていました。それくらい、自分は特別な才能を与えられているって誇りをもっていたのです。

そういうのを聞くと、自分のことを「神の子」だってみんなの前で言うのは、ちょっと恥ずかしいような、ためらいを覚えるような感じになったりしないですか？だって、自分はそんなに特別な才能のあるわけじゃないし、そんなこと言ったら目立つし……。

でも、ぜひ自己紹介の時に、こう言えるようになってほしいなあって思います。「ぼくは、わたしは、クリスチャンです。神に愛されている神の子です。」とっても恥ずかしいし、勇気が出ないと思うけど、こういう風に言える様に先生もなりたいなあ。

特別な才能なんてない。でも、イエス様のおかげで、神の子としていただいた。そのことが、何よりも大きな私の誇りなのです。

1月27日　聖化の恵み　　教理説教のための聖書黙想

テキスト　　ルカによる福音書 19章1〜10節
子どもカテキズム　問32, 33

問32　救われたあなたはどうなりますか。
　答　聖化の歩みを始めます。
問33　聖化の歩みとは何ですか。
　答　神さまの子どもとして、
　　罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。
　　神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

〈聖化について〉

「聖化」は、「義認」、「子とすること」と共に、「神の無償の恵み」によって与えられるものです(ウェストミンスター小教理問33〜35)。しかし、「義認」、「子とすること」が一回限り、神さまから決定したものとして与えられるのに対して、「聖化」は救いに入れられたキリスト者が、世の歩みを続ける間、継続して神さまから与えられ続ける恵みの御業です。従って、「聖化」の御業を、私たち一人ひとりが日々感じ取りながら、感謝する時、私たちの信仰は豊かなものとなってくるのです。

この時、私たちに求められるのが、御言葉に基づく祈りであり、祈りに答えてくださる主なる神さまの御業を、日々、確認し、感謝する生活です。

では具体的に、私たちはどのようにして「聖化」の御業を感じ取ることが出来、感謝の生活をすることが出来るのでしょうか？「聖化」は、私たちの信仰生活に直結した働きであり、私たちの信仰生活においては、信仰の実りとしての「善き業」に表れてきます。神さま、神の御子である主イエス・キリストがどのようなお方であるかを御言葉により示され、私たちはそれに倣い、主がお与え下さった律法を実践するものとされていくのです。「善き業」は、日本キリスト改革派教会が、創立宣言において掲げた見える教会を建て上げるための三本柱「信仰告白」、「教会政治」、「善き業」の一つであり、改革派教会は、聖化に伴う信仰生活を大切にしてきた教派でもあるのです。

〈ザアカイに与えられた信仰〉

ザアカイは、徴税人として、ユダヤ人からは罪人とされてきたのであり、嫌われた存在でした。また、他の徴税人と共に、人々から必要以上の徴収を求め、私服を肥やしてきました。ザアカイの罪は、ユダヤ人の証言ではなく、主の定められた律法に従って指摘しなければなりません。つまり、第八戒「盗んではならない」であり、第十戒「隣人の家をむさぼってはならない」からです。彼は徴税人の頭であったため、よりその責任、それに伴う罪も重いのです。

しかし主イエスは、ザアカイのところに来てくださり、ザアカイと共に食事をし、家に泊まることをよしとしてくださったのです。神さまから離れ、罪の世界に生きていたザアカイに、主イエス御自身から来てくださったのです。この時、主イエスは、ザアカイを、義と認めてくださり、子としてくださったと共に、聖化をお与えくださったのです。

この時、ザアカイは、自らの姿を顧み、罪を悔い改め、神の律法に従った歩みを始めるのです。それが、人からだまし取ったものを四倍にして返すこと、つまり償いです。そしてさらに、自らの財産の半分を貧しい人々に施すことであり、隣人への愛の表れです。

ザアカイの行為、つまり貧しい人々への施しは、この時一回限り行われたのではなく、神さまによる救いにあずかったものとして、救ってくださった神さまに感謝しつつ、繰り返し行われていくのです。これが主に愛され、救いに入れられた者と

しての聖化の歩みであり、ザアカイにとっての信仰告白となっていくのです。

〈黙想〉

テキストには、主イエスがザアカイの家に泊まることを告げられた後、すぐさまザアカイは行動するが、この間の主の御業とザアカイに起こった心の変化、回心などは記されていません。しかし、主イエスの言葉が発せられることにより、主なる神さまのザアカイへの救いのご計画が明らかになり、ザアカイが義と認められ、子とされ、聖化の御業にあずかるよう、神さまの大いなる御業が示されているのです。

義認から聖化の流れを考えることにより、律法主義的な信仰、つまり善き行いを行うことによって、神さまが良しと認めてくださり、救われるといった功績主義的な信仰を排除していかなければなりません。

〈子どもたちに対して〉

「聖化」という言葉は、神学用語であり、子供たちにはすぐには理解出来ないかもしれない。しかし、ザアカイに示された神の愛によって、ザアカイの心の変化を丁寧に語っていくことにより、良き業を行うことも、神さまから与えられた聖化の御業の故であることを、一緒に考えていくことが出来ればと思います。　　（辻　幸宏）

1月27日　聖化の恵み　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 19章1〜10節
子どもカテキズム　問32, 33

〔単元のねらい〕

子どもたちにとって、「キリスト者とは善き生活をしなければならない」、もしくは「キリスト者だから善き生活をしなければならない」と思うことがあるかも知れない。「聖化」の教理を教えるということは、こうした律法主義的な生活から子どもたちを解放することである。

前回・前々回、「義認」、「子とすること」をすでに確認してきた。神の救いにあずかった者は、救いの喜びにより、聖化され、善き行いをすることを、ザアカイを通して、一緒に学んでいただきたい。

救いの恵みに生きる

ザアカイさんという一人の徴税人がいました。徴税人とは、人々から税金を集める人です。当時ユダヤの国は、ローマの国によって占領されており、ユダヤ人はローマに税金を納めなければなりませんでした。そのためユダヤ人は、ローマのために税金を集める徴税人を、同じユダヤ人でありながら、嫌っており、罪人だと非難していました。

ユダヤ人たちは、徴税人を、感情的に嫌って罪人としていただけではなく、実際に徴税人は罪を犯していたのです。たとえば、ローマから「1万円の税金を集めなさい」と命じられた時、徴税人は、一人ひとりに1万円を納めるように求めるのではなく、2万円、3万円と要求したのです。そして1万円をローマに納め、残りの1万円、2万円は、自分のお金にして、自分の財産を増やしていたのです。そのため、ユダヤ人は、ローマのために税金を納めることばかりか、徴税人が税金を余分にとっていることに対して、反発して、徴税人を嫌っていたのです。

ザアカイさんは、その徴税人の頭であったのです。ですからザアカイさんは、他の徴税人よりも多くの金額を受け取り、お金持ちになっていたのではないでしょうか。

このザアカイさんのいたエリコという町に、イエスさまが来られました。この頃、イエスさまの評判は人々に広まっており、行くところ行くところ、人が集まってきます。そしてイエスさまに病気をいやしていただいたり、奇跡を見たり、イエスさまの語られる御言葉に耳を傾けていたのです。

だから、ザアカイさんも、イエスさまを一目見ようと思います。しかし、ザアカイさんは背が低く、人々の後ろからだとイエスさまを見ることなど出来ません。ザアカイさんは徴税人であり、人々から嫌われていたため、前に出ようとしても、だれも譲ってくれる人もいません。たとえ前の方にいたとしても、後ろの方に押しやられたかもしれません。

しかしザアカイさんはあきらめませんでした。先回りして、いちじく桑の木に登り、誰にも邪魔されずに、上からイエスさまを見ようと思ったのです。

そこへイエスさまが通りかかったのです。ザアカイさんは、有名なイエスさまを一目見ることが出来れば満足できたことでしょう。

しかし、イエスさまの思いは違っていました。ザアカイさんのいる場所にイエスさまが来られた時、上を見上げて「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」(5)とお語りになったのです。ザアカイさんはびっくりです。「なんで、イエスさまは自分の名前を知っているのだろう。なんで、私の家に泊まると言わ

れたのだろう」と。

この時、神さまであるイエスさまは、ザアカイさんが救われるように決めておられたのです。そしてザアカイさんが、クリスチャンとして、神さまの御言葉に従った生活を送ることが出来るように、働きかけてくださったのです。この時、イエスさまが言葉によってザアカイさんにお語りになったと同時に、聖霊なる神さまが働らかれ、ザアカイさんが神さまを信じることができるようにしてくださったのです。

するとザアカイさんは、「自分の名前を言い当てることが出来るイエスさまは、神さまなんだ」と理解しました。そしてイエスさまを信じようと思ったのです。しかしイエスさまを信じようとした時、自分が今までにしてきたことが、どれだけ神さまに対して、また人々に対して、大きな罪であったのかということも、同時に示されます。イエスさまを信じるためには、今までのままではダメなんだ。罪を償い、悔い改めよう。神さまが求めておられる信仰生活を送ろうと思ったのです。

「では、何をしたら、神さまは喜んでくださるだろうか、そうだ、今までに人々からだまして、自分は金持ちになったのだ。不正をして稼いだ分を、人々に返そう。それも四倍にして返せば、許してもらえるだろうか。それだけではダメだ。自分の財産の半分は貧しい人たちのために施そう。これからも続けて行っていこう」。このように思ったのです。

そしてザアカイさんは立ち上がって、イエスさまに語ります。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」(8)。

ザアカイさんのところに来てくださったイエスさまは、聖霊なる神さまをとおして私たちと共にいてくださいます。そしてここにいる一人ひとりの名前を呼んでくださっています。「あなたは救われています」、「わたしはいつも一緒にいるよ」と語りかけてくださっています。そして、神さまは、ここにいる一人ひとりが、ザアカイさんのように神さまを信じて、イエスさまを見習って、神さまの御言葉に従う生活をすることを願っておられます。

(辻　幸宏)

〔今週の暗唱聖句〕　エフェソの信徒への手紙 4章24節後半

真理に基づいた正しく清い生活を
送るようにしなければなりません。

1月27日　聖化の恵み　　幼稚科

〈ねらい〉

主イエスがザアカイに近づき、ザアカイに救いをもたらすことによって彼の内面で起こる変化を追いながら、救われたものに与えられる聖化の恵みを覚える。

〈展開例〉

この男はザアカイです。ザアカイは町の嫌われものでした。それは、ザアカイが町の人から税金を取り立てる収税人だったからです。

ザアカイ

ある日のこと、イエスさまが町にやってくると聞き、イエスさまってどんな人か見てやろうと、ザアカイは木の上にのぼりました。

(「ザアカイ」の1番を一緒に歌う。)

ザアカイはびっくり仰天、でもなんだかうれしくてイエスさまをお家にお迎えしました。

(2番を一緒に歌う。)

ザアカイはイエスさまを神さまと信じました。すると、今まで自分のしてきたことがなんてひどいことなのかわかりました。

(3番を一緒に歌う。)

ザアカイはイエスさまに従おうと決心し、今までの行いを改めようと考えました。

さあ、何をしようと決心したのかな。

〈お祈り〉

天のお父様、イエスさまによって救いをくださって、ありがとうございます。どうか、神さまの子どもとして生きることができるよう、わたしたちをお導きください。

※似顔絵は、Webページ「似顔絵イラストメーカー」で制作しました。

1. ザアカイ　ザアカイ　おりなさい。
あなたの　おうちに　とまります。
おもいもかけない　おことばに
きから　いそいで　おりました。

2. ザアカイ　ザアカイ　きょうからは
あなたは　わたしの　おともだち。
おもいもかけない　おことばに
イエスの　おそばに　はしりよる。

3. イエスさま　イエスさま　きょうからは
わたしは　あなたに　つかえます。
こころの　かわ〜った　ザアカイは
イエスの　おでしに　なりました。
(『こどもさんびか』68番、
日本基督教団出版局)

1月27日　聖化の恵み　　小学科下級

〈主旨〉

神は、キリストとの結合を聖霊と御言葉を通して、聖化において具体化してくださる。(ヨハネ17:17、Ⅱテサロニケ2:13、使徒20:32-35参照)

〈展開例〉

○みんなはイエス様を近くに感じる時があるかな？……（ある・ない）

○それはどんな時？

○今日の聖書の箇所で出てきたザアカイさんはどうだったかな？　木に登った時、イエス様を近くに感じたかな？（まだ近いとはいえないことを教えたい。）

○ザアカイさんが一番近くにイエス様がおられると感じたのは、どんな場面だろう？（ここで、イエス様の方から近づいてきてくださったことに注目したい。）

○イエス様は、ただ近づくだけではなくてどうされたかな？（いろいろな動作が考えられるが、ここではイエス様の御言葉に注目する。）

そうだね。「今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」とイエス様が言って、実際にイエス様はザアカイさんの家に行ったんだね。

実は、私たちのところにもイエス様は目には見えないけど、近づいて語りかけてくださっているんだよ。それがこの聖書。イエス様が天に昇られた後、聖霊なる神様が降られて、いろいろな人を通して聖書を書いてくださったんだ。それは、みんなに御言葉を届けるため。こんなに近くに御言葉を置いてくださっているんだよ。いつでも私たちは神様の御言葉読んだり、聴いたりできるよね。これは本当にすごいことなんだよ！

ザアカイさんもイエス様が近づいて来られて、イエス様の御言葉を聴いたよね。このザアカイさんの名前、ザアカイというのは「純粋」とか「清められた者」っていう意味があるんだよ。実際に、イエス様のこの御言葉を聴いたザアカイさんは嬉しくて嬉しくて、「財産の半分を貧しい人に施します！」と約束したよね。このイエス様に出会って、神様と人のために生きることを「聖化」って言うんだ。

今日こうしてみんなで御言葉を読んでいる時、みんなもこのザアカイさんになるんだよ。イエス様が近づいて来られ、いつもこの聖書・御言葉を通して語りかけてくださっている。一つでもいいから、この御言葉を覚えようね（最後に相応しい御言葉をみんなで覚えるのもいいかもしれない）。そしてどんな小さなことでもいいから、神様と人のためになることを見つけてしていこう！　疲れてできなくなっても大丈夫、いつもイエス様は共にいてくださるから。ここに御言葉があるから！　その時またみんなで御言葉からエネルギーをいっぱいもらって、神様と人のためにできることを見つけてしていこうね！

〈祈り〉

父なる神様。この御言葉からエネルギーを沢山与えてください。そして神様のために、友達のために私たちを用いてください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。

1月27日　聖化の恵み　小学科上級

〈ねらい〉

神の救いにあずかった者は、救いの喜びにより、聖化され、善き行いへと向かわせられることを、ザアカイを通して一緒に学んでいきたい。

〈展開例〉

○ルカ福音書19章1～10節を読みましょう

質問（アイスブレイク）

（教案誌第47号87ページを参照）

「教会に行っているから、善い生活をしなければならない」と考えたり、「教会に行っている人ってまじめな人ばかりだよね」と言われたりしたことはないですか？

今日は、ザアカイの回心を通して救いの喜びと善き生活について考えてみます。

質問①　ザアカイの仕事は何ですか？

A．徴税人（の頭）

質問②　ザアカイは人々からなぜ嫌われていたのですか？

A．人々から必要以上に税金を取り立て、私腹を肥やしていたから。また、ローマ帝国の手先となっていたから、など。

質問③　なぜ、ザアカイはイエス様を見に行ったのでしょうか？

A．（聖書には書かれていないので想像でよい）友だちがいなくてさみしかったから。イエス様とはどんな方か一目見てみたかったから、など。

質問④　イエス様とザアカイとどちらから先に声をかけたのでしょうか？

A．イエス様。

質問⑤　イエス様はなんと声をかけましたか。

A．「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

質問⑥　そのとき、ザアカイはどのように思ったでしょうか。

A．（自由に発言するとよいでしょう）

質問⑦　イエスと出会ってから、ザアカイはなんと言いましたか？

A．「主よ、私は財産の半分を貧しい人々に分け与えます。また、誰かから何かだましとっていたなら、それを四倍にして返します。」

質問⑧　なぜ、ザアカイはそのように変わったのでしょうか？

A．（自由に発言するとよいでしょう）

〈やってみよう〉

スライム作り

用意：ほうしゃ、PVA洗濯のり（どちらもドラッグストアで売っています）、水（色を付けたければ絵の具を溶いた水）、カップ、かき混ぜるもの。

手順：

①ほうしゃの飽和水溶液、洗濯のり、水を1:1:1の割合で用意する。

②カップに水と洗濯のりを入れ、よく混ぜる。

③ ②にほうしゃの飽和水溶液を入れ、混ぜて完成。

1月27日　聖化の恵み　　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

○「神の一方的恵みによる御業」

「義認」「子とされること」と同じく、「聖化」も神の一方的な（＝代価を求めない無償の）恵みの行為ですが、前二者が一度限りの「決定」と言われたのに対し、聖化は「継続的な神の御業」です。神は、私たちの長い生涯全体にわたって働いてくださって、義人・神の子という身分にふさわしく、だんだんと内側から作り変えてくださるのです。

○「人間全体にわたり神のかたちにしたがって新しくされる」

人は堕落によって、「神のかたち」に創造された人間本来のすばらしさを失ってしまいました。神はそんな私たちを再創造し、まことの知性・道徳性・宗教性を回復させ、思いと言葉と行いのすべてにおいてイエス・キリストに似せていってくださいます。

○「罪に死に義に生きることができるものとされる」

聖化とは、まず「罪に死ぬ」ことです。それは、罪に支配された古い私の死滅であり、「心から罪を嘆き、またますます罪を憎み、罪を避けるようになる」ことです（ハイデルベルク信仰問答、問89）。

また「義に生きることができるものとされていく」ことです。すなわち、キリストの復活の命を宿した新しい私が生まれることであり、「キリストにあって心から神を喜ぶこと、また神の御旨に従ったあらゆる善い行いに、心を打ち込んで生きるようになる」ことです（同問90）。

「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。　もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。　わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。」（ローマ6:4－6）

「イエス様に似せられていくこと、クリスチャンにとってこれ以上の幸いはありません。」っていう言葉があります。みんなにはまだピンとこないかな？私は、この言葉がかなり好きです。ほんとうにそうだなあって、しみじみ思います。イエス様のように、神様と人を愛せるように、また神様を信頼できるように、勇気を出して正義に生きることができるように、少しずつでも変えられている……。このことが本当にうれしいです。

分級の先生とも分かち合ってください。「先生はどういう風に変えられている？」って。もしかしたら、「自分は少しも変えられていない」と悩んでしまう時もあるかもしれない。（教会学校の教師であっても、そういう思いになる時はありますよね。信仰生活に喜びを味わえない時だってあります。）でも、そんな時は思い出してください。自分はダメだなあと思うことができるのは、すでにあなたが、新しく変えられ始めている証拠だということを。もう新しい自分に変えられ始めているからこそ、古いままの自分にがっかりしてしまうのです。聖霊は、あなたを聖化してくださっています。

2月3日　愛の歩み　教理説教のための聖書黙想

テキスト　エフェソの信徒への手紙 5章1〜2節
子どもカテキズム　問32, 33

問32　救われたあなたはどうなりますか。
　答　聖化の歩みを始めます。
問33　聖化の歩みとは何ですか。
　答　神さまの子どもとして、
　　罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。
　　神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

〈カテキズムの黙想から〉

義認と聖化は、いずれも、「キリストとの結合」による救いの恵みにほかなりません。父なる神は、聖霊を通し、信仰によって、私たちをキリストに結びあわせてくださいます。救いとは、主イエス・キリストが十字架と復活の御業によって獲得された霊的な祝福の分配にあずかることです。「キリストとの交わり」とは、徹底的に神の御業に他なりません。感覚や感情でとらえようとしてはなりません。

一方で、義認と聖化には、明瞭な違いがあります。義認は、神の一回的な御業ですが、聖化は具体的で継続的な「歩み」「生活」となります。人となられた神の御子でありキリストであるイエスさまの形、お姿に似せられていくことです。聖化は、地上にあっては遂に「未完成」で終わるものです。ただしそれは、空しいものでは、まったくありません。最後のとき、つまり死の時には、一瞬のうちに、神によって完成されるからです。したがって、私たちはまったく明るい、確かな希望の内に、キリストの形を、自ら獲得すべく徹底的に「努力」します。「自分の体を打ちたたいて服従させます。それは、他の人々に宣教しておきながら、自分の方が失格者になってしまわないためです」(コリントの信徒への手紙一第9章27節)と、使徒パウロが言うように励みます。しかし、この努力は、聖霊の恵みによってもたらされるもので、決して、自分の力で獲得できるものではありません。自らの力を誇ってみせたりすることは、まったくの的外れです。ここにキリスト者の地上の歩みの自由と勝利があります。私たちは、ひたすら救い主キリスト・イエスを仰ぎ見ることによって、「おのず」と、似せられていくのです。しかも、キリスト者ひとり一人が、判で押したような同じ姿、形になるわけではありません。その人らしくキリストに似せられていくのです。そこに、聖霊の豊かなお働きがあります。

子どもカテキズムは、聖化の歩みと神の愛とを深く結び付けています。キリスト者の生涯とは、神に愛され、神を愛する愛に包まれた生涯だからです。この上ない幸せな日々であり、人生と言わざるをえません。問1は、神を知り、神を喜ぶことが、人生の主な目的であると言います。それは、神に愛されている自分を知り、神に愛されている喜びを知ることにほかなりません。このような歩みをスタートさせていただいた幸いを、どれほど感謝してもしきれません。

なお、子どもカテキズムでは、まったく触れていませんが、ここで、根本的に大切なことがあります。それは、この愛は、必ず、自分を愛するように隣人を愛する愛へと広がり、そして実践することへと力強く突き動かす力となるということです。ディアコニア、つまり、神を愛し、隣人を愛する奉仕に生きる歩みなしの聖化は、私たちの目指す本来の聖化ではありえません。つまり、悪い意味での修道僧のように、個人的でしかも自己完結するような人格の形成を目指さないということです。聖化の歩みは、まさに神の愛の交わりに基づく、人との愛の交わりを喜ぶ歩みです。

そして、それはまさに自分の内なる力では、不

可能です。聖霊の御業に依り頼む以外にありません。そこに、私たちに与えられた恵みの手段、主の日の礼拝式への熱心が求められる必然性があります。

〈テキストの黙想から〉

神は、キリストにおいて私たちを養子として迎え入れてくださいました。私たちは、まさに神の子とされています。生まれた子は、必ず、親に似ます。養育者の影響を受けます。どんなに、似ていたとしても（？）猿の子は猿になり、人間の子は人間の子になります。キリストにおいて生まれた神の子らは、神が与えてくださった「恵みの手段」を大切に用いるなら、自分が神の子らしく成長できるかどうかについて疑うことなく、安心して信仰の生活を過ごすことができます。

「神に愛されている子ども」であるキリスト者もまた、その親に似ます。キリストにおいて生んでくださった生みの親であり、育ての親である天のお父さまに似ます。父なる神の完全な「形」である御子イエスさまに似ます。つまり、「神に倣う」とは、このイエスさまに倣うことにほかなりません。神と人を徹底して、命の限り、きわみまで愛された主イエスを見ていると、まさに、私どもの目標が分かります。愛の戦いへと私たちは召しだされています。

この愛は、一般的、あるいは人間的な「愛」とは異なります。この愛の特質は、「犠牲」です。「御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように」とある通りです。隣人となること、つまり隣人を愛するとは、自分が傷つき、痛むことを覚悟しなければできないということです。当然ながら、見返りを求めることもあり得ません。使徒パウロは、これを神の子たちに求めています。したがって、この命令は、私たちを自分自身の内にある人間的な愛やがんばり、理想に心燃やすことへと、押し出すものとはなりえません。到底、間にあうはずがないからです。ひたすら父なる神と御子なる神へと向かわせます。

いずれにしろ、「愛によって歩みなさい」との命令は、キリストとの交わり、三一の神の交わりの内に生きなさいという福音的な、喜びに満ちた呼び掛けです。神に愛されること、愛されていることを深く喜び、感謝する道が指し示されているのです。聖霊は、私たちを心から喜んで、進んで愛に生きるように仕向けてくださいます。

〈子どもたちの黙想から〉

契約の子らは、幼いときから、「あなたがたは神さまの子どもです。光の子どもです」と、福音の事実を宣言されて育ってきたはずです。一方で、「光の子」としての自分と現実の自分との違いに、教会生活がプレッシャーになったり、自分の姿に、かえって落ち込んでしまうこともあると思います。

私たちがわきまえておきたいことは、「信仰告白」以前の段階にある彼らは、未だ自覚的な信仰理解、体験を深めていないということです。言わば、ひとりの求道者として彼らを見る眼差しを忘れてはなりません。聖化の「恵み」が「良い子になりなさい！」という律法主義的、倫理的な勧告にならないように心したいと思います。

神に愛されている子は、教会生活における神との交わり、家庭における祈りの生活がなされていれば、言わば、恵みの手段を用いていさえすれば、「知らない間に」神の子どもらしくなることを伝えたいと思います。　（相馬伸郎）

2月3日　愛の歩み　説教展開例

テキスト　エフェソの信徒への手紙 5章1〜2節
子どもカテキズム　問32, 33

〔単元のねらい〕

聖化の歩みを子どもたちと学びます。それは、洗礼を受け、あるいは信仰告白を経た成人キリスト者の聖化の歩みと同じ面もありますが、違う面もあるはずです。もとより説教で聖化の恵みを語ることが重要です。しかしむしろ、分級においてこそ、ひとりひとりの信仰の成長（発達段階）に即し、丁寧に牧会（励ます）することが、事柄にふさわしい教理学習となるはずです。子どもたちが神の愛を体得し、愛の内に喜んで教会に通うということは、教師の愛を肌で感じることも求められていると思います。まさに、祈りなくして、信仰の教師になることはできません。聖霊の力強いお働きを求めましょう。

神さまに愛されている子どもの歩み

僕たち私たちは、イエスさまを信じて、神さまの子どもとされています。イエスさまが十字架にかけられ、復活されたおかげで、僕たち私たちの罪は赦されているからです。皆さんの中には、赤ちゃんのとき、洗礼を受けたお友達もいます。それは、そのお友達が、生まれる前から神さまに愛されて、神さまの子どもとして生まれ、育っていくことの、神さまからの保証であり祝福です。洗礼を受けていないお友達も、教会に来ています。感謝です。神さまの子どもとして、育っていくようにと、神さまが力強く導いていてくださるという保証であり祝福です。

例えば、人間の赤ちゃんがどんなに、猿に似ていたとしても、人間の子は必ず人間になります。神さまに愛されて、神さまの子どもにしていただいた僕たち私たちもまた、必ず、神のひとり子のイエスさまに似せられていきます。間違いありません。僕たち私たちが、神さまの愛と力によって、イエスさまに近づき、似せられていく、そのお働きのことを聖化と言います。

イソップ物語にウサギとカメのお話があります。聞いたことがあるでしょう。ウサギさんは、のろまなカメさんを馬鹿にしていました。そこでカメさんは、「ウサギさん、山のふもとまで、どうちが早くつけるか、競争しましょう」と言います。ウサギさんは、「よし、それなら勝負しよう」と、自信満々に言いました。

「よーい、ドン。」ウサギさんは、たちまちカメさんを追い抜いてしまいます。やがて、ウサギさんは、カメさんがはるか後ろで、もう見えなくなっていることに気づきます。すると、「あ〜、少し疲れたな。ここらでちょっと、お昼寝でもしよう。」こうして、居眠りを始めてしまいます。ところが、カメさんは、のろのろのろのろと、しかし、休まず歩き続けます。そして、とうとうウサギさんが目を覚ましたときには、カメさんは、山のふもとに先に着いてしまっていたというお話です。人は、あきらめないで努力していれば、最後には、報われる。勝てるというお話です。ウサギさんのように油断して怠けていると負けてしまうというお話です。

先生は、このお話が大好きなのです。何故かというと、先生は、こんな風にこのお話を理解しているからです。

がんばって走っているつもりなのに、歩いているとしか見えないカメさんです。そんなカメさんが、どうしてぴょんぴょん飛ぶように走れるウサギさんに勝つことができたのでしょうか。反対に、ウサギさんは、どうしてのろまなカメさんに負けてしまったのでしょうか。その理由は、カメさん

は、ただまっすぐに山のふもとを見ていたからです。ゴールを見ていたからです。ところが、ウサギさんが見ていたのは、カメさんでした。だから負けてしまったのです。

さて、僕たち私たちにとってのゴールとは、どこですか。人生の目的、ゴールとは、どこでしょうか。それは天国です。イエスさまのおられるところです。そこで大切なことは、僕たち私たちの歩み、人生というのは、人と比べて、あるいは競争して歩むものではないということです。カメさんはカメさんなりに歩めばよいのです。ウサギさんはウサギさんなりに歩めば、それで十分なのです。大切なことは、ゴールを見ることです。もっとはっきりと言うと、主イエス・キリストを仰ぎ見ることです。

さて、僕たち私たちは、山のふもと、つまり、天国の高く、遠くにいらっしゃるイエスさまを見つめているわけではありません。イエスさまは、いつでもどこでも、どんなときでも、僕たち私たちの目の前に共にいてくださり、見つめていてくださいます。どんな眼差しでみつめていてくださるのでしょう。それは、愛の眼差しです。優しい、そして力強い眼差しです。しかも、イエスさまは、前にいるばかりではありません。後ろにもいてくださって、背中を押してくださいます。横にもいて一緒に歩いてくださいます。疲れてしまって、「もう、無理、歩けない！ もう、歩きたくない！」そんな時でも、イエスさまは、私たちを背中にしょってくださいます。そのようにして、愛し、守ってくださるのです。皆さんは、これまでも、そうでした。そして、これからもそうです。僕たち私たちは、天のお父さま、イエスさま、聖霊なる神さまの愛の交わりの真ん中で、前からも後ろからも上からも下からも、いつも守られ、大切にされ、育てていただいているのです。それが神さまに愛されている子ども、僕たち私たちの姿なのです。

だったら、僕たち私たちは、この神さまの愛にどのようにお応えできるでしょうか。イエスさまは、もう2000年前に、ご自分の命を、十字架につけてくださるほど命をかけて僕たち私たちを愛してくださいました。だったら、僕たち私たちもまた、イエスさまを愛し、神さまを愛して生きていきたくなりますね。神さまありがとうございますという気持ちが湧いてきます。

そのとき、イエスさまは、こうおっしゃいます。「あなたが、ありがとうって思うのは、とても素晴らしいですよ。とっても嬉しいです。それなら、その気持ちを、あなたのお友達に向けてあげてください。お友達を大切にし、優しくしてあげてください。」つまり、神さまを愛するということは、あなたのお友達を愛することであらわすということです。

イソップ物語では、眠ったウサギさんの横を、カメさんは黙って通りすぎて行きます。けれども、いっしょに考えましょう。イエスさまに愛され、イエスさまといっしょに歩いているカメさんなら、そのとき、どうするでしょうか。「ウサギさん、ウサギさん、起きて、起きて！ 神さまは、あなたを愛しておられます。僕といっしょにゴールを見てください。天国をめざして、イエスさまといっしょに、どんどん歩きましょう。」

神さまに愛された子どもは、神さまを愛し自分を愛し、お友達を愛して生きていけます。イエスさまを見つめていると、知らない間に、似せられてしまうのです。それは、あなたの力ではなく、聖霊なる神さまの力強いお働きです。今日は、主の日。私たちは、今、ここで聖書のお話を聴いて、神さまの愛に満たされます。神さまの子どもたちは、日曜日に、教会に来ることで、どんどん、イエスさまに近づき、似せられていくのです。

（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　エフェソの信徒への手紙 5章1節

あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。

〈ねらい〉

礼拝で語られた説教をふり返りながら、神さまに愛されているわたしたちがどのようにお家や幼稚園で生活していったらよいかを共に考えます。

〈展開例〉

1. 用意するもの

①模造紙１枚。中央に線を引き半分に分けて、「神さまに喜ばれること」と「神さまに喜ばれないこと」と書いた見出しを書いておきます。

②A4用紙を1/4に切ったカードに、神さまに喜ばれることと喜ばれないことをそれぞれ10枚位書きます。予備のカードも用意しておきます。

喜ばれることの例：教会学校にくる、愛すること、喜ぶこと、真実、柔和、親切にする、悲しむ友だちがいたら慰める……（その他、幼児にふさわしい言葉を考えてください。）

喜ばれないことの例：いじわる、怒る、うそをつく、友だちが困っていても知らん顔をする等。

2. 分級で

③机の上か黒板に模造紙を広げ、書いたカードを１枚づつ見せながら、これはどっちですか？と子どもたちに聞きながら貼ります。

④先生が用意した紙だけでなく、他にどんなことがあるかな？ と子どもたちに質問して、できたら一人ずつ、嬉しかったこと悲しかったことなどを聞いて、出た意見を予備の紙に書いて貼ってあげるとよいでしょう。

分級の最後に、振り分けたカードをみんなで見ながら、イエスさまの愛や「愛するとは何か」を先生がまとめます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、あなたの大切な御子イエスさまをわたしたちのために身代わりにしてくださって、ありがとうございます。わたしたちを神さまの子どもとしてくださって、ありがとうございます。イエスさまを信じ、イエスさまと共に歩んでいきますから、神さま、どうかその力を与えてください。

2月3日　愛の歩み　小学科下級

〈主旨〉

神は、召された者をキリストに似た者とされる(ヘブライ12：1，2参照)。

〈展開例〉

○みんなは憧れの人っているかな？（いる・いない、～さん、～選手……、いない人には興味あるもの、趣味などを聞いてもいいかもしれない）

○どうしてその人に憧れるのかな？／どうしてそのものに興味があるのかな？（かっこいい・かわいい、人のために頑張ってるから……、おもしろいから、好きだから……）

憧れている人がいる場合、実は気がつかないうちにその人に似てくるっていうことがあるんだよ。

先生も……（具体例を挙げるとわかりやすい）。

または好きなものとか興味のあるものがあると、そのことに集中するよね。頭の中もそのことでいっぱいになることもあるかもしれないね。

○では、神様が憧れる人って誰だろう？（？？？）

神様に憧れる人がいるっていうのは何か変だね。神様にとって興味があることって言ったらいいかな。それはね、みんなのことなんだよ。

○どうしてみんなのことに興味があるんだろう？かっこいい・かわいいからかな？　何か神様・人のためにいいことしたからかな？

そうじゃなくて、ただ神様がみんなのことを愛しているから。本当に大切に思っているから。それだけなんだ。

○先週のお話し覚えているかな？　ザアカイさんは友達がいたかな？　ザアカイさんの周りの人はザアカイさんのことが好きだったかな？

○でもイエス様はどうされたんだっけ？（話しかけた。家に泊まった）

そうだね。実はその時、ザアカイさんがイエス様をお迎えしたんじゃなくて、イエス様がザアカイさんを招いてくださったんだよ。

今こうして教会に来ているみんなもそう。イエス様が招いてくださった。それは愛する家族として、子どもとして招いてくださったんだ。何もなくても神様にとってみんなは宝物だからね。そして神様はみんなを招いてくださっただけじゃなくて、イエス様のようにイエス様に似た人として成長させてくださるんだよ！

みんなで今日の御言葉を覚えてみよう。エフェソ5章1節。

〈祈り〉

天の神様。私たちを愛して大切にしてくださってありがとうございます。イエス様が友達もいなかったようなザアカイさんにしたように、私たちもそのイエス様に似た者として歩めるようこれからもお守りください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈子どもカテキズム〉

問32　救われたあなたはどうなりますか。

答　聖化の歩みを始めます。

問33　聖化の歩みとは何ですか。

答　神さまの子どもとして、罪に死に、神さまの御子イエスさまのお姿に似せられていくことです。神さまに愛されている喜びのうちに、私たちも神さまを愛して歩みます。

〈子どもと一緒に考えるポイント〉

①私たちが神様を愛したのでなく、神様が私たちを愛してくださる。

②本当の愛を教えられた私たちは、神様のように愛をもって生きていくことができる。

〈展開例〉

○神は愛

クリスチャンでない人にも、キリスト教は愛の宗教だと知られているくらい、キリスト教と愛の関係は深い。けれども、実際、愛するって、愛されるってどういうことなのか。

Q1　愛と聞いてあなたが想像することは何ですか？

Q2　あなたは誰か（お父さん、お母さん、兄弟姉妹、友達など）に愛されていると感じたことはありますか？

Q3　神様に愛されていると感じたことはありますか？

○聖書の教える神様の愛

神様の愛を知ることのできる聖書箇所はたくさんある。そんな愛あふれる聖書の中でも愛の書簡と言われるのがヨハネの手紙一。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。（ヨハネの手紙一4章9、10節）」

この箇所は、愛の本質（最も大切なこと）が何であるかを教えてくれる。神様の愛とは与える愛、ささげる愛、差し出す愛。それも人間的な計算した愛ではなく、ご自身が最も愛を注がれるはずの御子イエス・キリストを十字架に架けるという形でお示しくださった愛である。

今の時代、テレビやインターネットでも、あるいは学校や日々の生活の中でも、愛という言葉はよく聞くだろうし、愛のエピソードなんてものを耳にすることもあるかもしれない。けれども、ここまで真っすぐに少しの曇りもなく愛を示してくれた方、愛してくれている方を君は知っているだろうか。

○愛をもって生きていこう

神様の愛を知っている私たちは、この愛をもっと多くの人たち伝えていきたい。それは、言葉で語るだけではなく、神様と同じ愛で愛することによって伝えていきたい。

愛をもって生きていこう
互いに手を取りあって
イエスのため生きていこう
愛の光の中を
私の人生は愛が満ちあふれる
愛し合う心をイエスは教えてくれた
（「愛をもって生きていこう」、
作詞・作曲　長沢崇史）

自分を愛するのは素晴らしいことだと思う。でも、自分と同じくらい他の人のこと、特に君の苦手な人や、君の敵となり得る人を愛することができたら、それは私たちを愛してくれている、主なる神様に倣う愛と言えるのではないか。

2月3日　愛の歩み　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

今日のエフェソ書の御言葉と、同じことを教えてくれる言葉が、聖書にはたくさんあります。みんなで思い当たるところを探してみませんか？

「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」（ヨハネ15:12,13）

「だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。」（ローマ15:7）

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。」（ヨハネの手紙4:7－11）

いずれも共通しているのは、「神様が（イエス様が）あなたを愛してくださったのだから、あなたがたも愛し合いなさい」ということです。これは、「良きサマリア人」のたとえでイエス様がお示しになることでもあります。

あのたとえは色々な解釈ができますが、あのサマリア人こそイエス様そのものと言えるでしょう。そして、たとえの最後に言われます「行って、同じようにしなさい」それはつまり、イエスにしてもらったのと同じようにしなさいということなのですね。わたしがあなたにしたように、あなたも誰かの隣人になりなさいと、送り出されるのです。そういう憐れみを受けたことのある人にしか、人を憐れに思うことはできません。愛された人にしか、愛することはできないのです。

深く愛された人だけが、愛することのできる者となって、誰かの隣人になろうとします。この私にも、そんな風にして隣人になってくださった友があり、恩師がいます。本当に親身になってくださって、この未熟者にどこまでもかかわってくださった先生がいます。その方は牧師ですが、こう教えてくれました。「私がしてもらったことを、してあげたいと思うだけだ。あなたも同じように、誰かに関わってあげてください。」だから私も誰かの隣人になりたいと願うようになりました。そういう風にして、愛することのできる者が生まれるのです。誰かの隣人になろうとする者が生まれるのです。

その一番はじめには誰がおられたのかと言えば、イエス・キリストがおられたのです。私のところまでつながってきた愛の鎖のそのはじめには、十字架の主がおられるのです。この方は、誰からも愛されずとも愛することのできる方です。自分につばを吐きかけた者のために、その命を投げ出してくださる、そんな無限の愛を持っておられる方です。そういう方のことを、私たちは神と呼ぶのです。

2月10日　良心の自由と尊厳　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 16章33節
参照教理問答　子どもカテキズム　問43, 44

問43　第一戒は何ですか。
答　「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」、です。
問44　第一戒で神さまが願っておられることは、何ですか。
答　私たちの真の神さまだけを心から礼拝しなければならない、ということです。
これがもっとも大切な戒めです。
ですから、私たちは喜んで礼拝をささげます。

〈教育権は誰のもの〉
―信教の自由を守るために―

ギリシャの哲学者は、「すべての人は生まれつき、知ることを欲する」と言いました。これに対し、16世紀、教会の改革者カルヴァンは、「人生の主な目的は、神を知ること」（ジュネーブ教会信仰問答問1）と言いました。

私どもの教会に決定的な影響を与え続けるこの改革者は、このような短い言葉で、人間教育の目的は神を全人格的に知ることにこそあることを明らかにしました。

そこで、明らかにされるのは、教育の真の主体は、誰なのかということです。これは、言うまでもないことでしょうが、先ず、創造者なる神ご自身でいらっしゃいます。しかし、神はその貴任を、第一に親に与えられました（申命記第6章7節）。親（養育者）こそ、教育権の主体、教育の貴任者なのです。これは、とりわけ今日の日本の教育行政、政治の動きをみるとき、キリスト者こそ、声をあげて、証ししなければならないことです。決して、国家や権力者に奪われてはなりません。教育する権利は、神からの賜物であり、親の貴任だからです。

同時に、親の教育は、とりわけ信仰教育は、教会の信仰教育の支援なしには、よく果たされないと思います。ふさわしい実を結ぶことは、とても困難だろうと思います。したがって、教会は、契約の子らへの教育を、親を通して、神からゆだねられていると考えることができます。ここに弊誌の使命と貴任もあり、教育関連の諸委員会の使命と貴任が与えられているのだろうと思います。

その意味では、教会（小会）は、契約の子らへの教育を、教会学校（子どもの教会・日曜学校）教師会や教師たちの奉仕に任せきってしまうことは決して許されません。契約の子らへの信仰教育は、小会を中心に、教会全体の働きとしてまさに総力を挙げて担うべき大事業です。教会形成にとって根本的な課題なのです。

たとえば、塾や部活動によって教会から離れやすくなる子たちを、彼らに居場所や奉仕の貴任などを与える知恵や工夫をもって食い止め、信仰告白へと導きたいものです。その意味で、中会、大会もまた総力を挙げて支援すべき事柄です。

もとより、信仰の教育は、単に魂の救いだけを求めてなされるものではありません。神は、神の民を通して教会と社会において、ご自身の栄光を現わされます。神の「一般恩恵」を信じる立場に立つキリスト教教育は、一般教育や公立の学校教育を軽んじることはありません。

ただし、改定された新・教育基本法は、教育の主体を親や子どもたちから、ふたたび国家へと奪ってしまいました。今や、東京都のみならず、大阪維新の会を先頭に、日の丸、君が代の強制が教育の現場を混乱させ、委縮させています。契約の子どもたちもまた、入学式、卒業式において、大変な緊張感を強いられています。

それだけに今、私たちは、いっそう注意深く、子どもたちの教育環境に関心を持つ必要があると思います。そして、信教の自由を守る戦いは、真

の「教育権」を常に、明瞭にさせることに通じることを、わきまえたいと思います。そしてそれは、同時に、良心の尊厳と自由は、神に与えられたものであって、決して、国家や権力者の都合に合わせて人間を教育してはならないという、私たちの信仰の戦いに通じるはずです。良心は、ただ神によってのみよく磨かれます。錆びついた包丁でも、しっかり研げば、まったく見違えるほどになります。人間こそ、神とその御言葉によって磨かれなければならないのです。

教育権を奪われないようにと喚起をうながしながら、公教育や義務教育がなされるようになれば、おそらく、子どもたちの主体性を尊重した、自由で、楽しい教育現場が作られて行くことになると思います。

その意味では、今朝の特別の礼拝式は、教師たちにこそ、大切にされなければならないでしょう。最後に、何よりも、親自身が問われることがあるだろうと思います。それは、とりわけ受験のための教育などにみられる、世の誇りや地位を優先させようとするこの世の誘惑に流されてしまいやすいということです。そこでこそ、神の国とその義を第一とする生き生きとした確かな信仰が求められています。そして、そのためにこそ、教会の皆で祈りを集めなければならないと思います。

〈第一戒に生きる〉

神を神とするとき、つまり、第一の戒めを生きるとき、人間はもっとも人間らしくいられるようになります。人間らしさとは、神の形として造られ、与えられた人間性が損なわれないで成長することです。しかし、それは、先ずは自分の罪との戦いから始まります。自分を絶対化し、自分を正当化し、自分を中心に考え、生きようとする根深い罪の力と戦い続けることです。信仰のよい戦いとは、結局は、ここに尽きるものです。

そして、それはまた、この第一戒を破らせようとする社会の言わば構造悪とも戦わなければ、現実のものとはなりません。地上にはなお、神の国は未完成であり、これを破壊する暗闇の力が、吠えたける獅子のように、教会とキリスト者に挑んでくるからです。

〈テキストより〉

—既に世に勝たれた勝利者イエス—

イエスさまは、宗教指導者たちの手に掛けられ、殺されることをご存知でいらっしゃいました。そのために、前もって説教を語っておられたのです。

主イエスは、あなたがたが私を捨てて、ひとりきりにしてしまう時が来ていると予告されます。しかし、主イエスは、常に父なる神が共にいてくださるということを、明らかにしてくださいました。そしてこれは、キリスト・イエスを信じる私どもにおいても、まったく同じ祝福が約束されているのです。ただし、掘り下げて言えば、主イエスは、十字架において父に捨てられるわけですから、その意味では、おひとりきりになってしまわれます。

それは、ただひとえに、私どもがもはや決して捨てられることなく、神との平和を永遠に楽しむことができる道を開くためでした。本当に、このお方の愛、天のお父さまの愛の深さ、広さ、高さ……に感嘆するのみ、賛美あるのみです。

主イエスは、「あなたがたは世で苦難がある」と語られます。わたしを信じるあなた方は、苦難とは関わらないで済むとは、仰いません。むしろ、反対と言えます。しかし、主イエスは、私どもにお命じになります。「しかし、勇気を出しなさい。」何故なら、「わたしは世に勝っている」からだと仰います。このキリストに結ばれた私たちもまた、ただそれだけで、既に人生の究極の勝利者です。

（相馬伸郎）

2月10日　良心の自由と尊厳　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 16章33節
参照教理問答　子どもカテキズム 問43,44

〔単元のねらい〕

大人には何でもないことでも、子どもたちには、ほんとうに怖いことが多いと思います。もちろん、私たちにもしばしば恐れが襲いかかります。しかし、それでも、子どもの頃に比べれば、年の功で、その対処の仕方を身につけています。その意味で、子どもたちに、「そんなちっぽけな悩みは、取るに足りない……」という目線で語れば、まったく逆効果になるはずです。もっとも小さな者でいらっしゃるイエスさまは、小さな者たちの不安をよくご存じです。主イエスが、「死に勝ったこのわたしがあなたと一緒にいる。天のお父さまがいっしょにいる。だから、怖がらなくてよい」と語ってくださいます。いっしょに勇気を出して、イエスさまといっしょに進もうと、伝えたいと思います。

わたしは既に世に勝っている

先生は、子どもの頃、とても怖がりでした。特に、夜の道がだめでした。小学生の頃、「お父さんに「タバコを買ってきて」と言われました。とても嫌でした。外はもう暗いからです。いつもは、「嫌だ！」と言います。でも時々、「お小遣いをあげるから」と言われます。迷います。お小遣いが欲しい気持ちが勝つと、「じゃあ行ってきます」と、玄関を飛び出して、最初からかけ足です。とっても怖かったからです。今から思えば、自動販売機まですぐでした。あの時は、おばけとか幽霊とか、何より悪い大人の人が怖かったのだと思います。

皆さんにとって今一番怖いのは、何でしょうか。幽霊でしょうか。お化けでしょうか。お母さんやお父さんに怒られるときでしょうか。お友だちに意地悪をされたり、いじめられたりすることが、いちばん、怖くてつらいかもしれません。（そんなときは、ぜひ、教会の先生に気軽に相談してくださいね。）

大人になると、夜の道を歩いても平気になりました。けれども実は、大人になっても怖いものは、いろいろあるのです。それなら、大人にとっても子どもにとっても、つまり、人間にとって、いちばん怖いものって何でしょうか。聖書は言います。それは死です。自分が死んでしまうことです。ヘブライの信徒への手紙第2章15節にこうあります。「死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たち。」つまり、人間は誰でも、自分の死ぬという恐ろしさのために、奴隷のようにがんじがらめに縛り付けられているというのです。不自由になっているというのです。もしかすると、皆さんより、先生たち、大人の人たちの方が、この恐ろしさに縛られていると思います。

ところが、多くの大人の人たちは、いつも怖がっているようには見えませんね。何故だか分かりますか。とても簡単です。考えないことにしているからです。「まだまだ、自分は若いし、病気もしていないし、そんなことは、今の自分には関係ない」と、無視しているのです。そうすると、不思議なことですが、その人には死がないことになってしまうのです。たとえば、今、目の前に先生が立っています。もしも目をつぶって、耳もふさいでしまえば、どうでしょうか。先生をここにいないことしてしまえませんか。それと同じことをやっているのです。あるいは、死について、自分勝手に、自分の都合のよいように考えるのです。やれ、死んだ後は、自分はすばらしい花園で、先に死んだ人たちと楽しく会える。死んだらそれっきり、何にもない。死後の世界について、いろい

ろと空想するのです。だから、平気でいられるわけです。けれども、本当のところ、怖いからこそ、そんなふうにしているわけです。

さて、それなら、僕たち私たちのイエスさまに怖いものはあったのでしょうか。福音書を読んでいると、イエスさまが「怖がり」なんて、考えることはできませんね。イエスさまは、いつも勇敢です。たとえば、イエスさまはたった一人で、四十日四十夜、荒れ野に出て行かれました。そこはとても怖い場所です。狼が出るかもしれません。狼どころではありません。イエスさまは、そこで悪魔と直接戦われました。またイエスさまは、お金もあれば、この世の様々な力を持っている大勢の人たちから、命を狙われていました。夜ひとりでお祈りされていたとき、剣をもった大勢の兵隊たちに捕まえられました。ところがイエスさまは、少しも怖がられませんでした。ついに十字架につけられるときも、じたばたされませんでした。いったい、こんなに勇敢な人間が他にいるでしょうか。イエスさまは、ものすごい勇敢なお方です。

しかし、そのイエスさまにとって、たった一つだけ、怖いことがありました。それは、天のお父さまと離れるということです。そのようなことはただの一度もありませんでした。何故なら、天のお父さまはイエスさまのことを愛しておられるからです。永遠のはじめから、天のお父さまと御子なる神さまのイエスさまとはいっしょにおられたからです。ただの一度だって、一瞬でも、離れ離れになったことなどないのです。そんな暖かい愛の関係、すばらしい平和と喜びのなかに、天のお父さまとイエスさまとは、いつもいらっしゃいました。そして、それが僕たちがやがて迎え入れられるすばらしい天国なのです。

ところが、天のお父さまは、十字架の上で、イエスさまから離れてしまわれました。イエスさまにとって、その時こそ、恐怖です。

いったい何故、天のお父さまは、御子であるイエスさまをお見捨てになったのでしょうか。それは、イエスさまが僕たち私たちの罪を背負って十字架にかけられたからです。つまり、僕たち私たちの罪の身代わりになられたからです。イエスさまは、ご自身にとって、一番、恐ろしいことを、僕たち私たちを救うために、罪を赦し、神さまの子どもとするために、お受けになられたのです。けれども、それで終わりませんでした。天のお父さまは、イエスさまをお墓の中から甦らせてくださいました。

こうして、僕たち私たちは、完全に罪を赦され、救われて、神さまの子どもとされたのです。イエスさまが、このように死に打ち勝たれたおかげで、もう、僕たち私たちは、死の奴隷ではありません。イエスさまといっしょに勝利を与えられたのです。感謝です。

確かに、それでもまだ、僕たち私たちには、いろいろな苦しいこと、悲しいこと、つらいこと、問題がたくさんあるでしょう。学校の中で、イエスさまを信じているお友達が誰もいないとき、心細いかもしれません。けれども、今朝の暗唱聖句を唱えてください。「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」そして、お祈りしましょう。そのとき、勇気が湧いてくるはずです。イエスさまがあなたといつでも、どんなときでも、必ずいっしょにいてくださるからです。　（相馬伸郎）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 16章33節

これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。
あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。
わたしは既に世に勝っている。

2月10日　良心の自由と尊厳　幼稚科

〈ねらい〉

この地上で生きていくときに、恐れを抱くとき、悲しいとき……いろいろあると思うが、すべてをご存知の神さまにゆだねて生きていこう。
この地上での歩みに勝利しているお方であるイエスさまが共に歩んでくださることを伝える。

〈展開例〉

1. みんなは毎日どんなことをしているのかな？

子どもたちの日々の歩み、行動を話し合ってみる。

2. みんなが生活している毎日で、こわいなと思ったことはあるかな？

それはどんな時かな？
家の中、幼稚園、お友だちと遊んでいるとき？
子どもたちに、今までの経験を聞いてみる。

たとえば……
イエスさまを知っているお友だちがいなくて心細くなってしまう。
教会に行っていると言えないとき。
本当はイエスさま大好きって言いたいのに、言えなかったとき……。
神さまの存在を否定されたとき。

3. 苦しいとき、悲しいとき

イエスさまに相談しようね。イエスさまに話してごらん。
イエスさまにお祈りすると力が与えられて、元気になるよ。
すでに世に勝っているイエスさまが一緒にいてくださるから大丈夫だよ！
日曜日には教会に来て、真の神さまを心から喜んで礼拝しようね。
神さまから、新しい一週間の生活の力を頂いて帰ろうね！

〈賛美しよう〉

「主イエスとともに」

主イエスとともにあるきましょう　どこまでも
主イエスとともにあるきましょう　いつも
うれしいときも　かなしいときも
あるきましょう　どこまでも
うれしいときも　かなしいときも
あるきましょう　いつも
（『ふくいん子どもさんびか』90番、いのちのことば社）

〈お祈り〉

天の父なる神さま、御名を賛美します。今日も教会に来ることができて、ありがとうございます。わたしたちがいつもイエスさまと一緒に歩くことができますように、お守りください。アーメン。

2月10日　良心の自由と尊厳　小学科下級

〈主旨〉

神は、私たちが神のみを礼拝する為に主イエス・キリストの勝利を与えてくださっている。

〈展開例〉

○みんなは人と動物の一番の違いって何だと思う？（こう質問すると話が止まらなくなる可能性があるので、きりのいいところで、人間が礼拝行為者であることへ導きたい。例えば、「犬や猫がお祈りしているところをみたことあるかな？」など……）

人は礼拝するために造られたんだ。

○でも日本にはたくさん神様がいるよね。本当に神様ってたくさんいるのかな？（いない・一人だけ）

そうだね。人の手によっていろいろな神様が作られてしまうよね。またはすごい人がいるとすぐ「神」って言ったりする人が周りにいるかもしれない。人が神様を作るとか、人が神様になってしまうってなんだか変だよね。本当は反対のはずなのに。

神様はお一人しかいないっていうことを教えてくれているのがこの聖書だよね。神様の言葉である聖書から神様はなんとおっしゃってくださっているのか、もう一度今日のカテキズムをみんなで読んでみよう……。

このただお一人の真の神様を私たちが礼拝することこそ、一番大切なものなんだよ。

○何でかな？（子どもたちの答える内容によって教師の応用が求められる。例：①それが私たちを守ることにつながるから／よき道標、②神様より大切なものはないから／もしあるとしたらそれは傲慢と排除の論理が働く、③それが本当の喜びと楽しさだから／私たちの人生の目的……）

もしかしたら学校や友達との関係で、「神様より大事にしなければならない」っていう雰囲気があるかもしれないね。または友達の前では神様を信じているって言うことができないかもしれないね。とても苦しい思いをするかもしれない。もう負けそうになるかもしれない。でも大丈夫。イエス様ご自身が、私たちより先に勝利してくださっているから。その約束の確かな神様の言葉もう一度皆で読んでみよう。ヨハネ16章33節。

〈祈り〉

天の神様。いつも教会に来て礼拝することができて、ありがとうございます。どうか、ただお一人の真の神様のみを礼拝することができるように強めてください。そしてイエス様がいつも私たちと共にいて、勝利を与えてくださっていることを覚えられますようにお導きください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

2月10日　良心の自由と尊厳　小学科上級

〈今日のみ言葉から〉

これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。（ヨハネによる福音書16章33節）

〈子どもと一緒に考えるポイント〉

①人生そんなに良いことばかりじゃない。苦しいこともたくさんある。

②そんな苦しみの中にも希望が備えられている。

〈展開例〉

○苦しみに直面して

生きるというのは楽しいことや良いことばかりではない。大人でも子どもでも辛い経験や苦しい経験をしたことがたくさんあると思う。では、聖書はそんな苦しみに直面したときどうしなさいと教えているか。

Q1　あなたは今までに辛い経験や苦しい経験をしたことはありますか？

Q2　あなたの経験談を一つ教えてください。

Q3　そのような問題に直面したとき、あなたはどう解決しましたか？

Q4　あなたではなくイエス様がその問題に直面したら、どう解決したと思いますか？

○喜びなさい、大いに喜びなさい

イエス様は、生まれたときにヘロデ大王に命を狙われる（マタイ2章参照）ところから始まり、その生涯において人々からの迫害や試練を多く経験している。では、そのようなイエス様ご自身は苦しいときどうしなさいと教えられたか。

「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。（マタイによる福音書5章11、12節）」

これは有名な山上の説教でのイエス様の教え。マタイによる福音書では、最初に「幸せ」について教えられ、その結論部分が上記の言葉になる。正直、人々からの迫害や悪口が自分の幸せにつながるなんて意味がわからないし、イエス様ってやたらスポ根なストイックな方だなと思ってしまうかもしれない。

それでは、この喜びって何なのか。

○天国への希望

喜びについて知るには、すべての出来事には意味があるということを知らなければいけない。だから、良いことばかりでなく困難や絶望的な状況にすら意味はあるということ。私たちの人生は、決して運だとか「たまたま」などということに左右されない。すべては神様が創られ、導かれた計画の中にある。

困難や試練は人間的には経験したくない。なるべく楽しく幸せに暮らしたい。でも、どちらの状況にあっても私たちの主なる神様は共にいるということを忘れないでほしい。そしてどのような時にも神様が共にいる、この信仰こそが喜びであり、希望を与えてくれる。

喜びとは、神様に出会い、神様のものとされ、神様と生きること。天国への希望をもって歩んでいこう、Hallelujah!

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。（ローマの信徒への手紙5章3、4節）」

2月10日　良心の自由と尊厳　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

明日は2月11日。「建国記念の日」とされていますが、これは日本書紀に記される神話において、神武天皇の即位の日とされている日であり、かつて「紀元節」と呼ばれていた日です。

大日本帝国においては、天皇は神だと信じさせられ、天皇のために死ねば、自分も英霊として靖国神社に祀られると約束されました。これは、「天皇教」と呼んでいい、国家神道という宗教です。そして、日本人であればこの天皇に従って、天皇を拝め、拝まない者は非国民として罰すると、強制されました。

キリスト教会も、天皇崇拝や神社参拝を強制させられました（天皇よりもキリストの方が偉いと抵抗して、獄に入れられ、拷問され、殺された方々もいます）。紀元節というのは、そんな天皇教の一大イベントでした。

そういう紀元節の日こそ、「建国記念の日」だと強引に決めてしまって、それを盛大にお祝いしたがる人々の心には、今も同じような思いがあります。「日本は天皇という神を中心とする国であって、これに反対するような奴は日本人ではない」という考えです。こういうことを、はっきりと言葉に出して言う人は一部の政治団体だけかもしれません。でも日本の国の政治家のかなり多くは、そういう思想を持っています。そして今はネットの世界などで、そういう考えに染まった方々の暴力的な言葉が飛び交っています。なにより、ほとんどの「ふつう」の日本人は、表面上無関心を示しつつも、無意識の内にそういう考えを受け入れています。そういう群衆こそが、もっとも恐ろしい。天皇教が再び勢力を取り戻した時に、あっというまにみんな染まってしまって、それに従わない人々を、「ふつう」ではない「非国民」といって排除しはじめるのです。

かつての間違った戦争の時に、そういうことが起こりました。みんなが「天皇万歳!!」とマインドコントロールを受け入れて、この戦争は天皇の導く「聖戦」だと信じ込みました。たくさんの若者が死んで行っても、「お国のために死んだ。すばらしい!!」と言いました。「この戦争はおかしい……、間違っているのでは……」と思っても、口に出すことはできません。「ふつう」ではない「非国民」と呼ばれて、仲間外れにされて罰を受けるからです。そうして、たくさんの人が「何かおかしい」と思っていたのに、それを口に出せないままに、ずるずると間違った戦争を続けて、あまりにもたくさんの人が死に、同時にたくさんの外国の人を殺しました。最後は原爆を落とされて、ボロボロになって、ようやく戦争は終わりました。思想・信教の自由を私たちから奪おうとした大日本帝国という国は、そうやって破滅したのです。

こういうことを丁寧に考えて、こういう問題を多くの人に気付いてほしいから、私たちの教会では2月11日を「建国記念の日」とは認めずに、「信教の自由を守る日」として記念します。日本は天皇を中心とする国だ、天皇を拝めと押し付けてくる人々に対して、私たちはキリストという王様に従うキリストの民だ、あなたがたの考えに従うことはできないと、抵抗する思いを新たにする日としても大事にしたいのです。

2月17日　主イエスと共に歩む　教理説教のための聖書黙想

テキスト　マタイによる福音書 28章18〜20節
子どもカテキズム　問35
参照教理問答　ウェストミンスター大教理問答 問64〜66
ウェストミンスター信仰告白 25章

問34　だれと歩むのですか。
答　私はひとりぼっちではありません。
私たち、神の民の祈りの家、キリストの体なる教会と共に歩みます。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

キリスト者の歩みは、徹底して、主イエス・キリストによって支えられている。天に上げられるに際して語られた主イエスの御言葉を、大きく三つのこととして理解することができる。

一つは、「わたしは天と地の一切の権能を授かっている」である。これは、主イエスがどのようなお方であるのかを明らかにしている。主イエスは、御父より、天と地の一切の権能を授かっておられる。神の右に座して、今も天と地を統べ治めておられるお方である。

二つは、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい」であり、代々の教会に対して福音宣教を命じておられる。天と地を統べ治めるキリストの権威は、とりわけ福音宣教においてあらわされる。それゆえ、わたしたちキリスト者は、福音を宣べ伝えることによって、天と地を統べ治めておられるキリストのみわざに参与するものとされている。

三つには、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」であり、キリストの臨在の約束である。主イエスは、その肉体においては地上を去り、天へと上げられた。それは、わたしたちのもとを去られたのではなく、「いつも共にいる」ためである。すなわち、キリストは、神の右に座して、ご自身の霊である聖霊をお送りくださった。その聖霊にあって、キリストは今も教会をご自身の神殿としておられるのであり、教会はキリストの体である。そして、キリストは、教会に召し集められているキリスト者一人ひとりの内にいつも住んでくださっているのである。

キリスト者は、このキリストに結ばれて生かされる。もし信仰者が、その人生の荒波を自分自身の力で耐えぬかなければならないなら、それはどんなに困難なことであろうか。いや、人間にはできないことだと言わなければならない。しかし、キリスト者には、今も天地を統べ治めておられるキリストが天におられるのであり、キリストの霊がわたしたちの内に住んでくださって、わたしたちを強め励まし、導いてくださるのである。

そして、そのキリストとは、十字架のキリストである。上げられたキリストの権威も、十字架の権威にほかならない。すなわち、ご自身の十字架の御業によって、罪を赦して、罪人を神の御前に立ち帰らせる権威である。それゆえ、わたしたちは、たとえ罪に悩むことがあっても赦しを求めることができる。道に迷うことがあっても、立ち帰ることができる。福音に固く立って宣べ伝え続けることができる。罪に苦しむ仲間のために執り成して祈り、いよいよ多くの方が神のみもとに立ち帰ることができるよう、招き続けるのである。

こうして、わたしたちは、教会を建て上げる歩みに連なるものとされている。わたしたちはキリストにあって神の民、キリストの体なる教会へと一つに結び合わせられて、教会の兄弟姉妹と共に歩む。互いに罪を赦しあい、執り成しあい、戒めあって、地上の生涯を終わりまでまっすぐ歩み抜くことができるよう励ましを受けることができるのである。わたしたちは教会に結ばれ、教会で養われ、励まされ、慰められ、終わりまで全うすることへと整えられるのである。

〈子どもカテキズムの解説と黙想〉

「子どもカテキズム」は基本的にウェストミンスター小教理問答の構造を用いて記されているが、この問答はウ小教理にはないものである。これは、「聖化」が取り上げられる中で、教会の役割を強調して、加えられている問答である。

キリストの十字架の恵みを知って、キリスト者の信仰生活が始まる。それは、聖霊によって造り変えられる歩みである。しかし、それは個人的に成し遂げられるものではなく、教会と一つとされて成し遂げられるものである。この点で、キリスト教信仰は、各個人の信仰的決断が求められるものであるが、そこで始まる信仰生活は共同的なものである。キリスト者の信仰生活は教会生活である。「聖化」について、個人的な事柄として理解するのではなく、共同的な営みとして理解することが求められる。

すなわち、キリスト者の聖化のために、個人的な聖書の学びと祈りが求められることはもちろんであるが、何よりも教会で「恵みの手段」にあずかることが不可欠である。聖書は、聖霊降臨によって生み出された新約の教会について、「使徒の教え」「相互の交わり」「パンを裂くこと」「祈ること」に熱心であったと語っている（使徒2:42)。これは、御言葉（の説教）と礼典と祈りに熱心であったということである。ウェストミンスター小教理問答の問88は、この「御言葉と礼典と祈り」の三つを、キリストが十字架の贖いの恵みを信仰者に与えるために定めてくださった、外的な、普通の手段として挙げている。神がご自身の教会に備えておられるこの恵みの手段を大切にして生きるときに、わたしたちは聖化の道を確かに歩む者とされるのである。

〈子どもたちに対して〉

主イエスの約束の言葉、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とは、聖霊によるキリストの臨在の約束であり、同時に、キリストの体なる教会に結び合わせられて生きることへの招きの言葉である。聖霊の宮である教会に連なってこそ、地上の生涯を終わりまでキリストに結ばれて歩み抜くことができるからである。

このことは、子どもたちにとっても真実である。そして、キリスト者として生きるとは、決して個人的な営みではなく、共同的な営みであると、若い時期に知ることができることは幸いなことである。いや、若い時期にこそ、互いに祈り合い、励まし合う仲間の存在が大きな意味を持つ。

子どもたちの置かれた状況を考えるならば、毎日の生活は主イエスを知らない人たちが圧倒的な多数である中に置かれている。多くの場合、教会に集まる日曜日以外は、キリスト者のお友だちと接する機会はほとんどないであろう。その中で、孤独を感じて、信仰生活の困難を味わうことは、決して少なくないであろう。

この点で、たとえキリスト者が自分しかいなくても、主イエスはいつも一緒にいて、助けてくださっていると確信することが欠かせない。それゆえ、聖霊によって主イエスが共におられるとの確信が、キリスト者には不可欠である。目に見えない「聖霊なる神」について理解できる年齢はどのくらいからであろうか。たとえ十分に理解できなくても、ていねいに教えて、理解できる日が来ることを祈り求めることが大切であろう。

そして、教会の交わり、教会の友だち、仲間たちがいるのである。その仲間たちは、日ごとに互いのために祈り合っている。その互いに祈り合う交わりを建て上げることを教えたい。自分のために教会の友だちが祈ってくれている。自分の教会の友だちのために祈るのである。たとえ、日ごとの生活で顔を合わせることはできなくても、そのような祈りの仲間がいることが、信仰生活を支える力となり、励ましとなる。子どもの頃から、そのような交わりの恵みを知るならば、それは、信仰の生涯をどれほど確かなものとするであろうか。そのことへと子どもたちを招きたい。

（望月　信）

2月17日　主イエスと共に歩む　説教展開例

テキスト　マタイによる福音書 28章18〜20節
子どもカテキズム　問34

〔単元のねらい〕

単元の主題は、「主イエスと共に歩む」である。一つには、聖霊の宮である教会に集められ、聖霊によって、主イエス・キリストが共にいてくださることを心から喜びたい。もう一つは、キリストに結ばれるとは教会と一つにされる歩みであり、教会においてこそ信仰者として成長させられることを示したい。そうして、教会と一つなる歩みへ招き、また、互いのために祈り合うことへと促したい。

イエスさまに結ばれて歩む

今日も、皆さんと一緒に神さまを礼拝することができて、とても嬉しく思います。神さまは、神さまを信じて生きるわたしたちを強め励ますために、地上に教会を建て上げてくださいました。こうして、教会に集まることができるのは、神さまの恵みなのです。今日は、そのことをお話しして、神さまをほめたたえたいと思います。

先ほど、イエスさまが天に上げられるときにおっしゃった言葉を読みました。イエスさまは、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とおっしゃって、天に上げられました。わたしは、小学生だった頃、これを聞いて、不思議に思いました。皆さんは、どうでしょうか。

何を思ったかというと、十字架につけられて死んだイエスさまが復活して、とこしえの命を勝ち取ったのならば、天に上げられることなどなければよかったのに、と思ったのです。いったいどうして天に上げられたのだろう。どうして、天の御父のみもとに帰られたのだろう。そんなことをしないで、とこしえに生きて、ずっと地上にいてくださったら、わたしもイエスさまにお会いできたのに。そんなふうに思いました。そして、イエスさまの最後の言葉、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」、この言葉も、よく分かりませんでした。天に上げられて、地上からいなくなるのに、いったいどうして、「いつもあなたがたと共にいる」などと約束できるのだろうか。イエスさまは、遠くに行ってしまわれたのではないか。そう思ったのです。

あとになって、分かりました。それを、皆さんにお話しします。

イエスさまは天に上げられました。それは、イエスさまの約束のとおり、わたしたちといつも一緒にいてくださるためでした。イエスさまがどのようにして一緒にいてくださるか。それは、肉体を持つ姿でわたしたちと一緒にいてくださるというのではありません。聖霊によって、わたしたちと一緒にいてくださるのです。

イエスさまは、天に上げられて、神の右に座して、その後、聖霊をお送りくださいました。聖霊とは、聖霊なる神さまです。三位一体の神さまの、父なる神さまと、御子であるイエスさまと、そして、聖霊なる神さまです。その聖霊が来てくださった。それは、ペンテコステですね。集まって、一つになって祈っていた弟子たちに、聖霊が降って、新約の神の民、キリストの教会が生み出されました。その聖霊によって、今、イエスさまが一緒にいてくださるのです。目には見えません。けれども、聖霊によってイエスさまは確かに一緒にいてくださる。神さまは、不思議な仕方で、そのことを確かに成し遂げてくださいました。

そのペンテコステのとき、聖霊が降って、聖霊の宮としての教会が生み出されました。ですから、わたしたちは、教会に集められて礼拝をささげています。この教会に、そして、この礼拝に、イエ

スさまは一緒におられます。

イエスさまは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（マタイ18:20）と約束されました。「二人または三人がわたしの名によって集まる」とは、教会であり、礼拝のことですね。わたしたちは、イエスさまの名によって集められて、一緒に礼拝をささげています。この礼拝の中にイエスさまが一緒にいてくださる。今日は、みんなに、まずそのことを大切に知ってほしいと思います。

天に上げられて、イエスさまは遠いところに行かれたのではありません。わたしたちのところに来てくださっている。あのエルサレムからも、ガリラヤからも、本当に遠いこのわたしたちのところにも、イエスさまは、来てくださっています。

そして、もう一つ、今日、大切なこととして皆さんに知ってほしいことがあります。イエスさまを信じて生きること、神さまの子どもとして生きるとは、イエスさまに結ばれて生きることです。それは、イエスさまがおられる教会で、教会のお友だち、仲間たちと一緒に生きていくことです。ですから、ぜひ教会を大切にしてください。そして、教会の仲間たち、教会のお友だちを大切にしてください。

教会がなぜ大切なのか。それは、教会に、わたしたちが神さまの子どもとして成長していくための方法があるからです。神さまは、わたしたちが神さまの子どもとして生きることができるよう、聖霊の宮である教会を建て上げてくださいました。そして、教会に、神さまの恵みをいただくための方法を与えてくださいました。

それは、教会の礼拝です。神さまは、神さまの恵みをいただくための方法として、「御言葉と礼典と祈り」を与えてくださいました。「恵みの手段」と言われることもあります。「御言葉」というのは、神さまの御言葉、聖書と説教です。礼典は、洗礼と主の晩餐です。水を注がれ、パンを裂いてぶどう酒をいただく。そして、お祈りすることです。それらは、すべて礼拝にあるものです。神さまは、礼拝を、神さまの恵みをいただく大切な方法として、わたしたちに与えてくださいました。わたしたちは、教会の礼拝で、御言葉によって、礼典によって、お祈りによって、神さまからの恵みをたくさんいただくことができます。そして、神さまの子どもとして成長することができます。ですから、教会の礼拝を大切にして、毎週、休むことなく、礼拝をささげましょう。

毎日、食べ物を食べることが必要であるように、わたしたちには、毎週毎週の礼拝が必要なのです。礼拝によって、神さまの子どもとして守られ、成長することができます。

だから、わたしたちの信仰生活は、決して自分だけのことではありません。教会のお友だちと一緒に、神さまの御国を目指して歩むのです。教会のお友だちを大切にして、教会のお友だちのためにお祈りしましょう。互いのために祈りましょう。教会学校の先生や、おとなの人たちが、皆さんのために祈ってくださっています。わたしたちは、祈り、祈られて、互いに支えられているのです。

学校に行くと、イエスさまを信じるお友だちはいないかもしれません。けれども、そういうところでも、皆さんは、決してひとりではありません。イエスさまは、皆さんといつでもどこでも一緒におられます。そして、教会学校の先生やおとなの人たち、皆さんのお父さんお母さんが、皆さんのためにお祈りしてくださっています。そうして、天と地を治めておられるイエスさまが、皆さんを守っていてくださいます。これは、わたしたちの喜びです。何と素晴らしいことでしょう。

皆さんはひとりではない。イエスさまがいつも一緒におられ、また、教会の仲間たちも一緒にいる。そのことを信じて、その喜びをかみしめて、この一週間、神さまをほめたたえて歩みましょう。

（望月　信）

〔今週の暗唱聖句〕　マタイによる福音書 28章20節 後半

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。

2月17日　主イエスと共に歩む　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまがわたしたちと共に歩んでくださる方であることを伝えたい。教会に来て礼拝することは神さま神さまとお会いすること、お祈りすることで教会の友だちとの交わりの恵みを知る。キリストの体なる教会に結び合わされて生きることを喜ぶために。

〈展開例〉

天にのぼられたイエスさまは、わたしたちの目には見えなくなりました。でも、いろいろな方法でわたしたちと一緒にいてくださることが分かります。聖書を読むとき、賛美するとき、お祈りするとき…。そして、イエスさまによって集められた教会で礼拝をささげるとき、そのことがよく分かります。

◇聖書を読む

マタイによる福音書18章20節。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

（手振りをしながら、分級のメンバーを指さしながら朗読する。）

◇賛美する

「祈ってごらん　わかるから」

きみはかみさまにネ　はなしたことあるかい？
こころにあるままを　うちあけてー
てんのかみさまはネ　きみのことなんでも
わかっておられるんだ　何でもねー
だから　そらあおいで　かみさまとひとこと
いのってごらんよ　わかるからー
おがわのほとりでも　ひとごみのなかでも
ひろいせかいの　どこにいてもー
ほんとのかみさまは　いまもいきておられ
おいのりにこたえてくださるー

〈お祈り〉

天の父なるかみさま。教会に来ることができて、ありがとうございます。かみさまのことがよく分かるように、教会で恵みをいただくことができますように。かみさまにお祈りをして、イエスさまと一緒に生きていくことができますように。イエスさまのお名前をとおして、お祈りします。アーメン。

（子どもたちと心を合わせて、同じ姿勢になるように。「アーメン」を一緒に言えるように練習する。）

2月17日　主イエスと共に歩む　小学科下級

〈主旨〉

神は、キリストを頭とした教会を通して、いつも共におられることを約束してくださる。

〈展開例〉

○みんなが来ているこの教会は、みんなにとってどういう場所かな？（楽しい・つまらない、礼拝するところ、友達・いろいろな人がいるところ……）

○もしこの教会に誰もいなくなって、一人ぼっちになったらどうかな？（寂しい、つまらない……）

そうだね。もし一人ぼっちになったら、もうそれは教会って言わないんだ。教会はこの建物のことじゃないからね。この建物は教会堂。教会はみんなで聖書を開いて、イエス様のもとに集まるところなんだ。だから例えば外でみんなで集まって、ちゃんと礼拝をする場所だったらそこが教会になるんだよ。

神様はこうやって、私たちが一人ぼっちにならないように教会という神様の家族を与えてくださったんだ。イエス様が天に昇られた後、聖霊なる神様が降ってこの教会を造ってくださったんだよ。それは、今日の御言葉の通りイエス様が世の終わりまでいつもみんなと共におられるため。目には見えないけど、イエス様は天でみんなの場所を用意しているんだ。そのイエス様と私たちを離さないで、結びつけて降っているのが聖霊なる神様なんだ。だからイエス様はいつも一緒なんだよ。そしてさらにその聖霊なる神様は、目に見えるこの教会、ここに集まっている私たちを呼び集めてくださったんだ。

だから、みんなはどこまでも一人ぼっちになることはないんだよ。普段の学校で教会に言っている友達がいない時でも神様は共におられるからね。大丈夫。そしてまたこの主の日の日曜日にみんなと一緒に集まって神様を礼拝して、たくさんの愛をもらうんだ。

教会は、頭がイエス様でみんなはそれぞれの部分ってよく言われるんだよ。それぞれの体の部分は繋がっているよね。血が流れているよね。骨もちゃんとくっついているよね。そしてどこか痛かったら体全体に伝わるよね。一番痛がるのは、イエス様。それほどに私たちは繋がっているんだよ。だからお互いのために神様に守られて、共に神様のために歩めるようにお祈りしよう。

〈祈り〉

（手をつないで祈ってもいいかもしれない）

神様。こうしてイエス様が天に昇られた後も、聖霊なる神様を与え、教会を造ってくださってありがとうございます。私たちはイエス様にあってみんな繋がっています。一人ぼっちではありません。ありがとうございます。イエス様とみんなと共にこれからも神様のために歩んでいくことができますようにお守りください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

2月17日　主イエスと共に歩む　小学科上級

〈あるクリスチャンの詩〉

ある夜、わたしは夢を見た。
わたしは、主と共に、なぎさを歩いていた。
暗い夜空に、これまでの私の人生が映し出された。
どの光景にも、砂の上に二人分の足跡が残されていた。
一つは私の足跡、もう一つは主の足跡であった。
これまでの人生の最後の光景が映し出された時、
わたしは、砂の上の足跡に目を留めた。
そこには一つの足跡しかなかった。
わたしが人生で一番つらく、悲しい時だった。
このことがいつもわたしの心を乱していたので、
私はその悩みについて主にお尋ねした。
「主よ。わたしがあなたに従うと決心した時、あなたは、全ての道で、わたしと共に歩み、わたしと語り合ってくださると約束されました。
それなのに、わたしの人生の一番つらい時、一人分の足跡しかなかったのは何故ですか。
一番あなたを必要としていた時に、あなたが、何故、わたしを捨てられたのか、わたしには分かりません。」
主はささやかれた。
「わたしの大切な子よ。
わたしは、あなたを愛している。
あなたを決して捨てたりはしない。
ましてや、苦しみや試みの時に、足跡が一つだったのは、わたしがあなたを背負っていたからだ。」
（「足跡」、マーガレット・パワーズ）

〈子どもと一緒に考えるポイント〉

①イエス様は間違いなく、私たちと共にいる。
②イエス様が共にいてくださることがただ一つのなぐさめであり、本当の喜び。

〈展開例〉

○いつもあなたと共にいます

今日の聖書箇所であるマタイによる福音書28章20節には、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」とある。これはイエス様が天に昇られる前に残された最後の言葉。そしてこの言葉が2000年以上もの間、クリスチャンたちの希望となり、支えとなってきた。

Q1　あなたはイエス様が今も共にいるということが信じられますか？
Q2　信じられる（信じられない）理由は何でしょうか？
Q3　イエス様は今あなたをどのように助けてくださっているでしょうか？
Q4　イエス様が共にいてくださるとしたら、あなたは嬉しいですか？力がでますか？

○前出の詩から考える

私たちに限らず、人とは目で見えるものをついつい信用したり、大切に思いすぎてしまうところがある。逆に、目で見えないものは信じられないとか、軽く見てしまうところがある。でも、目で見えないものは存在しないものなのかといえば、聖書はそうではないとはっきりと教えている。

私たちの信じるイエス様とは、新約聖書の時代のように本人に今出会うことはできない。けれども、その代わりに今は三位一体である聖霊が与えられて、私たちはイエス様に出会い、守られている。聖霊はどこで与えられるのか、それは日曜日の礼拝であり、日々の御言葉、祈りから、それから、教会の牧師先生や大人たち、友達との交わりの中で与えられている。

それでも、私たちは弱い罪人だから、孤独を感じたり、泣きたくなることもある。それをイエス様は嫌がれるだろうか？　いや、イエス様はこう語るだろう、「わたしはあなたを愛している、今もあなたと共にいて、あなたを背負っている。」

イエス様は今この瞬間も私たちをその背中に背負い歩いてくださっている。それはゴルゴダの丘へと十字架を背負い歩かれたときと何一つ変わっていないイエス様の御業、救い、事実である。みんながそれを心から喜び、ただ一つのなぐさめだと受け入れられることを祈り願いたい。

2月17日　主イエスと共に歩む　中学科

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「皆さんはひとりではない。
イエスさまがいつも一緒におられる。
教会の仲間たちも一緒にいる。
そのことを信じて、その喜びをかみしめて、この一週間、神さまをほめたたえて歩みましょう。」
(説教展開例より)

イエス様は、私のことを世界一愛してくださるけど、私だけを愛しておられるのではない。私の友だちのことも、世界一愛しておられる。「教会」は、イエス様に世界一愛された人たちの集まり。

イエス様を信じて、イエス様に結ばれるというのは、イエス様とふたりっきりになることじゃない。イエス様につながる教会の仲間につながること。

私たちはイエス様を信じて従う以上、必ず信仰の戦いが用意されている。サタンは、あなたの信仰を萎えさせて絶望させようと、あらゆる手を使って攻撃してくる。試験がうまくいかない、イジメを受ける……不景気は続いて人の心が荒れる、戦争が起こる、大災害が起こる、日本はぐちゃぐちゃになる……これから先は、どんなことがあってもおかしくない。そういう試練の中で、ぼくらは戦わねばならない。救いを兜としてかぶり、御言葉の剣を手にして戦わねばならない。

でもそんな戦いの中で、ぼくらは神様を信じるのに疲れ果て、心を失っていってしまうことがある。希望を見失ってしまうことがある。

だけど、思い出してほしい。

「皆さんはひとりではない。
イエスさまがいつも一緒におられる。
教会の仲間たちも一緒にいる。」

自分に与えられている信仰の戦いは、自分だけで抱え込んで戦っていてはいけない。祈ってもらって、共に戦ってもらわなければ、とても勝ち目のないような厳しいものです。

ぼくらは孤独ではないのです。聖霊によってイエス様に結ばれている。そして一つの聖霊によって結ばれた兄弟姉妹がいる。この兄弟姉妹と祈りながら共に戦う時に、聖霊の支えの力は最大限に発揮されるのです。信仰の戦いとは、一人ではなく、共に戦うものなのです。

みなさんは、みなさんの知らないところで、みなさんのためにどれほど多くのとりなしの祈りがなされているかを知らないでしょう。

みなさんの両親が祈っています。教会の長老たちが祈っています。おじいさんやおばあさんが祈っています。もちろん牧師が祈っています。他の教会の仲間たちが祈ってくれています。外国の仲間たちが祈ってくれています。

聖霊は、言葉に表せないうめきをもってとりなしていてくださいます(ローマ8:26)。そして神の右の座に座しておられる主イエスが、信仰がなくならないようにと祈ってくれています(ローマ8:34)。

あなたも祈りなさい。自分の信仰の戦いのために、仲間の信仰の戦いのために祈りなさい。そのときあなたも、時空を超えた、祈りの交わりの中に入ることができます。その祈りにおいて、「イエス様はいつも一緒におられる。教会の仲間たちも一緒にいる」と、悟ることができるはずです。

2月24日　再臨の約束　教理説教のための聖書黙想

テキスト　使徒言行録 1章6〜11節
子どもカテキズム　問35
参照教理問答　ハイデルベルク教理問答 問52
ウェストミンスター大教理問答 問56
ウェストミンスター小教理問答 問28

問35　どこを目指して歩むのですか。
答　イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

この箇所は、十字架の贖いを成し遂げられ、復活された主イエスが、天に戻っていかれる場面です。ここから主に二点を考えたいと思います。一つは、主と離れていくことになる弟子たちの思いです。彼らは、この方こそ「イスラエルを解放してくださる」方であるという望みを抱いて（ルカ24章21節）、命を賭けて従って来たわけです。しかしその主が十字架による処刑という凄惨な非業の死を遂げてしまうことで、一時は生きる希望さえなくします。しかしその彼らは、復活の主と出会うことで、もう一度生きる希望を与えられて、心を立ち上げられました。そしていよいよこれからという思いで、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と、息せき込む思いで主に尋ねたのです。彼らの心はいやが上にも高鳴ったのではないでしょうか。ところがそれに対する主の答えは意外でした。今はその時ではないと言われるのです。

しかもそれだけではなく、やっと再び主と共にいることができるようになったと思ったのもつかの間、主は天へとお帰りになられるというのです。その時の弟子たちの思いを察してください。彼らはどれほど落胆し、また寂しく感じたことでしょうか。そしてそれ以上に、どれほど心細く、また心もとなく思ったことでしょうか。これまでは、とにもかくにも主が共にいてくださったのです。困った時も、どうしたらよいか分からない時も、いつも主がそばにいて、教え導いてくださいました。しかしこれからは自分たちだけでやっていかなければならないのです。寂しい以上に、これからどうしていったらよいのか、途方に暮れる思いだったのではないでしょうか。その彼らの思いに対する答えが、主の再臨の約束でした。

もう一つは主が再び来られることの約束です。御使いは、「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と約束しました。主が再びおいでになる、再臨の約束ですが、それは彼らがそこで見たのと「同じ有様」でと言われます。それはどのような有様だったのでしょうか。使徒言行録はルカによる福音書の続編、第二巻ですが、第一巻のルカ福音書の最後にも、主イエスの昇天の様子が記されています。「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた」（24章50、51節）。つまりそこで弟子たちが見た、主イエスの昇天の有様とは、主が彼らを「手を上げて祝福」したものであり、そうして「祝福しながら」というものでした。手を上げて祝福するとは、祭司がイスラエルの民を祝福した姿で（レビ9章22節）、そこでは「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けてあなたに平安を賜るように」という祝福が為されました（民数6章24〜26節）。

つまり主イエスが手を上げて祝福しながら、弟子たちの許から天へと戻られたとは、まるで祭司が神の祝福を祈るようにして民を祝福するよう

に、主が弟子たちを祝福してくださっているということです。まことの大祭司である主イエスの(ヘブライ5章10節、7章21、24節)、その手が民を覆い包むように、神の祝福が彼らを覆い包んでいることを示すものでした。この「神の家を支配する偉大な祭司」(同10章21節)が、「常に生きていて、人々のために執り成しをしておられる」のです(同7章25節)。「復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです」(ローマ8章34節)。その主の執り成しの祈りの中に、今日も守られているのです。そしてその主が再び来られる時、その祝福の祈り、執り成しの祈りの中で、祝福の手を上げながら、わたしたちのもとにおいでくださることが約束されているのです。主の再臨を考えるとき、そのことを覚えることが大切です。

たしかに主の再臨は「終わりの日に世をさばくため」のものです(小教理28)。そこで主は「敵をことごとく永遠の刑罰に投げ込まれ」ます(ハイデルベルク52)。しかしそれは、主を信じるわたしたちにとって恐怖の時でも、破滅の時でもありません。むしろわたしたちにとっては、それは「解放の時」なのです(ルカ21章28節)。わたしたちに押し迫る問題や困難、悲しみや苦しみが終わる時であり、わたしたちを苦しめる様々な事柄が裁かれて、わたしたちから呪いが取り去られる時となるのです。だから主の再臨は、わたしたちにとって「慰め」となります。なぜならそれは、主が「わたしを、すべての選ばれた者たちと共にその御許へ、すなわち天の喜びと栄光の中へと迎え入れてくださる」時だからです(ハイデルベルク52)。そこでわたしたちは、「わたしがあらゆる悲しみや迫害の中でも頭を上げて、かつてわたしのために神の裁きに自らを差し出し、すべての呪いをわたしから取り去ってくださった、まさにその裁き主が天から来られることを待ち望む」ことになるのです(同)。ですからわたしたちには突然の「破滅」が襲うことはありません。

そこで主の再臨について語ったパウロも、「ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい」と語りました(テサロニケ一4章18節)。なぜなら、「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることになるからです(同17節、5章10節)。主は、弟子たちの許を去って天へと戻られるとき、はっきりと約束してくださいました。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と(マタイ28章20節)。再臨は、まさにその「主と共にいる」ということが、永遠にまた完全に成し遂げられ、実現する時となります。だからわたしたちは、代々の聖徒たちと共に、「アーメン、主イエスよ、来てください」と祈りながら(黙示録22章20節)、主の再臨を待ち続けるのです。そしてこの主の再臨の約束に対して、わたしたちは「マラナ・タ(主よ、来てください)」と応えていくのです(コリントー16章22節)。

〈カテキズムの解説と子どもたちに対して〉

カテキズム問35では、主が再び来られる再臨の約束と、だから「天の国を目指して、歌いつつ歩みます」という、わたしたちの待ち臨む姿勢、備え方が語られており、それが二回に分けて説かれるようになっています。ここでは「再臨の約束」を考えます。子どもたちにとっては、まず「再臨」という言葉自体、なじみのないものですから、それは「イエスさまが再び地上に来られる」日のことであることを教えてあげてください。そしてまた、それは一般に考えられている破局や破滅の時ではないことを、子どもたちの心に刻みつけてあげてほしいと思います。世の裁き主として来られる主は、主と結ばれているわたしたちにとっては、どこまでも救い主であり、主の再臨はわたしたちにとって「慰め」であることを強調していただきたいのです。カテキズムの文脈で言えば、ここは「聖化の歩み」の、その完成として位置づけられています。ですから、その途上にあるわたしたちにとってそれは、「天の国を目指して、歌いつつ歩」む道筋であり、それはまさに「歌いつつ歩まん、ハレルヤ、ハレルヤ」という歩みであるわけです(聖歌498番)。子どもたちに伝えてほしいことは、まさにそのことで、主の再臨こそが、苦しみの中で生きるわたしたちの唯一の希望、慰め、喜びであるということなのです。　(三川栄二)

2月24日　再臨の約束　説教展開例

テキスト　使徒言行録 1章6〜11節
子どもカテキズム　問35

〔単元のねらい〕

「イエスさまが再び地上に来られる」日である、再臨について話す単元です。しかしそれは、一般に考えられているような「破局」や「破滅」の時ではないということ、だから、それは恐ろしい日ではなく、主にあるわたしたちにとっては慰めの時であり、希望の時であることを、子どもたちの心に刻みつけてください。世の裁き主として来られる主は、主と結ばれているわたしたちにとっては、どこまでも救い主であり、主の再臨はわたしたちにとって「慰め」であることを強調していただきたいと思います。

アーメン、主イエスよ、来てください

去年2012年には、12月21〜23日でこの世が終わるということが話題になりましたが、皆さんはご存知でしたか。メキシコのユカタン半島に昔栄えたマヤ文明というものがあって、そのような予言があることが話題になりました。実は、ずっと前にも、ノストラダムスという人の予言がまことしやかに語られて、ブームになったことがありました。こうした世の終わりの予言では、火山の爆発とか大地震や大津波、様々な天変地異による地球の破壊が語られます。世の終わりとは、人類の破滅や地球の破局として考えられていきます。聖書でも、世の終わりが来ることが預言されていて、イエスさまも言われました。戦争や暴動が起こることが語られた後、「大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる」と（ルカ21章11節）。また「太陽と月と星に徴が現れる。地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである」とも（同25、26節）。

世の人々は、「世の終わり」と聞くと、とても恐ろしいことが起こり、わたしたちが皆滅びてしまうことだと考えます。だから聖書から正しく「世の終わり」のことを考えなければなりません。ここでイエスさまは、こうした「世の終わり」の時に、ご自分が再びおいでになることを予告されました。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る」と（27節）。先ほど読んだ使徒言行録でも、イエスさまはご自分が再びおいでになる約束をされました。それを再臨と言いますが、このイエスさまの再臨は、わたしたちにとっては決して恐ろしい時ではないと、約束されています。「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからである」と（28節）。そうです。「世の終わり」とは、わたしたちにとっては「解放の時」、つまり救いの時なのです。そのことをしっかり覚えてほしいと思います。

お弟子さんたちは、これからイエスさまが天にお帰りになるという時、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と、息せき込む思いで尋ねました（使徒1章6節）。お弟子さんたちは、これからもずっとイエスさまが一緒にいてくれると思っていたのです。これまでも、つらいことや困ったことがありました。けれどもそういう時、いつでもイエスさまは共にいて、助けてくださいました。だからお弟子さんたちにとっては、イエスさまが一緒にいてくれさえしたら、大丈夫だと思っていました。けれどもそのイエスさまが、これからいなくなってしまうのです。どんなに寂しく、また悲しく思ったことでしょうか。こうしてイエスさまがいなくなってしまうことでがっかりし、悲しむお弟子さんたちに、

イエスさまは約束されました。また来ると。そうしてイエスさまは、父なる神さまのおられる天へと戻っていかれました。雲とは、大空の上にある雲のことではなくて、神さまの栄光を象徴するもので、それはイエスさまが大空のはるか上に昇っていったということではなくて、神さまのおられる天へと昇って行かれたことを意味しました。そうして天へと帰られるイエスさまの様子を、ぽかんと口を開けながら見上げていたお弟子さんたちに、そこにいた天使が言いました。イエスさまは、ちょうど今見たのと同じ様子で、また来ますよと。

イエスさまって、どんな風にして天へと戻られたと思う？ルカ24章50、51節にはこう書いてあります。「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた」。イエスさまは、手を上げて祝福しながら、天に戻って行かれました。ちょうどこんな感じです(と言って、両手を上に大きく広げて見せる)。こんな風に両手を上げて、お弟子たちを覆い包んでくださるように、祝福を祈りながら、天へと帰っていかれたんですって。そして今度は、それと同じようにして、つまりわたしたち一人ひとりを、覆い包んで守り、祝福するようにして、わたしたちの所に来てくださるんです。それが再臨なんだね。それまでイエスさまは、天で何をしておられるのでしょう。ローマ8章34節を開いてください。「復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです」。そうです。天でイエスさまは、わたしたち一人ひとりを覚えて、祈ってくださっているのです。弱いわたしたちのために、イエスさまが祈って守ってくださり、祈りで支えてくださっているのです。そして今度来るときには、その祝福の祈りの姿で、また来てくださるんだね。

だからわたしたちは、再臨を恐がる必要はありません。たしかにイエスさまは、この世を裁くために来られますし、イエスさまが来られた時が「世の終わり」です。けれどもイエスさまを信じるわたしたちには、それは終わりの時ではなくて、完成の時なのです。そしてイエスさまは、わたしたちを天国に迎え入れるために、わざわざ天から来てくださるのです。だからわたしたちにとって再臨は、救いが完成する時です。そうして天国へと入れてもらえるからなのですね。みんなは学校でもお家でも、悲しいことや苦しいことがあるでしょう。お友だちにいじめられてつらいときや、お父さんやお母さんから叱られて、悲しいときがあるでしょう。大きな失敗をして恥ずかしかったり、何度やめようと思っても、また犯してしまう罪や弱さもあります。けれども、イエスさまがおいでになったら、そうしたことのすべてから解放されるのです。さっきイエスさまは約束してくださったよね。「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからである」って。

マタイ福音書には、このときイエスさまが約束された別の言葉が記されています。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」と(マタイ28章20節)。これはお弟子さんたちとの地上でのお別れの時に言われた言葉です。天におられるイエスさまは、目には見えないけれど聖霊によってわたしたちと共にいてくださいます。けれども再臨したら、今度は本当にずっと一緒にいることができるようになるのです。イエスさまがまたおいでになるのは、「このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることにな」るためでした(1テサロニケ4章17節)。だからどんなにつらい時も、苦しい時も、悲しい時も必ずイエスさまが来てくださり、それからはいつまでもずっとイエスさまと一緒にいることができるようになる、そのことを信じてイエスさまがおいでくださるのを待ち続けていきましょう。(三川栄二)

〔今週の暗唱聖句〕　使徒言行録 1章11節後半

あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、
天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。

2月24日　再臨の約束　幼稚科

〈ねらい〉

イエスさまが再びこの世界にいらっしゃる再臨の約束を伝え、天国を目指して歌いながらみんなと一緒に喜んで歩んでいくことを教える（問35）。

〈展開例〉

1. 丸くなってみんなで歌いましょう。

♪「よろこび　ひろげよう
　ちいさな　ぼくたちだけど
　イエスさまは　どんなときでも
　あいして　まもってくださる」♪
　（『プレイズワールド』26番、
　　いのちのことば社）

2. 最初のお祈り（分級担任教師・短く）

3. みんな「早く～」って待っていることある？

何かな？ お約束して待つのは楽しみ！

「暗い夜……コワイ　コワイ早く朝が来てほしい～？」

「なかよしの（　　）とあそぶこと？」

「クリスマスやお誕生日のワクワクプレゼントかな？」

「お手伝いをしたご褒美のおいしいアイスクリーム？」

「遊園地にあそびに行く日？」

「毎週日曜日の教会学校？ だったら先生嬉しいけれど……」

4. 今日はイエスさまがもう一度いらっしゃることのお話を聴きましたね。

今日もみんなでイエスさまを待っていましょう。コリントー16章22節の「マラナ・タ（主よ、来てください）」と、賛美しながら待ちましょう。

5. 最初に歌ったお歌の替え歌をします。

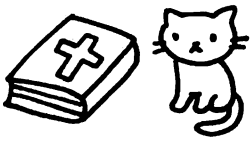
「マラナ・タさんび」です。

「（ま）ちましょう　イエスさま
（ラ）ンランラン　みんなで
（な）かよく　いっしょに
（た）のしく　待ちましょう」♪

6. 終わりのお祈り

教師がリードして一緒に子どもと祈る（日々の祈りの生活の訓練）。

☆準備ができれば、黄色の模造紙などで「救いのかぶと」（テサロニケー5章8節）を作り、かぶって賛美する。
（救いのかぶとは分級のおみやげ）



2月24日　再臨の約束　小学科下級

〈主旨〉

主イエス・キリストは、私たちをご自身と永遠に共におらせるために再臨してくださる。

〈展開例〉

○今日の箇所でイエス様は、弟子たちの前で何に覆われたんだっけ？（雲：神の栄光・臨在の象徴）

○その後、イエス様はどこへ行かれたのかな？（天：私たちもやがて行く約束の場所）

そうだね。イエス様は天に昇ってみんながやがて行く場所（家・部屋？）を整えてくださっているんだよ（ヨハネ14：3参照）。でもそれだけじゃないよね。そこでいつもみんなのためにお祈りもしてくださっているんだったね。

○それでは、もうイエス様は天に帰ったままなのかな？（違う。また来られる。）

このまたイエス様が来られることを再臨と言うんだったね。

○どうしてもう一回来られるんだろう？（審かれるため。また、イエス様を信じている者にとっては、完全な救いを与えるため。聖書の論理に従って、特に後者を強調したい。つまり、説教展開例にもあるように、「すべてからの解放」、「永遠にイエス・キリスト共にいる幸い」など。またこのイエス・キリストの約束は決して破られるものではなく、必ず成就してくださることも強調したい。）

そうだね。みんなを迎えに来てくれるためだね。私たちには想像もできない楽しさ（喜び）が待っていると思うとわくわくしない？ 遠足や遊園地に大好きな友達や家族と一緒に行く約束以上の楽しみだからね！

だから私たちは下を向いて毎日を過ごさなくていいんだよ。もちろんそういうつらい時は、これから先あると思うけど、そんな時こそ思い出してほしいんだ。イエス様が天からやがて来られるその約束をね！ みんなで上を向いて毎日過ごせるようにこれからも一緒にお祈りしていこうね！

〈祈り〉

天のお父様。イエス様。いつも天から見守ってくださっていてありがとうございます。そしてまた私たちを迎えに来てくださることを感謝いたします。どうかそのイエス様の約束を信じることができますように。そしてみんなと一緒に上を向いて、楽しみつつ待つことができますようにお守りください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

〈子どもカテキズム〉

問35　どこを目指して歩むのですか。

答　イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

〈子どもと一緒に考えるポイント〉

①イエス様が再び来られるとき、それは恐ろしいことではない。

②イエス様が再び来られるとき、それは私たちの希望、喜び。

〈展開例〉

○終わりのとき

一般的に考えられているこの世の終わりとは恐怖ばかりで、喜びなど微塵も感じさせない。子どもたちにはそのような一般的な考えにとらわれるのでなく、聖書に基づいたキリスト者的終末観を共有したい。

Q1　あなたは、いつかはこの世（地球・地上）の終わりがくると思いますか？

Q2　この世が終わるとき、あなたはどこで何をしていたいですか？

Q3　この世の終わりと聞くと、あなたはどのようなこと（風景や状況など）を想像しますか？

Q4　聖書はこの世の終わりについて、どのように語っているでしょうか？

○キリスト者的終末観

この世が終わると聞くと、なぜ多くの人はネガティブ（後ろ向き）な発想になってしまうのか。いくつか考えられる理由の一つに、今持っているものへの執着というものがあると思う。

イエス様は、マルコによる福音書10章23節で、「財産のある者が神の国に入るのは、なんと難しいことか」と語っている（マタイ19章、ルカ18章でも同様。）ここで言う財産とは金銭のことだけでなく、地位や名誉、さらには友人や家族、この世で自分の得る全ての物のことだということが、あとのイエス様の説明からも検討がつく。

そう、私たち人間は自分が得たものを捨てるということは非常に難しいのである。同様に、得たものを失う恐怖というものを持っているため、この世の終わりもネガティブに捉えてしまう。

もう一つの理由は、イエス様の昇天以降、人々の中で勝手な終末のイメージが浸透してしまったということだろう。悪意のある新興宗教の中には、ハルマゲドン（終末の戦い）だけを強調して、恐怖によって人々を支配し、その宗教を信じさせようとしているものがある。また、神様の御言葉である聖書自体からそのような終末の予兆（マタイ24章、ルカ21章、黙示録等）だけを取り出し、それだけを人々に語り聞かせるような者もいる。もちろんこれは絶対に許されないことであるし、神様が望まれていることではない。

○終末の希望

私たちは、この世の価値観や間違ったイメージにとらわれるのでなく、また、断片的に聖書を捉えるのでなく、聖書が語る神様の真意を知らなくてはいけない。

今日の聖書箇所には「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる（使徒言行録1章11節）」とある。これは終わりの時に起こる様々な状況、戦争や暴動、天変地異など、それらがただ起きて、それだけでこの世が終わるということでなく、それらは予兆であって必ず再びイエス様が来るということである。イエス様は間違いなく、何があろうと再び来てくれる。なぜなら、それは聖書においてイエス様ご自身が私たちに約束してくださったことだから。

旧約の時代、イスラエルの民を解放するために神様は救い主を送ると約束してくれた。そして、それは新約の時代に、御子であるイエス様を与えられ果たされた。そして今は、同じ神様が私たちを罪から解放するために、再び御子であるイエス様を送ると約束してくださっている。これが聖書の語る終わりのときの希望、私たちの希望であり喜びである。

2月24日　再臨の約束　中学科

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

○終わりの日の再臨

世の終わりに、イエス様は栄光の裁き主として再び世に来られ、生きている者も死んだ者も、すべての人をふるいわけ、神の国を完成されます。この時私たちはイエス様からよしとされ、すべての涙をぬぐわれます。死も罪もなく、悲しみも痛みもない世界が到来します。

その時、この世界全体が神の国となり、復活した私たちはその国民となって、キリストと共に喜びの命を謳歌します。ここにこそ、私たちの救いの完成があるのです。(自分が死んで天国に入ればゴールではありません。広い世界全体を、また遥かな永遠を見通す信仰の視野が必要です。)

○栄光ある者への復活

再臨の時、私たちは栄光あるものによみがえらされます。それは、どれほどの祝福か想像もできません。一切の罪の影響から解放された、悲しみも痛みもない、質的にまったく新しい輝かしい体に、私たちは変えられるとの聖書の約束を信じ、期待して待ち望みましょう。キリストを信じる者は、初穂であるキリストと同じように復活し、キリストの栄光の体に似せられるのです。

「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。」(Ⅰコリント15:42,43)

○公的な無罪宣言

私たちはすでにキリストの救いによって罪赦され、義とされ、神の子とされていますが、「審判の日」についに公的に完成されます。地上においてはなお聖化の途上ですので、信仰が揺さぶられ、平安を失うこともあります。しかし再臨の時＝復活の時には、完全な確信と慰めに到達するのです。

○「永遠に、全く神を喜ぶことにおいて、完全に祝福された状態にされる。」

神の国の喜びの中心は物質的なものではなく、神との(また隣人との)、完全な交わり(愛の完成)の喜びです。

「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」(コリント一13:12)

私たちには、こういう再臨の希望が約束されている。こういう希望は、現実味がなくってピンとこない。そんなことよりも、今、ぼくの生活をなんとかしてほしいと訴えたくなる人もいるかもしれない。

でも、そんなちっちゃい心に閉じこもってないで、永遠を見つめよう。ぼくらに与えられているとんでもなくでかい希望を見つめよう。今の生活がどうしたって？　それを変えるためにも、まず君が、揺るぎない希望に生きなさい。

3月3日　再臨に備える　教理説教のための聖書黙想

テキスト　テトスへの手紙 2章11〜15節
子どもカテキズム　問35

問35　どこを目指して歩むのですか。
答　イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

(1) 地上を旅する神の民には、つねに心して目指すべき、また喜びをもって目指すことのできる「目標」がある。それが、主イエス・キリストの再臨、神の国の完成であることは言うまでもない。この目標を、しっかりと目指すよう、キリスト者と教会は、たえず招かれ励ましを受けている。

キリスト者の地上の生が、そのような明瞭で明るい方向指示を受けていることは、なんという幸いだろうか。こうした明るさと、生きるべき方向の確かさは、世に生きるキリスト者と教会に、生きる喜びをもたらすとともに、キリスト教倫理の確かな基礎を与えるものである。

(2) キリスト者の生が、倫理的な本質をもつのは、その生が、福音の恵みによって約束され、支えられ、光を投じられているからに他ならない。テトスへの手紙2章11節以下は、福音の恵みに基礎づけられたキリスト者の生の、真剣さ、誠実さ、明るさを強く印象づけている。「実に、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました」(11節)。いうまでもなく、これは「万人救済」の意味にとられるべきではない。キリストの恵みの圧倒的な力、すべての人々を救いに招く力、恵みのまったき勝利を告げる宣言なのである。

言い換えれば、福音の恵みは、キリスト者と教会に対して、穏やかで説得力に満ちた「教育」を内包している。福音は、新しい生への招きであるだけでなく、新しい生を健やかに賢明に営むために、必要な約束と方向性をもたらしている。さらに言い換えれば、福音にもとづく生の「倫理性」と「教育性」は、「義認」にはじまり「聖化」に向かう救いの確かさ、という霊的な文脈のなかに置かれているのである。

(3) 2章11節〜15節のこの段落は、キリストにおける恵みの出現と、キリストの栄光の現れとしての再臨、という救いの文脈のなかに、キリスト者と教会の生の全てを包み込んでいる。受肉と贖罪において完成した、キリストの第一の到来。そして「偉大なる神」その方であるイエス・キリストの栄光の完全な現れとしての第二の到来。これら二つの時の間で、キリスト者の生は、いのちと光に満ちた歩みを約束されている。

もちろん、「この世で、思慮深く、正しく、信心深く生活する」ことが、たやすい目標になったというのではない。この書簡が強調するのは、「教える」ことへの教会的な決意である。「この世」で生きる〈今〉は、不信心や現世の欲望という誘惑との戦いである。神の恵みは、そのような実際的な〈無神性〉からの救いと解放をもたらすが、教育と訓練なしにではない。

テトスへの手紙は、その主要な部分で頻繁に〈命令形〉で記されている。その命令は、福音によって獲得された自由と解放の、圧倒的な力に基づいている。重要なことは、キリスト者と教会が、さらにはそれぞれの家庭が、恵みによる教育力を信頼し、〈命令形〉による真剣な教育を回復することではないだろうか。再臨と神の国の完成への希望に支えられた教育は、命令が同時に約束であり、服従が同時に祝福を伴っているからである。

(小野静雄)

3月3日　再臨に備える　説教展開例

テキスト　テトスの手紙 2章11〜15節
子どもカテキズム　問35

〔単元のねらい〕

キリスト者と教会の歩みは、クリスマスに示された第一のアドヴェントから、再臨によって実現する第二のアドヴェントに向かう歩みである。私たちは、主イエス・キリストによる、圧倒的な「恵み」の出現から、救い主イエス・キリストの「栄光」の完全な現れに至る途上に立っている。このように、恵みの開始から栄光の完成への〈間〉を生きることが、どれほど恵みと祝福に満ちた歩みであるかを、一同で感謝し、共有し、そして明るい光に照らされた生、生の光あふれる地上の人生を、喜びを抱いて生き抜く。そうした決意と献身へと、自らを、そして子供たち若者たちを、押し出すような、希望の言葉を見出していきたい。

主イエスが来てくださるから

いま私たちが過ごしている季節は、春を待つ喜びの季節です。そして、今月の終わり、3月31日の日曜日は、主イエス・キリストの復活を祝う「イースター」です。クリスマスに始まって、主イエスの十字架の苦しみを心に刻む季節を過ごし、そして主イエスが罪と死に完全に打ち勝ってくださった復活の恵みを祝う。そのような日々を、毎年、毎年、ともに祝うことができることは、なんという幸いな一年でしょう。

今朝の礼拝で、心に刻みたいことは、毎年くりかえされる教会の暦には、まだ記されていない、もう一つの恵みです。それは、復活された主イエス・キリストが、再び来られる〈再臨〉の希望です。クリスマスに世に来てくださった主イエスは、今は天の父である神様とともに、世界と万物を治めておられます。神様が、独り子イエス・キリストを世に送られた目的は、世界と万物を、神様の計画どおり導き、きよめ、完成することです。世界も万物も、まだ完成してはおらず、祈りながら、うめきながら、完成のときを待っている。それが、私たちの世界です。

わたしは、子どもの頃、とても泣き虫で、よく学校では泣かされました。まだ小学校の低学年の頃は、家に帰ってだれもいないと、それだけでひどく泣いたそうです。わたしの家庭は、両親が農業をしていましたから、昼間はほとんど夫婦で一緒に畑や田んぼにいたわけです。しかし、わたしが学校を終えて家に帰るころになると、だれそれが帰る頃だから、といって母が時間を見計らい、家でわたしの帰りを待っていてくれました。忙しい農作業の合間に、もちろん歩いて家に戻っては子を迎え、そしてまた畑に戻って行ったのです。それほどにしてでも、子供に淋しい思いをさせたくなかったのです。今、思い返しても、ことばにできないほど有り難い母の愛情です。

主イエス・キリストが、世界と万物に完成のときを与えるために、再び来てくださる。その恵みは、わたしの記憶のなかの母とは、もちろん比較になりません。世界とそこに生きるものへの主イエスの愛、何よりも地上の生活で苦しみ、悩み、試練に耐えて歩んだ、キリスト者と教会への驚くべき同情、共感、配慮、そして愛。しかし、共通しているのは、不安な思いで懸命に歩む、愛する子への献身的で、犠牲をともなう愛です。

主イエスの再臨は、私たちを待っている最高の栄誉です。この世にも、いろいろな栄誉があり、誉れを受けることは、誰にとっても喜びです。けれど、キリストが、私たちのために備えておられ

る栄誉は、そうしたものとは比べ物になりません。キリストが、再臨を通して与えてくださる恵みは、私たちの信仰と救いの完成です。朽ちることのない霊の体をいただき、永遠に神とともに歩み、神を賛美する恵みです。そのような完成に向かって、いま私たちは、地上での日々を歩んでいます。「天の国を目指して、歌いつつ歩みます」と、『子どもカテキズム』問35で告白しているとおりです。

「すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました」(テトス2章11節)。イエス・キリストの恵みは、その広さ、深さ、高さの点で、「すべての人々」に届けられます。やがて、主イエスは来られて、私たちの味わったいろいろな苦しみや悩みを、喜びの冠に変えてくださいます。

その恵みと栄誉を待っている私たち。その私たちが、どのように今の生活を、神さまに献げることが大切か、きっと誰にもよく分かるはずです。光の子供として生きてゆくよう、主イエスは私たちに求めておられます。自分に与えられた救いを軽んじることのないよう、一層、こころを高くあげて神さまに向かって歩むよう、願っておられます。神さまを知らないまま生きることの辛さ、悲しみを、私たちは知っているのです。ですから、主イエスの救いが、私たちのそばにいる人々、友だちや家族の中で、もっと強い輝きをもつよう、祈っていきましょう。

私たちが生きている「この世」(2章12節)。そこは、いろいろな暴力や不正が、幅を利かせている世界です。富んでいる人々と、貧しい人々の「格差」といわれるものが、ますます広がっています。力をもつ人々が、法律の網をくぐって、莫大な富を手にしている世界です。神さまのことなど、少しも怖れていないように、この世の欲望がすべてを支配しているように見えます。

このような時代の中で、私たちは、光の子、神さまに愛されている者として、どこに立って歩めばよいのでしょう。主イエスが、私たちを罪と死の中から救われたのは、「良い行いに熱心な民を御自分のものとして清めるためだった」と教えられています(2章14節)。神さまに喜ばれる「良い」行いに熱心になるように。それが、私たちに期待される神さまの御心です。

主イエスを知らないままの〈わたし〉は、闇の中にひとりぼっちの人間でした。主イエスが私たちを見つけ出し、傷ついた〈わたし〉を包み、淋しい心を春の日射しのように暖めてくださいました。そうして、生きる勇気が戻ってきました。春の日射しのような主イエスの愛が、私たちの心に、平和と落ち着きをくださっています。どんなことがあっても、この主イエスの愛は、私たちから離れることがありません。だからこそ、小さな〈わたし〉、弱い〈わたし〉にも、何かできることがあるはずです。

辛い心、傷ついた心で生きている人がいれば、そばに立ち止まってあげましょう。そして言ってみましょう。

〈君はどこが辛いの?〉

〈わたしはあなたに、何をしてあげられる?〉

そのように、小さな問いかけを始めることから、神さまに喜んでいただける小さな「良い行い」の芽生えが生まれます。その小さな芽生えを、喜びの春に向かって育ててくださるのは、神さま御自身です。

私たちは、命の光をいただきました。その光は、主イエスが再び来られる完成のときまで、決して消えることのない輝きをもっています。その輝く光を高くかかげて、私たちは今日も明日も歩いて行きます。

「天の国を目指して、歌いつつ歩みます!」

(小野静雄)

〔今週の暗唱聖句〕　テトスへの手紙 2章13節後半

わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを
待ち望むように教えています。

3月3日　再臨に備える　幼稚科

〈ねらい〉

主にある光の子として立てられているわたしたちが、主が再び来られることを喜んで待ち望むことができるように、地上の生活を、礼拝を中心にした神さまに喜ばれるものとして大切に送っていきたい。

〈展開例〉

毎年くりかえされる教会カレンダーのイエスさまのご降誕、受難、復活は、すでに起こった神さまの恵みです。そして、まだ記されていない、もう一つの恵みは再臨です。クリスマスに来てくださったイエスさまは、今は天の父である神さまとともに、世界と万物を治めておられます。世界も万物もまだ完成しておらず、祈りながらその時を待っています。再臨を通して、わたしたちの信仰と救いが完成するのです。わたしたちはイエスさまが再び来られる完成の時まで、希望を持って歩みましょう。

〈お祈り〉

神さま。わたしたちに、イエスさまを送ってくださり、感謝します。わたしたちは、イエスさまを信じ、再臨の時まで喜んで待つことが出来ますように。アーメン。

〈やってみよう〉

「ワワワいっしょに」を賛美して、イエスさまの再臨を思い喜ぼう。

ワワワ　いっしょに　歌おう
呼ぼう　イエスさま
ラララ　イエスさまに　会えるまで
ウォーーイェーイ
①うれしい毎日　心がはずむ
イエスさまを　見上げて　賛美しよう
＊ワワワ　いっしょに　歌おう
呼ぼう　イエスさま
ラララ　イエスさまに　会えるまで
ウォーーイェーイ
②悲しいときでも　さみしいときにも
イエスさまを　呼べば　歌が生まれる
＊くり返し

（『プレイズワールド』6番、いのちのことば社）

3月3日　再臨に備える　小学科下級

〈主旨〉

神は、再臨に備えるために主イエスの十字架を通して私たちを良い行いへと押し出す。

〈展開例〉

（救われた者の感謝の生活を意識して。決して功績主義に陥らないように。）

○先週は、何について学んだかな？（再臨：イエス様がやがてこられること。それは救いのため。喜びを持って待ち望む。）

○イエス様が来られるその再臨を私たちは、ただ楽しみにしているだけで何もしないで待っているだけなのかな？（違う；準備をする。）

イエス様が、私たちのために天で場所を用意して準備してくださっているように、私たちも準備しなくてはいけないね。

○例えば、遠足に行く前、友達と遊ぶ前、ご飯を食べる前……みんなは何をするかな？（お菓子を買う、どんな遊びをするか考える、手を洗う、お祈りする……）

いろいろな準備をしているよね。それと同じように、むしろそれ以上に私たちはイエス様に本当に顔と顔を合わせて会うその日を目指して、一歩一歩準備していきたいね。

○じゃあそのために何をしたらいいんだろう？（礼拝する。お祈りする。聖書を読む……）

そうだね。神様を礼拝するこが第一だね。その礼拝から始って、今日の聖書の箇所では「良い行い」（テトス2:14）って出てきたのを覚えているかな？　イエス様が私たちのために十字架にかかってくださったのは、私たちが「良い行い」に熱心になるためだったんだって書いてあるんだ。

○この「良い行い」ってどんなことなんだろう？（友達のために祈る。助ける。仲間はずれにされている子と一緒に遊ぶ。仲間はずれにしている子のために祈る。声をかける……）

たくさんあるよね。一歩一歩、少しずつでいいからそうできるように神様にお祈りしていこうね。それは、イエス様が私たちのために十字架で苦しまれたのに似ている道かもしれない。つらくて、勇気がいることだと思う。けど同じ道をイエス様は通ってくださったんだよ。そして天に昇られたんだったね。やがて私たちもそこに行くためだよね。山を登る時、登っている間はつらいことや苦しいことがあるよね。でもその頂上に立った時の感動は、本当にその登った人にしかわからないほど嬉しいことだよね。「良い行い」をする中で、途中で休憩も必要だと思う。でもイエス様が迎えに来て天に行った時、その喜びと嬉しさは本当に大きなものだと思うよ。

そのことを楽しみに「良い行い」ができるように一歩一歩頑張っていこうね！

〈祈り〉

神様。イエス様に会うための準備を一歩一歩することができますように。少しでも良い行いができますようにお導きください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

3月3日　再臨に備える　小学科上級

〈子どもカテキズム〉

問35　どこを目指して歩むのですか。

答　イエスさまが再び地上に来られる再臨の日、天の国を目指して、歌いつつ歩みます。

〈子どもと一緒に考えるポイント〉

①私たちはイエス様への道途中を歩んで(走って)いるところ。

②この道を喜び、賛美して駆け抜けよう。

〈展開例〉

○天の国への道

先週は同じカテキズムから、再臨や終末について、特に終末は恐怖ではなく、罪からの解放・勝利であり、喜びだということを学んだ。今週は、その終末・再臨のときに備え、今、私たちはどう生きるべきかということを一緒に考えたい。

①「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ16章15節)

②「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(マタイ28章20節)

③「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(使徒言行録1章8節)

④「イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。」(ルカ24章50、51節)

上記の聖書箇所は、いずれもイエス様が天に上げられる場面の聖書箇所。いずれの聖書箇所からもイエス様が天に上げられる最後のときまで、弟子たちに熱心に丁寧に教えていたということがわかる。

そしてイエス様は、ただ教えただけでなく、私がいつも共にいるから、私のことを全ての人々に宣教しなさいと命じられている。

この宣教命令がクリスチャンの天の国への道のスタートだった。イエス様の宣教命令は、天国行きマラソンの号令、それをもとに弟子たちは走り出した。実際に、この後、ペトロやパウロなどといった弟子たちが大きく用いられ、イエス様の福音が全世界へと爆発的に広まっていた。そして、それは今日、イスラエルから遠く離れた、私たちの国、日本でも100万人以上の人々がクリスチャンとして立てられている事実につながる。私たちもこの宣教命令によって、天国行きマラソンに加えられ、ゴールに向かって今走っていることを覚えてほしい。

○この道の走り方

天国マラソン参加者の方へ

①このマラソンの距離は長いです。

②このマラソンは辛いけど辛くないです。

③このマラソンは一人ぼっちの戦いではありません。イエス様が共に走ります。疲れた時は背負ってくださります。

④このマラソンはまだたくさんの人が走れます。家族や友達を誘いましょう。

⑤つまずきそうな人、疲れている人がいたら助けましょう。

⑥イヤホンで聴く音楽は讃美歌で！

⑦いつも喜び、絶えず祈り、すべてに感謝して、賛美を口ずさみつつ走りましょう。

「すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競争を忍耐強く走り抜こうではありませんか、信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら！」(ヘブライ人への手紙12章1、2節)

3月3日　再臨に備える　中学科

(2012年12月30日「再臨を待ち望む」の、拙稿中学分級教案から、大幅に引用しています。ご容赦ください。)

神様が終わりをもたらされる時、それを終末という。終末には何があるのだろうか。それは恐ろしい時だろうか。

いいや、それはキリストを信じる者にとって、慰めの時、救いの完成の時。その時、イエス様は再び来てくださって、罪のない世界、新しい天と地を完成させてくださる。その時、私たちの救い主イエス・キリストの栄光が完全に現れる。その時を待ち望みなさいと、聖書は教えてくれている。

私たちは、いつも泣いている。

神様の愛の教えに背いて、互いに傷つけあい、心がかみあわないで泣いている……。

あなたが大切だと神様は言ってくださるのに、自分では自分を大切にできないで、ダメな自分だといじめては独りで泣いている……。

どうしても別れたくない人が死んでしまう……自分もまたいつか死なねばならない……アダムの堕落から始まったこの悲しい運命に、不安におびえて泣いている……。

思うようにいかないことばかり。生きていくのは苦しいことばかり。病気がある、アンラッキーなアクシデントがある。貧困がある、戦争もある、日本も近いうちに戦争を起こしてしまうかもしれない。温暖化は進み、放射能は広がる……。これはすべて、罪人である私たちの歴史の結果だ。私たちは、そういう罪の悲惨にあえいで泣いている……。

しかし、終わりの時、キリストは再び来てくださり、信じる私たちの目から「涙をことごとくぬぐい取ってくださる」と約束されている。「もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」と言われている（黙示録21:4)。神様が終わりをもたらされる時は、そんな慰めの時、救いの完成の時。

そんな終わりの時がいつ来るのだろうか？イエス様はいつ来てくださるのだろうか？ 2000年前から、クリスチャンはずっとその時を待ってきた。その時はすぐに来るってイエス様は言ったはずなのに……って思いながら。でも「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。(Ⅱペトロ3:8,9)

大事なのは、その終わりの時の完成の希望に支えられて、今という時を、イエス様に心を向けてしっかり生きることだ。約束されている大きな希望に見合うような人間になりたいものだ。イエス様は私たちを「あらゆる不法」から離れさせて、「よい行いに熱心な民＝イエス様そっくりの人々のチーム」として作り上げるために、生まれてきてくださったし、死んでくださったし、よみがえってくださったし、そして、再び来てくださる。

説教展開例で示されているようにして、「この世で思慮深く、正しく、信心深く生活すること」は、一番かっこいいことだと、今の私は思う。この世は涙ばかりだけど、光の子として、希望に生きる。愛に生きる。こんなにかっこいいことはない。イエス様は、再臨の時、ぼくらを最高にかっこよく完成させてくださる。今は、まだ未完成だけど、それでも完成を目指して、かっこよく生きたいものだ。そう願うなら、聖霊は必ずそう生きさせてくださる。

3月10日　死のときの祝福　教理説教のための聖書黙想

テキスト　ヨハネによる福音書 14章1〜3節
子どもカテキズム　問36
参照教理問答　ウェストミンスター小教理問答 問37,38
ウェストミンスター大教理問答 問84-90
ウェストミンスター信仰告白　32,33章
改革派教会60周年宣言『終末の宣言』3,4章

問36　死んだあとはどうなりますか。
答　死んで終わりではありません。
私たちの魂は完全に聖められ、天の国に入れられます。
私たちの体はイエスさまと共にあり、イエスさまがよみがえられたように
再臨の日に朽ちない体によみがえり、魂と一つにされます。
死ぬまで、そして死んでからも、イエスさまと私たちは一つです。
救われた私たちは、永遠に神さまを喜ぶことができるのです。

【カテキズムの解説】

問36は、個人の死について取り扱う「個人的終末論」と、世の終わりのことを取り扱う「一般的終末論」を一つの問答で取り扱おうとするものです。子どもカテキズムの文言が「個人的終末論」を中心に語っているのは、おそらくウ小教理の問37,38をベースに作成されたからでしょう。ウ信仰基準においては、「一般的終末論」に関して、最後の裁きを中心に記されていますが、日本キリスト改革派教会の創立60周年記念宣言「終末の希望についての信仰の宣言」(以下「終末の宣言」)では、終わりの日にもたらされる神の国の完成についても豊かに言い表されました。子ども達には、神の国の終末的豊かさを少しでも伝えることができればと願います。

「終末の宣言」第一章は「終末の希望・キリスト」と題されており、終末の希望のカギとなるのが、あくまでも「キリスト」であることが語られています。三位一体の神が天地を創造されたのは、「万物をキリストのもとに一つにまとめる計画」に基づくものです。聖書に記された救済の歴史は、その計画を実現する歴史でありました。

問36からも、個人の死において希望となるカギがキリストにあることがわかります。私たちの魂はキリストの贖いのゆえに「完全に聖められ」、キリストがおられる「天の国に入れられます」。魂だけでなく、私たちの体も「イエスさまと共にあり」、復活の初穂として「イエスさまがよみがえられたように」、キリストの「再臨の日」に、「御子に似た者」(ヨハネ一3:2)である「朽ちない体によみがえり」ます。私たちは「体も、魂も、生きるにも死ぬにも……キリストのもの」(ハイデルベルク信仰問答、問1)であり、「イエスさまと私たちは一つです」。

再臨の日の復活は、最後の審判を受けるためでもあります(ヨハネ5:28－29)。しかし、裁き主として来られるキリストご自身(ヨハネ5:22)が、私たちのために呪いを引き受けてくださったので(ガラテヤ3:13)、キリストを信じて死から命へ移された者(ヨハネ5:24)にとって、裁き主キリストの来臨は歓喜の出来事となります(詩編96:10－13)。

最後の裁きによって、「罪と汚れから完全にきよめられた新しい天と地が現れ、神の国は栄光の王国として完成されます」(終末の宣言4:4)。そこではキリストによって贖われた「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆」(黙示7:9)が父なる神とキリストを讃えます。新しい都エルサレムにおいて、主とキリストが共に住んでくだ

さり、もはや死も悲しみもなくなります（黙示21:22－27、1－4)。

【説教のための準備】

【KEY1 聖書本文を語る】

[STEP1] 聖書本文を読む。

説教のための聖書個所であるヨハネ14章1～3節を繰り返し読みます。

[STEP2] この個所のテーマは何か？

キリストは、やがて私たちをご自身のもとに迎えてくださる。

[STEP3] それをどのように展開しているか？

キリストは、十字架で死に、復活して、天に昇り、世を離れようとされている。不安を抱く弟子たちに、これから起ころうとしている終末の約束を信じるように言われる。

キリストは、ちょうど花婿が花嫁のために「父の家」で住む所を用意しに行くように、私たちのために場所を用意するために天に昇られる。用意ができたら迎えに来て、私たちがキリストと共にいることができるようにしてくださると約束された。

【KEY2 神の福音を語る】

[STEP1] この個所で神（キリスト）はご自身について何を表されたか？

キリストは、その肉体において世を離れられるが、それは私たちを天（父の家あるいは神の国）に迎え入れる用意をするためであり、再び私たちのところに来て、永遠に共にいてくださるように私たちを迎え入れてくださる。

[STEP2] 前後の節／章は、神（キリスト）について何と言っているか？

ヨハネ福音書では13章から「最後の晩餐」の出来事が語られ始める。その席上で、十字架へと進む主イエスにペトロがついて行けないことと、三度イエスを否むことが予告される。それを受けて、今日の個所で、今はついて行けなくても、やがて「父の家」に迎えるために来てくださることが予告される。

続けて、父なる神に近づいて共にいることのできる道は主イエスしかなく、主イエスを知ることは父なる神を知ることであると語られる。

[STEP3] 聖書全体を通しての神の働きに、この個所はどのように関係しているか？

神の救済の歴史は、キリストの再臨において、神の栄光の王国として完成する。その王国とは、父なる神とキリストが私たちと共に住む所を用意して迎え入れ、あらゆる民族の信仰者と、永遠に共にいてくださる場所であり、そこでは死も悲しみもなくなる。

【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

[STEP1] この個所を最初に聞いた人たちの必要は何だったか？

主イエスが去って行かれることに、弟子たちは不安を抱いていた。

[STEP2] 私たちの教会の子ども達に似たような必要があるか？

世を去って天に行かれた主イエスに希望を実感することが難しい。永遠の希望ではなく、世における利害に目を奪われやすい。

[STEP3] この聖書箇所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

主イエスは、天に昇られ、目に見える姿で私たちの近くにおられるわけではない（聖霊をお送りくださったが)。しかし、それは私たちを神の国に迎え入れてくださるためであり、再び私たちのもとに来てくださる。私たちが地上でどのような苦難を経験していても、父なる神の王国でキリストのもとに迎えられる終わりの日の希望が失われることはない。この希望のゆえに、世においても、キリストに結ばれて今を生きることができる。

※テモテ指導者訓練「聖書的説教」モジュールを参考に項目を立てました。　（大西良嗣）

3月10日　死のときの祝福　説教展開例

テキスト　ヨハネによる福音書 14章1〜3節
子どもカテキズム　問36

〔単元のねらい〕

キリストは、十字架で死に、墓に葬られ、復活して天に昇り、父なる神の右に座して、信じる者たちを迎えるための場所を用意してくださっています。「あなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える」という表現は、個人の死について教えている（個人的終末論）とも、世の終わりの再臨と神の国の完成を教えている（一般的終末論）とも受け取ることができます。肉体の死に際して、私たちの魂は、父の家（天の国）にいるキリストのもとへ迎えられます。あるいは肉体の死を迎える前にキリストの再臨があるかもしれません。いずれにしても、キリストは、私たちを「父の家」に迎え入れ、永遠に共にいて、神を喜ぶようにさせてくださいます。

イエスさまのもとに迎えられる

【序】

みんなは、自分が死んだら、どうなるのか知っていますか？　死んだら、何もなくなるのかな？　死ぬのは恐いことかな？

先生も死んだことはないので、まだ、はっきりと全部のことがわかる訳ではありません。けれども、聖書は、私たちが死んだらどうなるのか、私たちが知っておくべきことをきちんと教えてくれています。

聖書は、いくつかの個所で、死んだらどうなるのかとか、世界の終わりの時にはどうなるのかを教えています。今日、みんなと一緒に読んだのは、その中の一つです。

イエス様は、十字架にかけられる前の夜に、お弟子さんたちと最後の食事をしました。イエス様は、もうすぐ十字架にかけられて、死んで、墓に葬られて、でも三日目に復活して、そして天に昇られることをご存知でした。ですから、イエス様は、ご自分はこの世から去って行くけれども、「あなたたちは今ついて来ることはできない」とお弟子さんたちに言われました。

それを聞いたお弟子さんたちは、驚いて、心配になったようです。イエス様は、お弟子さんたちの様子を見て、「神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい」と励まされます。

そして、イエス様が、この世界から去って行かれるというのがどういうことであるのか、イエス様がこれから何をされようとしているのかを教えてくださいました。

【本論】

イエス様は、ただお弟子さんたちを離れていかれるのではなくて、父なる神様の家に、イエス様を信じる人たちが住む場所を用意しに行くのだと言われました。

イエス様がいらっしゃったころのユダヤ人たちは、結婚パーティーの後、花婿さんは自分のお父さんの家に戻って、花嫁さんを迎えるための場所を準備しました。必要なものを用意したり、きれいに掃除したり、ご馳走も用意したかもしれませんね。花嫁さんに喜んでもらえるように、花婿さんは一生懸命に用意したでしょう。そうして、用意ができると、花嫁さんのお家に戻って来て、花嫁さんを迎えるんですね。

イエス様が「父の家（お父さんの家）」に戻って、わたしたちのために場所を用意してくださるのは、花婿であるイエス様が、私たちを花嫁として迎えようとしてくださっているんですね。わたしたちは、イエス様が迎えに来て下さったならば、天のお父様の家で、イエス様と一緒にずっと暮ら

していくことになります。イエス様は、場所の用意ができたら、戻って来て、「あなたがたをわたしのもとに迎える」と約束してくださいました。そして、イエス様がいらっしゃるところに、わたしたちも一緒にいることになると教えてくださいました。

ですから、イエス様を信じている私たちが死ぬということは、私たちの魂がイエス様のところに迎え入れられるということです。父なる神様の家で、イエス様と一緒に住むようになります。

もしかしたら、私たちが死ぬよりも前に、イエス様がこの世界にもう一度来られる「再臨」が起こるかもしれません。イエス様を信じる人たちみんなの場所を用意して、イエス様はご自分のところに迎え入れてくださるために、再び、この世界に来られるんだね。

このときには、すでに死んだ人たちの体もよみがえって、一緒に、父なる神様の家に迎えられることになります。

それが、終わりの日に完成される「神の国」の姿です。数えきれないくらいたくさんの人たちがいて、きっと世界中のいろいろな民族の顔をした人たちが、いろいろな国の服を着て、いろいろな国の言葉を話しながら、父なる神様とイエス様の前に集まるんだろうね。だれも聴いたことのないような素晴らしい雄大な賛美が歌われるのでしょう。

永遠にイエス様と一緒にいることのできる喜びの中で、もはや、悲しいこと、苦しいこと、そして、死ぬことさえもなくなります。

【結】

私たちは、今、イエス様を目で見ることはできません。イエス様は天の父なる神様の家にいらっしゃるからです。そこで、私たちのために場所を用意してくださっています。

ですから、イエス様を信じるということは、この世界のことだけを考えて生きるのではないということです。死んだ後のことも、イエス様が再び来られた後のことも、考えて生きます。イエス様が私たちを迎えてくださる日を楽しみにしながら生きます。

イエス様が来てくださって、いつまでも一緒にいられるようになったとき、どんな話をしますか？楽しかったときのことも、たいへんだったときのことも、イエス様に聞いてもらいたいですね。イエス様が来てくださることを楽しみにしながら、今週も歩んでいきましょう。　（大西良嗣）

〔今週の暗唱聖句〕　ヨハネによる福音書 14章3節

行ってあなたがたのために場所を用意したら、
戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。
こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。

3月10日　死のときの祝福　幼稚科

〈ねらい〉

人は死後どうなるかを正しく伝える。すなわち、父なる神のもとに召される。そのために、イエス・キリストはこの地上に降り、十字架にかけられ、葬られた後に復活して天に昇られた。

〈展開例〉

今朝のお話は「死のときの祝福」というお話だけど、朝から死ぬ話なんてなんだかすごいね。でも、大事な話だからよく聞いてほしい。

僕たちは死んだらどうなると思いますか？

火葬場で焼かれて骨になる？

確かに僕たちの体は死んだら土に還っていきます。では、体以外の心とか魂と言われるものはどうなると思いますか？

死んでみないとわからない？　でも「この世」とは違う「あの世」に行くと思っているのではないかな。実際に見ることもできない「あの世」がどんなところかわからないと、怖くありませんか。昔の人たちも同じでした。イエスさまはこのような不安や怖さを拭い去るためにこの世に来られました。

今日のお話の箇所は「最後の晩餐」と言われます。イエスさまはお弟子さんたちと食事をした後、ファリサイ派や祭司長たちに捕まって裁判にかけられ、十字架にかけられるのです。

お弟子さんたちは大変だよね。頼りにしていたイエス先生が捕まったら、自分たちもいじめられたり、下手をしたら殺されるかも。だからお弟子さんたちはみな逃げ出してしまいました。

でも、イエスさまはお見通しでした。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしを信じなさい」とおっしゃったんだね。「わたしの父の家には住むところがたくさんある」のだから、「行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻ってきて、あなたがたをわたしのもとに迎える」と、はっきりおっしゃいました。イエスさまを信じれば、間違いなく「父の家」つまり「神の国」に入れるということです。だから、死んだ後どうなるかわからない不安や怖さは、もうありません。イエスさまを信じれば、一番安心な「父の家」に確実に行けるのですから。

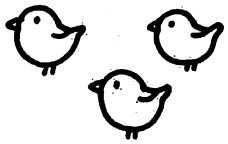
早く神の国に行きたいって？　それは神さまが定められている時がありますから、人が勝手にそれを変えることはできません。

また、イエスさまは定められた時に、天の国から地上に帰って来られると約束されました。その時には、わたしたちが住んでいるこの世界も神の国に造りかえられます。そして、すでに死んだ人の体もみな復活して、神の国に迎えられるのです。このことも、イエスさまを信じる人に約束されています。

イエスさまの弟子たちは、この素晴らしい知らせをまだ知らない人たちに伝えるために世界に出かけたのです。わたしたちは今何をしたらよいと思いますか？

〈お祈り〉

天のお父様、イエスさまによって死んだ後の不安や怖さを取り去ってくださって、ありがとうございます。どうか、今安心して神さまの喜ばれる業に励むことができますように。



3月10日　死のときの祝福　小学科下級

〈主旨〉

神は、死後私たちをイエス・キリストと一つとし永遠に神を喜ぶ幸いへと招かれる。

〈展開例〉

先週まで、イエス様の再臨について学んだよね。この再臨は、イエス様がまたみんなを迎えに来て下さることだったね。でもこの再臨という日は私たちにはいつあるかわからない。父なる神様だけがご存知だから。だから、イエス様が来られる再臨の前に私たちがこの地上で死んでしまうかもしれないよね。

○それでは、私たちが死んだらどうなるんだろう？

今日の子どもカテキズムをみんなで読んでみよう。……最初に「死んで終わりではありません」ってはっきり書かれてあるね。

○反対に、もし私たちが死んで終わりだったらどうだろう？(悲しい。希望がない。意味がない。)

今何のために生きているかも分からなくなっちゃうほど、悲しいことだよね。でもそうじゃないよね。死んだらこの魂はイエス様のもとにすぐ行くんだよ。

○みんなは教会での葬儀に出席したことあるかな？（ある・ない）

普段の礼拝みたいに、讃美歌を歌ったり、聖書のお話を聞いたりするんだよ。

○悲しいはずなのに何で讃美歌を歌ったりするんだろう？

それは、その人がイエス様のもとに行ったからなんだ。だから神様を賛美するんだよ。死ぬことは、私たちにとって天国の入り口を通ることなんだ。一時の別れは悲しいけど、死ぬっていうことでさえ、イエス様との結びつきを切られることはないんだよ。

だから教会ではこの死ぬことを「召される」って言ったりするんだ。ちょっと難しい言葉だけど、これは神様に「呼ばれる」っていう意味。あの人は、地上の人生を精いっぱい全うして神様に呼ばれたって。私たちみんなもやがて神様に呼ばれる時が来るよね。でもその時こそ、イエス様と一つになれることを覚えていてね。イエス様が準備して整えてくださったその天の家に行くんだって。そこでみんなと一緒に神様を中心にして喜び楽しむんだって（礼拝・賛美)。

〈祈り〉

天の父なる神様。私たちが死ぬ時、本当にそれは怖いことだと思います。けれどすぐにイエス様と結びつけてくださることをありがとうございます。死ぬ時でさえイエス様との結びつきを切れない強い関係を、これからも確かめて生きていくことができますように導いてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

3月10日　死のときの祝福　小学科上級

〈ねらい〉

生きているこの世では不条理なことや納得いかないことがいっぱいあるけれど、天国は完璧にすばらしいところだということに希望を感じたい。

〈展開例〉

みなさんは、毎日の生活の中で、「あれ？」と思うことはありますか？　家族の中で、あるいは学校の中で。学校にもすっかり慣れて、いろいろなことがわかってきていますね。大人がいつも正しいわけではないとか。何か感じていることがあったら、教えてください。（自由に話をさせる。脱線もOK！）

私が最近「あれ？」と思ったことを話します。

TVニュースや新聞で知っている人もいると思いますが、ここしばらく領土問題が大きく取り上げられています。島がどちらの国のものなのかで言い争っています。この世のすべては神様によって創られて、神様のものなのに、人間同士で争っている。おかしいと思いませんか？

残念ながら、みな罪人であるこの世に生きている以上、おかしいことは山のようにあります。私も悲しくなったり腹が立ったり、がっかりしたことがたびたびあります。

けれども、天国はこの世とは比べものにならないくらい素晴らしいところです。天国の希望があるから、この世でも生きていけるのです。

ヨハネ福音書14章1～3節を読みましょう。イエス様はなんと約束してくれましたか？（1～3節を箇条書きにして書き出すと分かりやすい。）素晴らしい約束ですね。感謝しましょう。

〈祈り〉

神様、すばらしい天国の約束をイエス様がしてくださったことに感謝します。この喜びをたくさんの人が知ることができますように。

3月10日　死のときの祝福　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

まず、教理的なポイントを整理しましょう。

死は、神の怒りと呪いの結果であり、信者であっても罪人ですから、未信者と同じように死にます。しかしキリスト者の死は、もはや刑罰としての死ではなく、希望への入り口です。

それは父なる神が与えてくださる最後の試練であり、別離の悲しみや肉体の苦しみを覚えますが、それを通して練り清められ、救いの完成へといたるのです。

「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである。」（黙示14:13）

○霊魂への祝福

信者の魂は、死の時に全くきよくされます。それは、聖化の完成であり、罪と悲惨からの完全な解放です。もう自分の不信仰や弱さに悩むこともありません。誘惑や試練にも勝利します。互いに愛し合えぬ苦しさからも解放されます。信仰と希望と愛が満たされます。

また信者の魂は、死んで直ちに栄光に入ります。それは、キリストの共におられる楽園の祝福の約束です（ルカ23:43）。その恵みのすばらしさは、地上に生きる私たちの思いを完全に超えていますから、どのように述べても、表現しつくすことはできないでしょう。

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。 わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。 わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。 わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。」（コリント二4:16－5:1）

○体への祝福

信者の肉体は、死んでから後、復活まで墓の中で休みます。つまりお休み＝安息をいただくのです。神は、病や苦悩で疲れ果てた私たちの肉体に、死という仕方で慰め深い安息を与えてくださいます。（やがて終わりの時には、復活の栄光の体によみがえり、きよめられた霊魂と再結合します。）墓の中で、死体は朽ち果てていきます。しかし、私たちの肉体が墓に葬られて人の目に見えなくなろうとも、決してキリストからは忘れられず、大切に扱われ続けます。

死ぬことが怖くて仕方のない人がいるかもしれない。でも、学校の友だちや、親や先生には、そういうことって相談できないよね。周りを見ると、そんなこと考えている人はいなさそう……。そんな話をしても、ちゃんと聞いてもらえなさそう……。でも安心していいよ。みんな本当は怖いのです。死が怖いけど、みんな君と同じように、あんまり話題にしてはいけないって思っている。

死んだらどうなるのか、考え出したら怖くて、何も手につかなくて、勉強もする気になれなかったという人も知っています。その人は、イエス様に出会って、クリスチャンにとって死は希望への入り口だと知ってから、生きることが楽しくて仕方なくなって、勉強もどんどんできるようになったって。君もそうなるといいな。

3月17日　苦難のキリスト　聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 23章13〜25節

今日の個所は、大きく分けると以下のように三つに分けられるでしょう。

1. (13節－19節)　ピラト、イエスの釈放を祭司長たちと議員たちと民衆に呼びかける。
2. (20節－22節)　ピラト、再三イエスの釈放をユダヤ人たちに呼びかける。
3. (23節－25節)　ピラト、ついにイエスをユダヤ人たちに引き渡す。

1.「ピラト、イエスの釈放を祭司長たちと議員たちと民衆に呼びかける」(13節－19節)

23章1〜2節によると、「全会衆が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そして、イエスをこう訴え始めた……」とあります。ユダヤ人たちは、主イエスをこの世の権力者のもとに連れて行き、この世の法律で裁いてもらおうとします。しかし、ピラトには主イエスを罪に定める点を見いだせなかったので、別の権力者、領主ヘロデの所へ主イエスを回します。ヘロデもまた主イエスに決定的罪を見いだせず、ピラトの所に主イエスを送り返します。こうした後、今日の個所に入っていきます。

13節、「ピラトは、祭司長たちと議員たちと民衆とを呼び集めて、言った」とあります。「祭司長たちと議員たち」とはユダヤの指導者層ですから、「祭司長たちと議員たちと民衆」ということで、ユダヤ人全般を言い表しています。

14節〜15節では、4節同様、ピラトは主イエスの無罪を主張しています。「わたしはあなたたちの前で取り調べたが、訴えているような犯罪はこの男には何も見つからなかった。……この男は死刑に当たるようなことは何もしていない」と。

そこで、ピラトは「鞭打ちの後で釈放」を促します。16節「だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。」「鞭で懲らしめて」というのは、「子ども」という言葉が変化した言葉です。子どもをしつける時にしばしば体罰が伴いますが、そういう類いの言葉です。ですから、ピラトとしては主イエスを釈放したかったのです。でも、ただ釈放すると言っても、ユダヤ人たちは納得しないのだろうから、「懲らしめの体罰を与えた後、釈放しよう」とユダヤ人たちに提案しているのです。

しかし、ユダヤ人たちは「一斉に、『その男を殺せ。バラバを釈放しろ』と叫んだ」(18節)のです。

2.「ピラト、再三イエスの釈放をユダヤ人たちに呼びかける」(20節－22節)

ピラトはそれからも何度も、鞭で懲らしめて後に釈放する提案をユダヤ人たちにします。

20節「ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。」

22節「ピラトは三度目に言った。『いったい、どんな悪事を働いたと言うのか。この男には死刑に当たる犯罪は何も見つからなかった。だから、鞭で懲らしめて釈放しよう。』」

しかし、ユダヤ人たちの反応は、21節「十字架につけろ、十字架につけろ」というものでした。

再三ピラトは「懲らしめて後、釈放しよう」と提案し、促しますが、ユダヤ人たちは火に油が注がれたように、吠えたけります。「十字架につけろ、十字架につけろ」と。

ここで初めて主イエスが受ける処刑の形が十字架刑であることが分かります。主イエス自身、何度も御自身の死を予告されました。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され……」(9:22)。「人の子は人々の手に引き渡されようとしている」(9:44)。「人の子は異邦人に引き渡されて、侮辱され、乱暴な仕打ちを受け、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す」(18:32－33)。

このように、人の子である主イエスが人々の手に引き渡され、鞭打たれて殺されることは予告さ

れていました。しかしそれが、十字架刑であるとは、23章21節で初めて明らかにされます。「十字架につけろ、十字架につけろ」(21節)。

3.「ピラト、ついにイエスをユダヤ人たちに引き渡す」(23節－25節)

ピラトとしては、とにかく、死刑に当たる事柄は主イエスに見当たらない。そこで何とかして、彼を鞭打ちで懲らしめた後、釈放しようと努めるのでした。しかし、ユダヤ人たちの反応は、手のつけられないものでした。

23節「ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。」

ここで言われている「人々」とはだれのことでしょう。そこには、もちろん「祭司長たちと議員たち」が含まれていたでしょう。しかし、人数としては「民衆」が多かったと思われます。この民衆たちの多くは、神殿の境内で主イエスのお話を聞いていた人々です。21章37～38節と22章53節にこうあります。「それからイエスは、日中は神殿の境内で教え、夜は出て行って『オリーブ畑』と呼ばれる山で過ごされた。民衆は皆、話を聞こうとして、神殿の境内にいるイエスのもとに朝早くから集まって来た。」「わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。」

主イエスの話を聞くために神殿の境内に朝早くから集まるかと思えば、指導者たちに扇動されると、たちまちのうちに手のひらを返すように、「十字架につけろ」と叫び出す。これが、民衆の姿であり、私たち人間の姿です。

そんな民衆の叫びに、ついにピラトも従ってしまいました。24～25節「そこで、ピラトは彼らの要求を入れる決定を下した。そして、暴動と殺人のかどで投獄されていたバラバを要求どおりに釈放し、イエスの方は彼らに引き渡して、好きなようにさせた。」

ピラトは何とかして主イエスを釈放しようと試みました。しかし、最後にはユダヤ人たちに押し切られ、抵抗することもできずに、主イエスを彼らに引き渡しました。まさに9章44節で主イエスが予告した通りに事は運んで行ったのです。「人の子は人々の手に引き渡され……」たのでした。

私たちの罪を身代わりに背負い、それを十字架の上で処理される。これが父なる神の御計画でした。そのことが実現されるために、ピラトの釈放の試みも民衆の声に押し切られる。こうして、主イエスの十字架による罪の赦しが実現していったのでした。

(芦田高之)

3月17日　苦難のキリスト　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 23章13〜25節
参照教理問答　子どもカテキズム　問24

〔単元のねらい〕
ピラトの説得も空しく、民衆の思いに引き渡され、十字架にかかった主イエス。しかし、こうして神の救いの計画は実現していった。人の罪と神の救いの計画とに思いを向けさせる。

苦難のキリスト

1. ピラトの提案

イエス様のまわりには、いつも人々がたくさん集まっていました。分かりやすく、天の父なる神様のお話や、天国の話をしてくださるからです。だからいつもイエス様のまわりには、人々が集まっていました。イエス様が十字架につけられるその週も、イエス様が神殿のお庭でお話をするのを聞くために、朝早くから人々はイエス様の回りに集まっていました。

それを見ていたユダヤ人の指導者たちは、とても面白くありませんでした。すごく面白くないので、イエス様が居なくなってしまえばいいと思いました。イエス様が居なくなるためにはどうしたらいいか？　死刑にして、殺しちゃえばいい、と思ったのです。

それで、イエス様をつかまえて、裁判にかけて死刑にしようと思ったのです。

それでまず思いついたのが、強いローマの国の力でイエス様を殺そうと考えたのです。その当時、ユダヤはローマの国に支配されていました。ローマの国は、ユダヤの国を治めるために総督という力のある人をユダヤの国に送っていたのです。その時のローマの総督の名前は、ポンティオ・ピラトでした。

ユダヤの指導者たちは、イエス様をこのピラトの所に連れて行ったのです。そして、言いました。「ピラト様、このイエスという男は、変なことを言って、国をめちゃくちゃにしようとしています。自分が王様だとも言っているんです。ゆるせないでしょう？」

ピラトは、イエス様にいくつも質問しました。でも、イエス様はほとんど何も言いませんでした。そうするとピラトは、ユダヤの指導者たちに言いました。「わたしには、この男が悪いことをしたとは思えないんだ」と。

でも、ユダヤ人たちは納得いきません。それで、また裁判をしてくださいと言います。そこでピラトはユダヤ人の指導者たちや普通の人々を呼び集めました。そして、言いました。

「わたしは、このイエスという男をちゃんと取り調べたけれど、あなたがたが言うような悪いことをしていないことが分かった。だから、ちょっと懲らしめるために鞭で打ってから、それから、釈放しようと思う。」

それを聞いたユダヤ人たちは、みんなで一斉にいました。「そのイエスを殺せ。バラバという牢屋に入っている男を代わりに釈放しろ」と、叫びました。

2. 人々の思い

ピラトは、何とかしてイエス様を釈放したいと思ったのです。だから、何度も何度もユダヤ人たちに言いました。「このイエスという男は、あなたがたが言うような悪いことはしていない。だから、鞭で打ってから、釈放しよう」と。

でも、ユダヤの人々は絶対に納得しません。

「だめだ、だめだ。絶対にこのイエスは殺されなければならない」と。

ピラトは言います。「まあそう言わないで、鞭打ちにして、このイエスという男を赦して釈放し

てあげようではないか。」

なんど、ピラトがそう言っても、ユダヤの人々は絶対に言うことを聞きませんでした。そして、言いました。

「十字架につけろ、十字架につけろ」と。ものすごい勢いで人々は、そう叫び続けました。

でもピラトは諦めません。

「あなたがたが何と言っても、わたしはこのイエスという男に罪を見出すことはできない。鞭で打って懲らしめてから、釈放しよう。」

3. 人々に引き渡される主イエス

何度ピラトが言っても、人々の叫ぶ声は大きくなるばかりです。

「十字架につけろ、十字架につけろ……」という声は、どんどん大きくなります。その声がどんどん大きくなるので、ついに、ピラトもその声に負けてしまいました。そして言いました。

「そんなにこのイエスという男を十字架につけて殺したいなら、この男をお前たちに引き渡す。お前たちの好きなようにしたらいい……」と。

こうして、イエス様は十字架につけられるために、人々の手に引き渡されました。

ピラトはローマの総督でしたが、ユダヤの人々がイエス様を憎んで、イエス様を十字架にかけようとするその力にはかないませんでした。

でもなんでそんなにもユダヤの人々はイエス様のことを殺したいと思ったのでしょう。多くの人々は、イエス様のお話を聞くのを楽しみにして、イエス様の回りにいた人々です。それなのに、どうしてこんなに人々はイエス様を憎むようになったのでしょう。

理由はユダヤの指導者たちです。自分たちよりも正しいこと言って、自分たちよりも人気が出てきているイエス様のことが憎くてたまらなかったのです。何とかしてイエス様を殺したい、と思ったのです。自分たちよりもイエス様の方が人気者になったら、悔しくってたまらなかったのです。それで、何としてでもイエス様を殺したいと思い続けていました。

このように、自分よりも他の人が、人々からよく思われる。そうすると、悔しくて、仕方なくなる。そういう思いを、ねたみ、とか、嫉妬と言います。この嫉妬、ねたみというよくない思いが心の中に起こって来たら、大変です。何とかして、自分よりも人気のある人をやっつけたくなってしまいますのです。

この時のユダヤの指導者たちはそうでした。そういうねたみ、嫉妬という思いをイエス様に対して燃え上がらせていました。それで、ユダヤの多くの人々を味方にして、イエス様を殺そうという気持ちを人々の心に植え付けました。

その結果、ユダヤの多くの人々は、イエス様に対してねたみや嫉妬の心を持つ指導者たちに操られてしまいました。そうして、「イエスを十字架につけろ」と叫び出したのです。

ついこの間まで、イエス様のお話を喜んで聞いていたような人々が、ころっと心が変わってしまうのです。そして、イエス様を十字架につけることに賛成するようになってしまう。

それが、罪人の性質です。みんなの気持ちや意見に自分の心も流されていってしまう。それが罪人です。

ユダヤ人の指導者の妬みや、彼らに動かされる人々の「十字架につけろ」という思いに、イエス様は引き渡されました。そういう人々の罪の心を全部引き受けて、そんな悪い思いを十字架にかけて処理する。そのためにイエス様は、人々に引き渡されるままに、御自分を十字架へと引き渡されました。

これがわたしたちの罪の心を処理するためにいらした、イエス様です。　　(芦田高之)

〔今週の暗唱聖句〕　イザヤ書 53章8節

捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。

3月17日　苦難のキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

主イエスが十字架にかかる直接的きっかけを作った人々の罪。イエスはそれを黙って担ってくださり、救い主となられた。

〈展開例〉

用意するもの：十字架のキリストの絵、ペープサート（①祭司長・律法学者、②民衆、③ピラト）、黒いハート型を3枚。

1.（十字架のキリストの絵を見せながら）

これは、わたしたちのイエスさま。大きな木の十字架にはりつけにされて、とても痛そうで、とても苦しそう。イエスさまは何か悪いことをして、罰を受けたのかな？　そうではありませんね。ではどうしてイエスさまは十字架にかかることになったのでしょう。

2.（ペープサート①を出す）

これは祭司長や律法学者。牧師先生のように神さまのことを人に教える人です。この人たちは、イエスさまの教えがとてもすばらしく、大勢の人が喜んで聞いているのを見て、面白くありませんでした。みんながイエスさまについていってしまいそうなので、「イエスさまなんていなくなっちゃえ！」って思って、「この人は自分がユダヤの王様だと言って、みんなをだましている」とうそをつきました。（黒いハートを十字架の絵に貼る）

3.（ペープサート②を出す）

この人たちは、イエスさまのお話をよく聞きに来ていました。イエスさまってすばらしいなと思ったこともあったのに、祭司長や律法学者が「あの男は自分が王様だと言っている嘘つきだ」と言い始めると、心がグラグラしてきて、隣の人が「そうだ、そうだ」と言い、その隣の人も「そうだ、そうだ」と言うと、自分も「そうだ、そうだ」と言うようになりました。ついには「十字架につけろ！　十字架につけろ！」と叫ぶようになりました。（黒いハートを十字架の絵に貼る）

4.（ペープサート③を出す）

この人はピラト。裁判官です。人が本当に悪いことをしたかどうかを調べて、どんな罰を与えるか決めるお仕事をする人です。ピラトは、イエスさまは何も悪いことをしていないとわかっていたけれど、あまりたくさんの人が「十字架につけろ！十字架につけろ！」と叫ぶので、その声に負けて、イエスさまを十字架につけることに決めてしまいました。（黒いハートを十字架の絵に貼る）

5.（たくさんの黒いハート）

これは人の罪の心です。イエスさまはたくさんの黒いハートを黙って受け止めて、十字架にかかってくださいました。それはわたしたちの中にもある黒い罪をぜんぶ引き受けて、かわりに罰を受けるためだったのです。

♪「わたしたちの　つみのため」
　わたしたちの　罪のため
　じゅうじかにかかった　主イエスさま
　わたしたちを　いまもなお
　おまもりくださる　主イエスさま
　わたしたちに　み光を　〃
　あたえてください　主イエスさま
　（『こどもさんびか』38番、
　日本基督教団出版局）

3月17日　苦難のキリスト　小学科下級

〈主旨〉

神は、私たちが自分自身の罪を見つめさせるためにイエス・キリストを全ての人に引き渡された(使徒2:23参照)。

〈展開例〉

○今日の箇所で出てきたピラトという人は、イエス様に罪があると判断したかな？（してない）

○けれども、結局、ピラトはイエス様をどうしたのかな？（バラバを釈放して、イエス様をみんなに引き渡して好きなようにさせた。）

○何でピラトは、イエス様は何も悪いことをしていないと思ったのに、イエス様をみんなに引き渡してしまったんだろう？（みんながイエス様を殺せ、十字架につけろと言ったから。）

○みんなはどうかな？

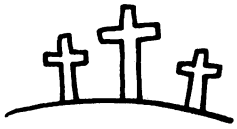
神様が悲しまれることを周りの友達みんながしていて、自分だけが孤立しているように感じる時……みんながやっているし、いいかなって思うことはないかな？（子どもたちにとっては答えにくい質問かもしれないので、教師が自身の証を踏まえて語ると身近なものになるかもしれない。）

……このピラトの姿は私たち自身の姿を表わしているんだね。すぐ人に影響されやすかったり、なかなか正しいことを言えなかったり、友達に意見を合わせてしまったり……。「イエス様に命をかけて従います！」と言ったペトロさんもそうだった。「君、あのイエスって言う人と一緒にいたでしょう？」と言われた時、ペトロさんもイエス様のようにされると思ったんだ。そして私はあなたたちと同じですよとアピールして、「あんな男なんてしらない！」って三回も言ったんだよ。

みんなの周りには教会に行っている人はほとんどいないかもしれない。つらい思いをしているかもしれない。そしてみんなと意見を合わせることがあるかもしれない。それが良いっていうんじゃないよ。でもふと立ち止まって考えてもらいたいんだ。イエス様はどこにおられるか。仲間はずれにされた所に立っているんじゃないかな。そう気がついた時、素直に神様にごめんなさいとお祈りできるようにしていこうね。

〈祈り〉

天の神様。私たちはすぐ友達に流されてしまって、神様の悲しまれることをしてしまいます。ごめんなさい。どうかイエス様が身近におられることをいつも覚えることができるようにしてください。そして罪や誘惑からお守りください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。



3月17日　苦難のキリスト　小学科上級

〈ねらい〉

民衆の変節の出来事をとおして、自分の救いについて考える。

〈展開例〉

先週はイエス様が天国について素晴らしい約束をしてくださったことを学びました。

今日は、そのイエス様がその後どうなったかを学びます。

イエス様はたくさんのお話をされました。みんなイエス様のお話を聞きたくて、イエス様について歩いたのです。

ところが、それをおもしろく思わない人々がいました。ルカ11章53節にはこう書いてあります。「イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き。」また、ルカ19章47〜48節にはこう書いてあります。「毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。」

律法学者たちはイエス様を憎んでいました。また、人気があるのでねたんでいました。民衆はどうでしょう。「夢中になってイエスの話に聞き入っていた」ということは、イエス様のことが好きだったと思います。

今日の聖書箇所から、民衆の言葉を探してみましょう。(18、21節を子どもに読ませる。)

続けて、22〜24節を読んでください。

夢中になって話を聞いていた人々が、こんな風に変わってしまいました。びっくりです。イエス様はどんなに悲しかったことでしょう。しかし、ここには神様の不思議なご計画がありました。十字架でイエス様が贖ってくださらなければ、罪人の私たちは滅んでいくしかなかったのです。

〈祈り〉

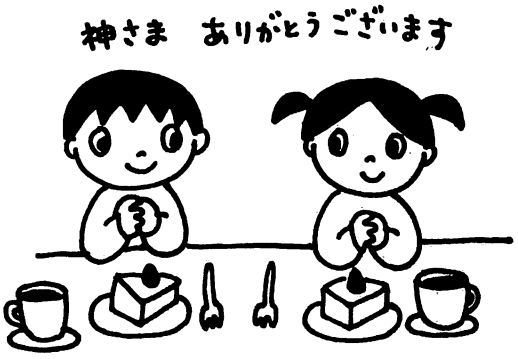
神様、私たちのためにイエス様が苦しい道を歩んでくださったことを感謝します。私たちの心がイエス様から離れることがないようにお守りください。アーメン。

※注

「贖う」という言葉は子どもたちの世界ではまず使われません。説明が必要です。

「贖う」：あやまちや罪をゆるしてもらうため金品を出す。また、代わりのものでつぐないをする。「死をもって罪を贖う。」

(学研、『現代新国語辞典』、金田一春彦編)



3月17日　苦難のキリスト　中学科

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

イエス様は、どうして苦しみを受けねばならなかったのだろうか。

イエス様に苦しみを与えた人たちのことを考えてみよう。

まず、ピラト。彼はイエス様に何の罪も見出せないと分かっていた。しかし最終的に十字架につけろと指示した。それはユダヤ人の脅しに屈したからです。

ヨハネ福音書によれば、ユダヤ人たちはこう叫んだとあります「もし、この男を釈放するなら、あなたは皇帝の友ではない。」この言葉に彼はぐらつきました。イエスを釈放するなら、危険人物をみすみす見逃したと皇帝に噂を流すぞと。ピラトは恐れた。ピラトにとって一番恐ろしいことは、皇帝の信頼を失うことだったから。それだけは絶対に避けなければならない。だから、最終的に、ユダヤ人をなだめる形で、正義をねじまげて、十字架刑の決定を下しました。あああ、ちっちぇえなああ……。

次に、ユダヤ教の宗教指導者たち。特に貴族階級であるサドカイ派の指導者たちはイエスが邪魔でした。彼らが恐れたのは、イエスがクーデターを起こすことによって現在の体制が破壊されることです。そうなれば、自分たちの地位が失われます。

彼らは民衆が貧しく圧迫された暮らしをする中で、自分たちだけはローマとうまく折り合いをつけて、支配層としての地位と富とを得ていた人たちです。それを覆す危険があるメシアなど邪魔だと、イエス殺害をねらった。自分の保身しか考えていない。政治家っていつでもこういう存在？

その他にも、説教展開例にあるように、単純にねたみや嫉妬もあったでしょう。彼らからすれば、このイエスという若者は、神殿を「強盗の家」だと批判して大暴れしたり、安息日の規定も守らない無法者でした。しかしそんなイエスの教えに人々はひきつけられていく、しかも、誰も真似できないような幾つもの奇跡で人々を癒していく。そんなイエスのことが面白いわけがない。でも、そういうねたみをごまかして、イエスを殺すのは合法的だと自分を正当化する、あああ、汚い人間だなああ……。

そういう宗教指導者たちに扇動されて「十字架につけろ」と声を挙げた群集もいる。はじめエルサレムの群集は、歓声をもってイエス様を迎えました。ロバに乗ってエルサレムに入場されるイエス様を、ナツメヤシの枝をふるって「ホサナ」と迎えた。その彼らが、一転して今度は「殺せ」と怒声をあげる。この薄っぺらさ、軽率さ、身勝手さ。

世の空気に乗って、みんなといっしょの考えでいることで安心する。そうやって次々とスケープゴートを作り出しては、鬱憤を晴らす。そんなやつ、今もゴロゴロいるよね。気まぐれで、風の吹くままに流れを変えて、罪なき人をも十字架にかけて、でもそんなの自分には関係ねえって、無責任に飯食って、……あああ、もうなんだかなああ!!!…。

イエス様は、こういう人たちによって、十字架にかけられ、苦しみをお受けになった。

でも、考えてみてください。

こういう人たちの中に、君はいないですか？

残念ながら、ぼくはいました……。

3月24日　十字架のキリスト　聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 23章32〜43節

〈背景と文脈〉

四福音書すべてが、主の十字架について記述しているが、どの福音書も肉体的な苦痛を描写して読者の感情に訴えようとはしない。むしろ罪のない神の子が罪人の一人に数えられ、身代わりとして刑罰を受けられたことによる霊的な苦悩、そこに追いやった人間の罪の重さ、またそれにもかかわらず、罪人をそれほどまでに愛しておられる父なる神と主イエスの愛を伝えている。特に、ルカ福音書のこの個所は、十字架につけた者たちのための執り成しの祈り（34）と一人の犯罪人への約束の言葉（43）を記している点でユニークである。これらの記事は、主の罪人に対する愛の深さと、主を信じる者への恵みの深さを印象付ける。

〈十字架上の主イエスと人々の反応〉（23:32－38）

主イエスは二人の犯罪人と共に十字架につけられた。イザヤは「彼が自らをなげうち、死んで、罪人のひとりに数えられたからだ」（53:12）と記している。罪のない神の子が罪人のひとりに数えられ、十字架につけられ、裁かれたのである。

主は十字架につけた者たちのために執り成しの祈りをされた。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」彼らにとっては、主イエスは一人の犯罪人以上の何者でもなかった。しかし、このとき神は、罪のない最愛の御独り子を犠牲にされるという、人間が思いもよらない方法で、私たち罪人を救う道を備えておられたのである。この執り成しの祈りは、そのような罪人に対する主の限りない愛と憐れみを示すものである。この祈りが、最期の瞬間に主を信じた犯罪人を悔い改めに導いた可能性がある。十字架刑は残酷で、受刑者を肉体的に長く苦しめるものであった。人間の罪がどれほど底知れなく深いものであったかは、くじを引いてイエスの服を分け合った人々の姿や、議員や兵士たちの罵りの言葉が示している。

〈犯罪人の悔い改めと主イエスの約束〉（23:39－43）

悔い改めた犯罪人の言葉は、彼が深い罪悪感を持ち、心を打たれていたこと、またイエスがメシアであり、再び来られる王である、と信じていたことを示している。彼は、イエスこそ罪のない聖なる方、また御国の王である、と十字架上で信じたのである。そして「あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と嘆願した。多くの人々が、十字架から降りて自分を救わなければメシアではない、と言っているとき、対照的に、彼は、十字架上で息を引き取ろうとしているイエスこそ、まことの救い主であり、やがて来るべき御国の王（あなたの御国、42）である、と信じた。

主イエスは彼の信仰に応えて、彼が願う以上のことを約束された。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」「楽園」（パラダイス）とは、主にあって死んだ者の魂がキリストと共にいて、キリストとの交わりにあずかるところ（フィリピ1:23）であり、御国を指す（黙示録2:7）。

死者の復活が起こる再臨のとき、わたしを思い出してほしい、と願った犯罪人に、その時を待たないで、今日ただちにわたしと共に楽園にいる、と約束された。主イエスは十字架上で罪人のための贖いの死を遂げることによって、彼を信じる者はだれでも、死後ただちに楽園で主との交わりに入ることができる道を開いてくださったのである。

最後の瞬間に悔い改めて信じた犯罪人の記事は、十字架上で死なれた主イエスこそ楽園の鍵をもたれ、信じる者に永遠の命を与えることのできる、まことの救い主である、と確信させてくれる。主イエスは、その犯罪人の罪の贖いのためにも死なれ、贖いの死を通して、彼に永遠の命を与えられたのである。読者もイエスを救い主と信じて同じ恵みを受けるように促されている。（後藤公子）

3月24日　十字架のキリスト　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 23章32〜43節
参照教理問答　子どもカテキズム　問24

〔単元のねらい〕

イエスさまは十字架の上でご自分を救われず、罪人の救いのために、身代わりとして刑罰を受けてくださった。そして罪人の贖い主として、罪人を罪の刑罰から解放してくださった。それゆえ、贖い主イエスを信じる者はだれでも、この地上での歩みを終えたのち、ただちに、主イエスと共に楽園にいることができる。子どもたちが、イエスさまを自分の贖い主として信じるように導く。

楽園の鍵を持っておられるイエスさま

鍵はとても大切です。自分の家でも鍵がなければ入れませんね。外出したお母さんが帰ってきて、鍵で開けてくれるまで、何時間も外で待っていなければなりません。あるいは、だれかの家を訪ねるとき、ドアが閉まっていたら、私たちは中に入ることはできません。でも、その家に住んでいる人が中からドアを開けて、「どうぞ」と招き入れてくれるなら、私たちはその家の中へ入ることができます。このように、家の中に入るためには、その家の持ち主が開けてくれるか、入るための鍵をもっているかどちらかです。

今日の聖書の個所は、イエスさまだけが楽園の鍵をもっておられて、わたしたちを楽園に招き入れてくださることのできるお方である、というお話です。

楽園は、楽しい園という意味です。皆さんは美しく広い公園に行って遊んだことがあるでしょう。また、遊園地にお父さんやお母さんと行ったことがあると思います。遊園地はたくさん遊べるものがあって、とても楽しいですね。また広い公園へ行って、青空の下で、たくさんのきれいなお花を見ながら、お弁当を食べるのは、本当に楽しいですね。そんなところへ行けば、時間がたつのを忘れてしまいます。広い公園で楽しく遊んでいるとき、「もう帰りますよ」とお母さんに言われて、「帰りたくないよ」と駄々をこねたことがあるかもしれませんね。

聖書で言っている楽園は、公園の園や遊園地の園という字と同じ字です。ですから、楽園は、私たちが行ったことのある公園や遊園地とは、ある意味で似ているのですが、でも違うのです。それよりはるかに素晴らしく楽しいところです。楽園は、地上の最も美しく、最も楽しい公園とも比べものにならないほど素晴らしいところです。そこにいると、とても幸せな気持ちになれるのです。

どうしてでしょう。それは、楽園には十字架にかかられ、よみがえられたイエスさまがおられて、イエスさまを信じて死んだ人は、その楽園で、イエスさまと、それは、それは楽しい交わりができるからです。

どうしてイエスさまを信じた者は、そんな素晴らしいところへ入ることができるのでしょうか。それは、イエスさまが楽園の鍵をもっておられて、イエスさまを信じる者を、中へ招き入れてくださるからです。どんな偉い人でも、どんなにお金持ちでも、どんな有名人でも、どんなに高い地位があっても、それだけでは、そこに入ることはできないのです。

どうして、イエスさまは楽園の鍵をもっておられて、信じた者を招き入れてくださることができるのでしょうか。その答えが、今日の聖書の個所にあります。今日のお話は、イエスさまと一緒に十字架につけられた一人の犯罪人のお話です。この人がどういう人生を送ってきたのか、どんな悪いことをしたか、ということは、ここには具体的に書かれていません。しかし、マタイやマルコ福

音書を見ると、二人の犯罪人が強盗だったことがわかります。他人の持っているものを無理やり奪ったのです。もしかしたら、人を殺したかもしれません。十字架刑はローマ帝国では最も残酷な刑でした。どうしてかというと、十字架につけられてから死ぬまで、とても長い時間苦しまなければならないからです。この人と一緒に、もうひとりの犯罪人も十字架につけられました。イエスさまはこの二人の犯罪人の真ん中で十字架につけられたのです。

一人の犯罪人が、イエスさまに、「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ」と罵りました。メシアというのは旧約聖書で神さまが約束しておられた救い主という意味です。この犯罪人は、もしイエスさまが本当のメシアなら、自分自身と我々を救え、と挑戦したのです。彼は、自分自身を救えないような者はメシアではない、と思っていたのです。

それを聞いたもう一人の犯罪人が言いました。「我々は悪いことをしたのだから、その報いとして十字架につけられたのは当然だ。でもイエスさまは何も悪いことをしていない。」二人の犯罪人のしてきたことは、十字架にかけられても仕方のないような悪いことでした。この犯罪人は、「でもイエスさまは違う、何も悪いことをしていない」と思ったのです。

マタイやマルコ福音書を見ると、初めのうちは二人ともイエスさまを罵っていたことがわかります。でも一人は途中から、イエスさまに対する見方が変わったのです。イエスさまは、父なる神さまに、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」と、ご自分を十字架につけた人々のために祈りました。もしかしたら、その祈りを聞いて、見方が変わったのかもしれません。見方が変わっただけでなく、イエスさまを信じたのです。「この人は何も悪いことをしていない。聖い方なのに十字架にかけられている。この人はきっと救い主だ」と思ったのです。

彼は、イエスさまが御国の王であることを信じました。彼はイエスさまに一つのお願いをしました。「イエスさま、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください。」

この犯罪人は、「あなたの御国」と言っています。「御国」はイエスさまのものだと信じていたのです。イエスさまは御国を治められる王、支配者です。ですから、御国においでになるときには、このわたしを思い出してください、と頼んだのです。

イエスさまは、彼の人生の最後のお願いを聞き入れてくださいました。そしてこう約束されました。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」

この犯罪人のお願いは謙虚なものでした。終わりの日、イエスさまが再臨され、実際に御国を支配されるときに、わたしを思い出してください、というお願いでした。でもイエスさまは、それをはるかに超えた素晴らしい約束をされたのです。「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる。」

イエスさまもこの犯罪人も、もうすぐ息を引き取ろうとしていました。イエスさまは、その人に、「今日、あなたはわたしと一緒に楽園にいる」と約束してくださったのです。楽園の鍵をもっておられるイエスさまが、そう言ってくださったのです。これ以上、確かな約束はありません。

この犯罪人は悪いことをしたのに、なぜイエスさまはそのような約束ができたのでしょうか。それは、イエスさまが、その犯罪人の身代わりとして、十字架の上で刑罰を受けてくださったからです。ご自分を救われなかったのは、そのためでした。イエスさまは、ご自分は罪を犯されたことのない、聖い神の子です。しかし、罪人の身代わりとして十字架上で刑罰を受けてくださったのです。

だから、イエスさまは、信じる者はだれにでも同じ恵みを与えてくださるのです。このイエスさまを信じるように、私たちを招いてくださっています。

（後藤公子）

〔今週の暗唱聖句〕　ルカによる福音書 23章43節

するとイエスは、「はっきり言っておくが、
あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

3月24日　十字架のキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

十字架にかかられたイエスさまが、楽園への鍵を持っておられる。イエスさまと共に楽園に入れるよう、自分の救い主としてイエスさまを信じる。

〈展開例〉

イエスさまは十字架にかけられました。二人の犯罪人と一緒に。

一人の犯罪人は、「お前はメシヤではないか。自分自身と我々を救ってみろ！」と言いました。

もし、みんながこの犯罪人だとします。痛くて、怖くて、苦しい十字架についていたら、「早くこの辛さがなくなってほしい」と思いますよね。「この辛いところから降ろしてくれたら、イエスさまを神さまと信じよう」と考えると思いませんか？苦しい時の神頼みです。

もう一人の犯罪人は、「我々は悪いことをしたのだから、その報いとして十字架につけられて当然だ。でもイエスさまは何も悪いことをしていない」と言いました。もし自分が前の犯罪人なら、「何をかっこつけてんだよ、もう死んじゃうんだよ」と言いたいだろうね。「そんなこと言える状態じゃないでしょ、痛くて、怖くて、辛いんだから」と思うかもしれない。けれども、もう一人の犯罪人は言えたんだ。

なぜでしょうか？　この犯罪人は、十字架の上でイエスさまと出会ってしまったんだ。十字架にかかっておられるイエスさまのお姿を見て、イエスさまが救い主だと信じることができた。そうしたら、次に何がおこったと思う？　イエスさまがこの犯罪人に、「今日、あなたはわたしと一緒に楽園にいる」と楽園に行く約束をくださったのです。楽園に行く鍵を持っておられるのはイエスさまなのです。わたしたちも、イエスさまを信じてイエスさまと一緒に楽園に行きましょう。

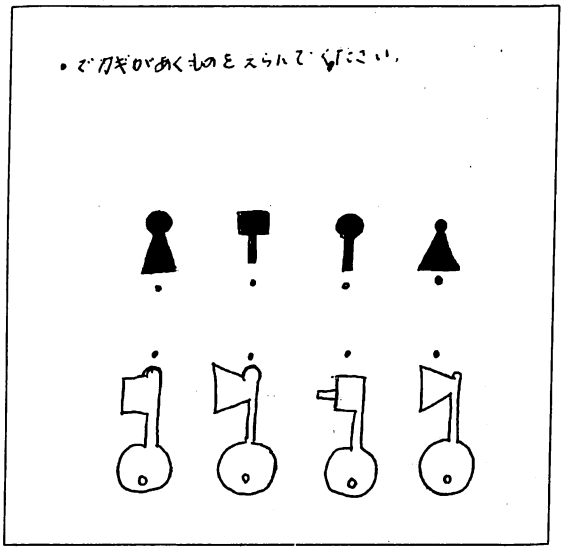
〈お祈り〉

天の父なる神さま、どんな時もイエスさまを見上げて、楽園に行ける者にしてください。

〈パズル〉

鍵あわせのパズルをする。

鍵が開くものを線で結びましょう。



3月24日　十字架のキリスト　小学科下級

〈主旨〉

神は、イエス・キリストによって私たちが悔い改めた今日という日に、私たちを救われる。

〈展開例〉

○イエス様が十字架に架けられた時、イエス様だけじゃなかったね。あとほかに、何人、十字架に架けられたかな？（二人）

○その二人はどういう人だった？（犯罪人／強盗）
　そうだね。この二人は罪を犯したから、十字架の刑罰を受けたんだね。

○でもイエス様は十字架に架かる必要があったのかな？（ない）
　そうだね。イエス様は何にも罪を犯していないのに、十字架に架けられた。

○何でかな？（私たちを救うため：私たちの罪の刑罰を身代わりに負ってくださったため）
　この犯罪者の一人も、イエス様が「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言って、救ってくださったね。

○何でかな？（悔い改めたから：罪を罪として認めたから。イエス様に願った（求めた）から。）
　そうだね。この犯罪者の一人は、自分が犯した罪を認めたんだね。この人は、とっても悪いことをずっとしてきたかもしれない。でも十字架に架かった時、同じ十字架に架けられたイエス様に出会った。その時、初めて自分の罪がわかったんだね。そしてイエス様に正直に言ったんだ。「私は罪人です。あなたは何も悪くありません。せめてイエス様、あなたが御ご自身の国に入られる時は、私を思い出してください」って。そう言ったらすぐイエス様は答えてくださった。「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と。

　今までどんなに悪いことをしてきた人でも、イエス様と出会って、正直にそして心からイエス様の前で自分の罪を認めるなら、イエス様は必ず救ってくださるんだ。

　私たちにとっても罪の大小関係なしに、どんな小さな罪でも神様にとっては罪だということを知って認めることが大切なんだよ。その罪を認めて神様にお祈りして正直に言うことを悔い改めって言うんだ。その悔い改めの祈りがささげられる時、同時にイエス様は今あなたはわたしと一緒にいるといつも言ってくださってるんだよ。もうすでに楽園に行く約束をしてくださるんだ。これからも罪をちゃんと罪と認めて、同時に赦してくださるイエス様に感謝していこうね。

〈祈り〉

神様。私たちの罪をもイエス様が十字架に架かって、お赦しくださってありがとうございます。どうかいつもイエス様の十字架を覚えて、正直に自分の罪を神様に言うことができるように導いてください。そして今日わたしと一緒に楽園にいると言ってくださったイエス様にいつも感謝し続けることができますように導いてください。イエス様のお名前によって祈ります。アーメン。

3月24日　十字架のキリスト　小学科上級

〈ねらい〉

キリストの十字架の苦しみを知る。

〈展開例〉

今週は受難週です。教会にとってとても大切な週です。十字架についてしっかり考えましょう。

○ルカ福音書23章13～25節を読む

質問①　ここはどんな場面ですか？

質問②　登場人物の名前をあげましょう。

質問③　それぞれの人の言葉、行いを言ってみましょう。（朗読劇風に、子どもたちが役を分けて読むのも印象に残る。）

質問④　「もう一人の犯罪人」とイエス様の会話を読みましょう。

質問⑤　イエス様は、もう一人の犯罪人にある約束をしてくださいました。どういう約束ですか？

質問⑥　この約束から、あなたは何を発見しますか？

○話し合いましょう

犯罪人は二人いて、全く違う態度でイエス様に向かいました。私たちのとるべき態度はどちらですか？

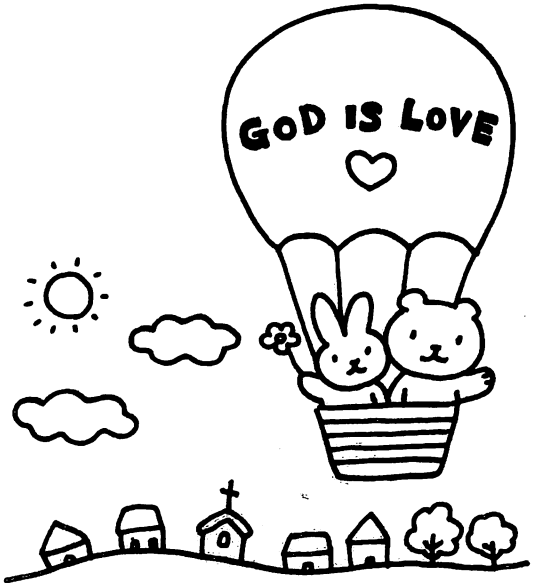
〈祈り〉

神様、十字架の贖いを感謝します。イエス様にいつもついていくことができますよう、お守りください。アーメン。

〈コラム〉

CS教師の学び、どうしてますか？

坂戸教会では、2004年から8年間、ＣＲＣのゴー宣教師をお招きして、月に1～2回の学びをしてきました。ＥＴＡ訓練会、コーヒーブレイク訓練会、テモテ訓練会など、本当に多くのことを学ぶことができ、感謝しています。近隣の新座志木教会や上福岡教会からも参加者が与えられ、よき交わりの時でもありました。小さい子どもを連れて夜の学びは楽ではありませんでしたが、たくさんの恵みをいただきました。



3月24日　十字架のキリスト　中学科

(中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。)

「永久刑罰に価しないほど小さな罪がないように、真に悔い改めている者にも永久刑罰をきたらせることができるほど大きな罪はない。」
(ウェストミンスター信仰告白15:4)

イエス様といっしょに十字架にかけられている二人の強盗。彼らは私たちそのものだ。

ぼくらはみんな、十字架の呪われた死に価する。神の怒りを受けている。このまま十字架の上で、何の希望もなく死んで、永遠の滅びを味わうしかない。そういう自分の真実を、まず知らねばならない。

私たちは、そのことを知らなさすぎる。十字架にかけられている自分を、決して認めたくなくて、そこから目をそらしてばかりいる。

イエス様は、そういう私たちを救いだし、楽園へと連れ戻すために来てくださり、死んでくださった。でもそんなイエス様に罵声を浴びせ、彼こそが救い主だとは絶対に認めようとしない。それが罪人。

イエス様は、どこまでも罪人を愛しておられる。裏切られても、疑われても、愛されなくても、「彼らは何も知らないのです。おゆるしください」と祈ってくださった。

それでもやっぱり、このイエスを馬鹿にする者がいる。残念だけど、それが罪人の現実。イエス様は、それでも祈っておられる。いつか、私たちが悔い改める日のために。

十字架にかけられている二人のうち、一人は悔い改め、楽園に入れていただいた。私たちも同じように、楽園に入れていただけるのだ。ただイエス様を信じるだけで。イエス様が救えないような罪人はいない。真に悔い改めている者にも裁きをもたらしうるほど大きな罪はない。

でも、もう一人は、結局悔い改めることなく、永遠の悲しみに最後は呑み込まれていったのだろう。イエス様は、彼のためにも祈ってくださったし、死んでくださった。でも、彼は楽園にはいない。彼が悔い改めなかったから。赦されることは当然と考えてはいけない。赦されないまま、十字架で死に、永遠の滅びに至るものもいる。

イエス様といっしょに十字架にかけられている二人の強盗。彼らは私たちそのものだ。

その私たちを楽園に連れ戻すため、イエス様が赦しを祈ってくださり、十字架にかかって死んでくださった。私たちも、イエス様に憐れんでいただき、「わたしを思い出してください」とすがりつこう。

3月31日　復活のキリスト　聖書黙想

テキスト　ルカによる福音書 24章36〜49節

①区分について

与えられた聖書箇所は、キリストの復活を伝えている。ここは、前半36〜43節と後半44〜49節の二つに区分されよう。この聖書の箇所の子供たちへの説教として、一つの方法は、全体を通して物語ることである。しかし、全体に注意を払いながらも、特に前半部に集中して語る道もある。いずれにしても焦点をはっきりさせて語るようにしたい。

②主の復活の恵み

この聖書箇所は、エマオ途上の出来事に続いている。エマオで主との出会いを経験した二人の弟子たちは、エルサレムに引き返した。エルサレムでは「十一人とその仲間」が、主が復活されたと語り合っていた。そこで、エマオの弟子たちも、自分たちの喜びの証しを語った（34,35節）。その最中に主イエスが顕現された。ここには個々人から全体へという方向性が見られ、これは福音書の「パターン」（山中雄一郎）である。主は、個々人に顕現されるだけでなく、群れ全体に顕現される。具体的に言うなら、教会における主日の礼拝で、主は出会ってくださるということを示す。それは子供たちの日曜礼拝においても本質的に変わることはない。キリストは今も、子供たちや教師たち、親たちが、共に集まっている私たちの礼拝で御自身を現してくださる。日曜日毎に私たちが集まるのはそのためである。目に見えずとも復活された主は、私たちの「真ん中」に共にいてくださる。

しかし、主が御自身を現されたが、弟子たちは皆、それを信じようとしなかった。大切なことは、この時、彼らはちょうど「復活の話」をしていたところだったことである。にもかかわらず、いざそこに主が御自身を現されると信じることができなかった。主は十字架の釘跡のついた手と足をお見せになり手で触れと言われても、まだ信じることができなかった。さらに主は、彼らの前で魚を食べられ、聖書を説かれ、彼らの「心の目を開いて」語りかけられる。彼らはここではじめて信じた。このようにして、ここでは弟子たちの鈍さ、不信仰が明かにされ、同時に、その鈍く信じようとしない者たちを主イエスは、見捨てない方であることが示されている。主イエスは、失われた一匹の羊のために全力を尽くされる、「良い羊飼い」（ルカ15章1節）である。子供たちも、私たちも、ここで弟子たちと重なる。「信じられない」悲しみは、子供たちも知っているのではないか。しかし、その「信じられない」私たちを見捨てない主イエス・キリストを子供たちに心を込めて、今日、紹介したい。

説教者は、自らを弟子たちと重ねて証しすることができるのではないだろうか。不信仰であったにもかかわらず信じるようになったのは、主イエスのおかげであると誰でも語ることができるのではないか。そして、子供たちには、このことはよくわかるのではないか。

③からだの復活

ところで、弟子たちは、復活された主イエスと出会って、「亡霊を見ているのだと思った」とある。この「亡霊」は意訳で、原文は「霊」である。聖書は弟子たちが主イエスのことを「亡霊」あるいは「幽霊」になられたと言っているのではないことに注意したい。彼らは主イエスのことを「霊」と思った。しかし、キリストがただ単に「霊」ではなく「肉」において「からだ」において復活された。弟子たちはそのことに躓いた。

ルカによる福音書がここで強調しているのは、主の復活がどれほど奇妙に思えても、からだを伴うものであったということである。ここで重要なのは、「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしである」という39節のことばである。復活して現れたのはまさしく「わたし」、弟子たちがよく知っているイエスなのである。「手や足を見なさい」と言われるのは、幽霊には手や足がない

からということではなく、手と足には十字架の釘跡があったゆえである。それにしても不思議な言葉ではないだろうか。普通、私たちが自分であることを相手に示すときには「わたしの顔」を見なさいというのではないか。しかし、主はここで釘跡のついた手と足を示される。それは主の復活は、十字架につけられたイエスの復活であるということを示す。

弟子たちは、主が霊において復活されたということなら、信じることはできたかもしれない。しかし、キリストはからだにおいて復活されたために信じることができなかった。教会は、キリストの霊的現臨と共に、からだの復活について信仰を保持してきた。それはキリストの救いが歴史的な事実に根拠を置いているということであり、キリストの救いそのものが現実のものであるということを意味している。キリストの救いは心だけではなく、心もからだも、全人的なまるごとの確かな現実の救いなのである。この「からだのよみがり」はまさに福音である。喜びのあまり信じられないような救いなのである。

④喜び

しかしながら、子供たちにこのキリストのからだの復活のことをどのように伝えることができるだろうか。私たち説教者が成すべきことは復活について説明することではなく、復活そのものを語ることである。聖書そのものを、ここでは子供たちに説くことである。

この聖書の箇所を読むときに思い出すのがキリスト者の小説家であった椎名麟三氏のことである。『私の聖書物語』（中公文庫）の中で氏は、この聖書の箇所を読んだ時の経験について記している。

「私はドストエフスキイを信頼して洗礼を受けた。だが、神やイエス・キリストが信じられていたわけではない。受洗して一年もたって、ある日、ルカ伝の復活のくだりを読んでいたとき、突然ショックとともに、必然性の壁が音を立てて崩れ落ちて行くの見た。つまり本当の自由を見たのだ。と言って、そこには大したことが書かれているわけではない」と言って、このルカの復活の聖書の箇所を引用してこう記す。「これだけのことだ。しかしショックはこれだけのことの間に私を襲ったのだ。それまでの世の中がちがった光で見え、わたしの生き方を変えてしまったのだ。私は生きているイエスをみていたからだ。しかしそのイエスは絶対に死んでいるはずのイエスである。しかも弟子のだれもそのイエスを信じることができない。むろん私もだ。だが、イエスは自分を信じない者のためにどんな奇跡をあらわされたか。とんでもない、くだらなくも焼き魚の一切れをムシャムシャ食ってみせられているだけである。そのイエスの愛が私の胸をついた。同時に死んで生きているイエスの二重性は、私が絶対と考えていたこの世のあらゆる必然性を一瞬のうちにうち砕いてしまったのである。」

弟子たちに釘跡のついた手や足を見せる主イエス、魚をムシャムシャと食べて見せる主イエス。子供たちにもこの主イエスのことはよくわかる。主の愛を子供たちと共に覚え、イースターを喜びたい。

（橋谷英徳）

3月31日　復活のキリスト　説教展開例

テキスト　ルカによる福音書 24章36〜49節
参照教理問答　子どもカテキズム　問24

〔単元のねらい〕
キリストの復活を告げ、共にイースターを喜ぶ。復活のキリストの愛を伝える。

イエスさまの復活

イースターおめでとう！

今日は、どうしてこんな挨拶したのかな？

そうです。今日は、イエスさまが復活された日です。今日はみんなでイエスさまのご復活をお祝いしましょう。

イエスさまは十字架にかかって死なれました。それは金曜日のことでしたが、その日のうちにお墓の中に葬られました。その日から三日の後、つまり日曜日の朝に、イエスさまは復活なさったのです。

イエスさまが復活なさったことを最初に聞いたのは婦人の弟子たちでした。天使が現れて、イエスさまが復活されたことを伝えたのです。またエマオの村に向かって歩いていた二人の弟子たちにイエスさまは姿を現されました。この二人の弟子たちは、すぐにエルサレムに戻ってきて、他の弟子たちにそのことを伝えました。そして、みんなでイエスさまの復活について、あれこれと話し合っていました。

ちょうどその時に、復活されたイエスさまはお弟子さんたちの真ん中にお立ちになって、言われました。「あなたがたに平和があるように。」

お弟子さんたちはどうしたでしょうか？

「やったーイエスさまが復活された！」と言って喜んだのでしょうか。

そうではなかったのです。みんなは恐ろしくなってしまったのです。今、自分たちの目の前にいるのは十字架に死なれたイエスさまじゃないと思ったのです。イエスさまはもう死なれてしまった。死なれてお墓に葬られたじゃないか。そのイエスさまがここにおられるはずなんか絶対ない！そう思っていたのです。

このように、お弟子さんたちは、イエスさまの復活なさったという話しを聞いても、イエスさまのお姿を目で見ても、そのことを信じることはできませんでした。

みんなだったらどうでしょうか。先生は、お弟子さんたちと同じように信じれなかったと思います。イエスさまは死んでしまった。もうイエスさまとお会いすることも、お話しすることもできない。もう全部、終わってしまった。そう思ったでしょう。ですから、信じれなかったと思います。

では、イエスさまは、信じないお弟子さんたちにどうなさったのでしょうか。イエスさまはまず話しかけられました。「なぜうろたえるのですか。心に疑いを起こすのですか。」そして、こんなことを言われました。「私の手を見てごらん。足を見てごらん。ほら、わたしですよ。触ってごらん。」

イエスさまはこんなに風に（自分の手を子供たちに見せ、足を見せて）、なさったのかもしれません。イエスさまはちゃんとからだをもって蘇られたのです。

でもどうしてイエスさまは手と足をお見せになられたのでしょう？　普通は「この顔を見てください」と言うのじゃないでしょうか。みんなもそうではないでしょうか？　でもイエスさまは手と足だったのです。それには理由がありました。イエスさまの手と足には十字架につけられた時の釘の跡があったからです。私たちの罪のためにイエスさまは十字架につけられたのです。

ではどうでしょうか。お弟子さんたちはこれでやっと信じられたでしょうか。そうではなかった

のです。まだ信じられなかったのです。お弟子さんたちはイエスが生きておられるとすれば、こんなうれしいことはないと思っていました。でもそれはどうしても信じられないことでした。じゃあもうイエスさまはもうお弟子さんたちのことを諦められたのでしょうか。そうではありません。

今度はイエスさまは、「何か食べ物はありますか」と言われました。「はい、お魚の焼いたのがあります。」お弟子さんたちは魚をイエスさまに差し出されました。すると、イエスさまはその魚をムシャムシャと全部、ペロリと食べてしまわれました。そして、それからイエスさまは、聖書の話を始められました。お弟子さんたちはようやく、イエスさまがここにいてくださる、復活なさったということを信じました。そして、弟子たちはやがて、イエスさまの救いのことを、全世界に伝えていく人になりました。

イエスさま、すごいです。イエスさまがお弟子さんたちの心を開いて、信じる者に変えられたのです。それにしても、イエスさまって暖かくて、やさしいお方です。お弟子さんたちが信じるように一所懸命になってくださっています。

手や足をお見せになったり、

お魚をむしゃむしゃ食べられたり……。

イエスさまが手や足を見せられたり、魚をムシャムシャと食べられたりする様子を想像してみてください。イエスさまはお弟子たちがイエスさまの復活が信じられるようになるために、一所懸命になっていてくださいます。先生は、この時のイエスさまのことを思うと、なんだかとてもうれしくなります。

お弟子さんたちはここまで失敗だらけでした。イエスさまのお言葉に従わなかったり、イエスさまを悲しませるようなこともたくさんしました。そして、イエスさまが十字架におかかりになったときには、イエスさまを見捨てて逃げ出してしまいました。でもそんな弟子たちをイエスさまは見捨てられませんでした。彼らの罪を赦し、愛してくださったのです。

このイエスさまは、私たちにも同じようにしてくださいます。

先生が最初に教会に行ったのは中学の2年生の時でした。教会に行ってイエスさまのことを学ぶようになりました。しばらくして、牧師先生から「イエスさまのことをあなたは信じますか？」と尋ねられました。そのときにこう答えました。「絶対に信じません！」。でも今、こうして信じています。それはとても不思議なことです。どうしてでしょうか。イエスさまがお弟子さんたちと同じように、してくださったからです。先生だけではありません。私たち、みんなにイエスさまは同じようにしてくださいます。

イエスさまが、私たちを信じる人に変えてくださいます。イエスさまの救いを私たちに与えてくださいます。

ここにいる、みんなのこともイエスさまはとても愛していてくださいます。それはずっとどんなことがあっても変わることはありません。

今日もイエスさまは、私たちに「わたしは復活したんだよー」と伝えてくださっています。

（橋谷英徳）

〔今週の暗唱聖句〕　コリントの信徒への手紙 一 15章20節

しかし、実際、キリストは復活し、眠りについた人たちの初穂となられました。

3月31日　復活のキリスト　幼稚科

〈ねらい〉

本当にイエスさまが復活されたことを子どもたちに伝え、イースターを一緒に喜ぶ。

（ルカ24:36－49、コリント－15:20）

〈展開例〉

1. ♪ハレルヤ　さんびしよう♪

ハレル　ハレル　ハレル　ハレルヤ さんびしよう（繰り返し） さんびしよう　ハレルヤ（3回繰り返し） さんびしよう

「ハレルヤ」チーム
「さんびしよう」チーム
で、交互に　立ったり座ったりして身体を動かしながら賛美する（テンポも変えて）。

2. 最初のお祈り（分級担当教師・短く）

3. たくさんの紙のお魚を用意

お魚釣りゲームをする。

4. 復活されたイエスさまが一緒にお魚をお弟子さんたちと食べた（ルカ24:43）ことを聞いたので、みんなイエスさまと一緒にムシャムシャ食べる真似をする（お魚は分級のおみやげ）

5. 今もイエスさまは生きておられてわたしたちといつも一緒にいてくださるのです

6. 嬉しいイースターの特別な日曜日なのでイースターの紙芝居や絵本を用いることも出来る

7. 最後のお祈りの前に

先生　「ハレルヤ！
　　主は復活されました。
子ども「ハレルヤ！
　　本当に主は復活されました！」
先生　「ハレルヤ！
　　イエスさまは生きておられます」
子ども「ハレルヤ！
　　イエスさまは生きておられます」
先生と子ども一緒に
　　「ハレルヤ！
　　イエスさまは生きておられます」

8. 最後のお祈りは、教師のことばに続いて子どもも一緒に祈る

3月31日　復活のキリスト　小学科下級

〈主旨〉

主イエス・キリストご自身が、私たちにその復活を信じさせてくださる。

〈展開例〉

○今日はイースターだね！　イースターって何の日なんだっけ？（イエス様の復活日）

○イエス様が復活された時、弟子たちはすぐ信じたのかな？（信じなかった）

そうだね。目の前に現れて、イエス様の手と足を見せても、目の前で魚をムシャムシャ食べても、100％は信じられなかったんだよね。

○そうした弟子たちを前にして、イエス様は、最後に（今日の箇所で）どうされたのかな？（聖書からお話された。「聖書を悟らせるために彼らの心の目を開い」た。45節。）

イエス様が、弟子たちの心の目を開いたから信じれたんだよね。聖書に書いてある神様の言葉は必ず実現するんだ！って。

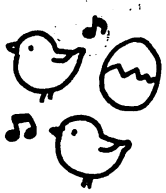
みんなの中にもイエス様が復活されたっていうことが、信じられないお友達がいるかもしれない。復活っていうことは人間には不可能なことだからね。でも私たちが信じている神様には何でもできるんだ（マルコ10:27）。

イエス様も死んで終わりじゃなくて、復活されたんだ。それはみんなの罪を赦すだけじゃなくて、みんなにも復活の命を与えるためにね。今週の暗証聖句の「初穂」という言葉は、その年に最初にできたおコメなどの「穂」っていうのを意味しているんだよ。それは、次々に実るもの約束しているものでもあるんだ。だからイエス様が初穂。最初の実り。そして私たちが後から続くんだ。

今はそのイエス様が私たちに命を与えてくださった「復活」っていうことを信じられないかもしれない。でも必ずイエス様はみんなの心の目を開いてくれる！　いつもイエス様はみんなの先に立って歩んでくださっているんだよ。十字架っていう苦しみ、死ぬことで終わらないんだ。その先にある光り輝く命を与えるためにいつも先立って私たちを導いてくださっているんだよ！　そのことをいつも覚えていてね。

〈祈り〉

神様。私たちは弟子たちのように、信じたくても心から信じられない弱さがあります。おゆるしください。イエス様はそんな弟子たち、私たちに近づいて一歩一歩導いてくださいました。これからも導いてください。そして心からあなたを信じて、イエス様の後についていくことができますようにお導きください。イエス様の御名によって祈ります。アーメン。



3月31日　復活のキリスト　小学科上級

〈ねらい〉

「復活なんてありえない！」と思う子どもたちの心がイエス様に向けられますように。

〈展開例〉

この間、うちの娘（小1）がおもしろいことをしました。帰宅した私を玄関に迎えにきて、「おかえりなさい」と言ったあと、私の服に鼻をこすりつけて、「本物のママだ！」と言ったのです。本物かどうか、みなさんならどうやって確かめますか？

○ルカ福音書24章36～43節を読みましょう

質問　イエス様の復活が信じられなかった弟子たちのために、イエス様は何をされましたか？（手足を見せた。魚を食べた。）

十字架の死によって、罪の贖いをなしとげてくださったイエス様。そんなにすごいことがあったのに、復活のときは、私たちにわかりやすい方法でそばに来てくださいました。なかなか信じることができなかった弟子たちなのに、怒らず叱らず、何度も証拠を見せてくださったイエス様。私たちの救い主はすぐそばにいて語りかけてくださる方なのです。感謝しましょう。

〈祈り〉

神様、いつもそばにいてくださるイエス様に感謝します。

〈コラム〉

「卵探し」、しますか？

イースターのお楽しみといえば、公園での卵探し。坂戸教会でも、過去には近隣の公園に朝早くＣＳ教師が卵を隠しに行き、何食わぬ顔でＣＳの礼拝を公園で行い、小さい子から順番に出発して卵を探しました。子どもたちはとても楽しんでいましたが、準備が大変、後かたづけが大変、と最近はやらずにゆで卵を配るだけにしています。

ところが、先日、中2の息子の英語の教科書を見ていると、イースターエッグの話が出ていました。

日本の公園でお花見をしている人を見たアメリカ人のLisaがスピーチでこう言います。

“In the U.S.,we have Easter in Spring. This is an Easter egg. I miss Easter egg hunting”.（『Sunshine 2』）

これを読んで、面倒くさがらずにイースターは卵探しをしようかな、と思った次第です。

3月31日　復活のキリスト　中学科

（中学生の皆さんに、キリストの道の急所をつかんでほしいと願って、この原稿を書いています。対話の起点にしてください。）

「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後12人に現れたことです。次いで、500人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かはすでに眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いでヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。」（コリントー15:1－8）

イエス様が、私たちの罪の身代わりとして十字架で死んでくださったこと。これは絶対に外せません。この尊い独り子の十字架の犠牲の死に、私たちに対する神様の愛が完全に表されました。だから、十字架はキリスト教のシンボルです。

でも、イエス様は、十字架にかかりっぱなしの方ではありません。復活されたのです。死んだこと、仮死状態だったのではなく本当に死んで葬られたこと。しかし、その墓の中からよみがえられたこと！！これが最も大事なことです。このことは、たくさんの目撃証人がいる。

そんなことはありえない。科学的に証明してほしい。……そう言いたい人は、いつの時代にもいる。でも、証明なんてできっこない。だいたい、科学で証明できる程度のちんけなことに、「信じる」値打ちはない。

すごい人というのは、いつもそれまで誰も考えなかったこと、できないと思っていたこと、マンガでしかありえないよと思うことをやってのける。そういうでかいやつがいる。でも、神様のなさることは、そんなでかいやつらをも超えていく。ぼくらが「それならありえる」と納得できる程度のちんけなサプライズで、お茶を濁されるわけがない。

最初の弟子たちは、このサプライズを受けて、「信じる」ことはできなかった。そりゃそうだ。びっくりしすぎて、頭がパニくったんだ。聖書を読むと、イエス様は、ちょっと呆れ顔だったみたいだよ。だって、「聖書に約束されているとおり、私は死んでから三日目に復活する」って何度も予告してくださっていたから。「復活するって言ったじゃないか。なんでウソーみたいな顔するの？君らほんとに不信仰……」って呆れ顔。

でも、そういう弟子たちのために、丁寧に丁寧に、御自分の体を示してくださって、一緒にご飯食べたり、焚き火を囲んだりして、「信じる」ことができるように、イエス様が弟子たちの心を開いてくださったんだって、説教で教えてもらったね。

そうして、主の復活を「信じる」ことができるようになったとき、弟子たちは生まれ変わりました。死んでも決して負けなかったイエス様の力を得て、どんな苦しみにも恐怖にも負けないで、どこまでも絶望せずに立ち向かう本物の弟子に生まれ変わりました。

イエスが本当に復活された証拠を見せろって言われたら、この弟子たちの変化が、一番の証拠と言えるかな。イエス様の復活という事実が、彼らに根源的な確信と勇気を与えたのです。
今もイエス様は、ぼくらに同じものを与えようとしていてくださるのです。

2013年4〜6月カリキュラム（第49号）

―『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第2年―

月　日 教会暦・行事	主　　題	子どもカテキズム 聖書箇所	教理問答 暗唱聖句
	単元の目標		
4月7日 進級式	復活のときの祝福	問36	ウ小37, 38、ウ大84－90
		コリント一15:12－21	コリント一15:13
	キリストに結ばれて、再臨の日に朽ちない体によみがえる幸いを待ち望もう		
14日	第三部　生活の道 感謝の生活	問37	ウ小39、ハイデ86, 87
		ローマ6:12－14	ローマ6:13
	主が救いの道を与えてくださった。主の恵みに感謝して生きる道を歩もう		
21日	感謝としての服従	問38	ウ小39、ウ大91、ハイデ91
		サムエル上15:1－23	サムエル上15:22
	神の救いの恵みに感謝して、神の御言葉に聞き従う人生を歩もう		
28日	十戒―感謝の道しるべ	問39	ウ小40, 41、ウ大95, 97, 98
		出エジプト19:1－6	申命記10:4
	十戒は神から神の民への愛の贈り物、神の愛の言葉。神の愛にこたえて歩もう		
5月5日	神と人への愛	問40	ウ小42、ハイデ93
		マルコ12:28－34	マルコ12:29－31
	神の愛にこたえて、わたしたちも愛することに生きよう。神と人を愛する愛に		
12日 母の日	贖いのみわざ―過越	問41, 42	ウ小43, 44、ウ大101
		出エジプト12:21－28	出エジプト20:2
	十戒の歴史的根拠である神のみわざ―過越―を学び、神の大きなみわざを仰ごう		
19日 聖霊降臨祭	聖霊と終わりの時代	―	―
		使徒2:14－42	使徒2:38後半
	聖霊によってキリストが証しされる時代が始まった。聖霊の力に生きていこう		
26日	過越の成就―キリスト	問41, 42	ウ小39－44、ウ大91－101
		出エジプト20:2	ペトロ一1:18－19
	十字架のキリストにおいて贖いのみわざが成就した。キリストに結ばれて歩もう		
6月2日	第一戒 神を神とする	問43, 44	ウ小45－47、ハイデ94－95
		出エジプト20:3	出エジプト20:3
	まことの神をあがめることができる幸いを知り、神を神として歩もう		
9日 花の日	第二戒 刻んだ像の禁止	問45, 46	ウ小50－52、ハイデ96－98
		出エジプト32:1－24	出エジプト20:4a
	偶像を拝む罪を知り、目に見えない主を信じる幸いを喜ぼう		
16日 父の日	第三戒 神の御名	問47, 48	ウ小54、ウ大112、ハイデ99
		出エジプト3:7－15	出エジプト20:7a
	神を畏れ敬う心が求められている。心から神に信頼し、神をほめたたえよう		
23日	第四戒 安息日の聖別	問49, 50	ウ小57－62、ハイデ103
		出エジプト20:8－11	出エジプト20:8
	安息日が与えられている幸いを知り、主の日の喜びと安息を分かち合おう		
30日	第五戒 父母を敬う	問51, 52	ウ小63－66、ハイデ104
		エフェソ6:1－3	出エジプト20:12a
	主なる神が人間関係を与えてくださっている。「神ゆえに」父母を敬おう		

2013年度 年間カリキュラム（第49～52号）

（2013年4月～2014年3月）

二年サイクル　カテキズム　カリキュラム　第２年（子どもカテキズム問36～85）

	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2013年	４月７日	進級式	復活のときの祝福	問36
第49号	４月14日		感謝の生活	問37
	４月21日		感謝としての服従	問38
	４月28日		十戒―感謝の道しるべ	問39
	５月５日		神と人への愛	問40
	５月12日	母の日	贖いのみわざ―過越―	問41，42
	５月19日	聖霊降臨祭	聖霊と終わりの時代	―
	５月26日		過越の成就―キリスト	問41，42
	６月２日		第一戒　神を神とする	問43，44
	６月９日	花の日	第二戒　刻んだ像の禁止	問45，46
	６月16日	父の日	第三戒　神の御名	問47，48
	６月23日		第四戒　安息日の聖別	問49，50
	６月30日		第五戒　父母を敬う	問51，52
第50号	７月７日		第六戒　殺してはならない	問53，54
	７月14日		第七戒　姦淫してはならない	問55，56
	７月21日		第八戒　盗んではならない	問57，58
	７月28日		第九戒　偽証してはならない	問59，60
	８月４日		第十戒　むさぼってはならない	問61，62
	８月11日	（平和）	平和を創り出す	―
	８月18日		神のおきてを喜ぶ生活	問63
	８月25日		十戒の完成者キリスト	問64
	９月１日		教会に生きる（一）	問65
	９月８日		教会に生きる（二）	問66
	９月15日	（敬老の日）	信仰と悔い改め	問67
	９月22日		恵みの手段	問68
	９月29日		神の御言葉―聖書―	問69

年・号	月　日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第51号	10月6日		神の御言葉―説教―	問69
	10月13日		御言葉への聴従	問70
	10月20日		礼典	問71
	10月27日	宗教改革記念	宗教改革	―
	11月3日		洗礼	問72，73
	11月10日		主の晩餐	問74，75
	11月17日		祈りとは何か（一）	問76
	11月24日		祈りとは何か（二）	問76
	12月1日	アドベント	待降節	―
	12月8日	アドベント	待降節	―
	12月15日	アドベント	待降節	―
	12月22日	降誕祭	降誕祭	―
	12月29日	年末	一年の感謝	―
2014年	1月5日	新年	新しい一年に向けて	―
第52号	1月12日		祈りのお手本	問77
	1月19日		天の父よ	問78
	1月26日		御名をあがめさせたまえ	問79
	2月2日		御国を来たらせたまえ	問80
	2月9日	(11 信教の自由)	御心の天になるごとく	問81
	2月16日		日用の糧を与えたまえ	問82
	2月23日		我らの罪を赦したまえ	問83
	3月2日	(5- レント)	悪より救い出したまえ	問84
	3月9日	レント	頌栄	問85
	3月16日	レント	アーメン	問85
	3月23日	レント	受難節	―
	3月30日	レント	受難節	―

〈執筆者よりひとこと〉

●上福岡教会教会学校教師および子ども礼拝奨励者で分担執筆いたしました。

（上福岡教会教会学校）

●イエス様と子どもたちがさらに近くなりますように。（片岡　継）

●忙しさや息け心との戦いでしたが、御言葉に触れる機会に恵まれ、感謝しています。

（坂戸教会教会学校）

●一年間、拙稿にお付き合いくださりありがとうございました。不十分な奉仕で申し訳ありません。

（坂井孝宏）

●子どもカテキズムに沿って基本教理を語ることは、聖書の救済史に沿って福音信仰を説くこと以上に、説教者に相当の産みの苦しみを強いるものです。生まれ出た説教によって子どもたちの新生を励まし支えること、この喜びを共感しつつ協力しあう場として、教案誌は貴重です。その存続の可能性は、購読者が与えられることだけでなく、編集・校生・発注・発送の実務奉仕者が起こされることにかかっています。（二宮　創）

●もしかすると、今号も「当たり前」のように皆さまのお手元に届けられているかもしれません……。しかし、これが無くなる可能性があります。どうぞ、神が働き人（奉仕者）を遣わしてくださるようにと、皆様の祈祷課題として、お祈りください。（相馬伸郎）

〈あとがき〉

●第48号をお届けいたします。今号も、多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆者・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●12ページに「編集部からのお知らせ」を記しました。ぜひお読みください。そこに記しましたように、奉仕者の退任により、休刊もしくは廃刊をせざるを得ない状況にあります。改革派教会の定期大会においても、継続発行のために奉仕者募集のアッピールをさせていただきました。教案誌発行の営みは、「何としても定期刊行物としての教会学校教案誌が必要である」との志をもって有志が立ち上がって始まりました。

今、改めて当初の志が問われています。しかし、現在の形で継続することには限界があります。大会教育委員会からの発行を祈り求めつつ、現状との折り合いをつけ、小さな奉仕を束にして継続しています。ぜひお祈りください。

●「具体的に、どんなお手伝いが求められているのか……」。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。「問い合わせたら、奉仕に加えさせられてしまうかも……」。大丈夫です。ご心配なさらず、お声かけください。問い合わせは相馬伸郎まで、E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

●子どもたちの信仰の証を募集しています。子ども自身の言葉でも、教師（もしくは親）の言葉でもかまいません。皆さまは、主の日の朝、誰よりもはやく教会の玄関をくぐり、祈りつつ、子どもたちを迎えておられることと思います。

皆さまの奉仕の労苦を主の豊かにねぎらってくださいますように。そして、子どもたちの信仰告白と受洗の実り以上のねぎらいはないでしょう。喜びをぜひ互いに分かち合いましょう。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。当教案誌編集部より提供させていただいています。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●Soli Deo Gloria!

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購読ください。

また、品切れになっていた『子どもカテキズム』を再刷しました。現在のカリキュラムは、『子どもカテキズム』に基づいて編まれています。ぜひお求めください。教案誌はバックナンバーもあります。第44 号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。『子どもカテキズム』(300円)、副読本『主は羊飼い』(800円）のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所　辻幸宏まで
〒503-0996 大垣市島町283
Tel/Fax. 0584-91-3538
E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき
　久保浩文（高知教会牧師）
巻頭説教
　貫洞賢次（札幌伝道所宣教教師）
日曜学校・教会学校訪問
　芦田高之（新浦安教会牧師）
編集部からのお知らせ
　相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教教師）
聖書黙想・説教展開例
　長谷川潤（四日市教会牧師）
　木下裕也（名古屋教会牧師）
　二宮　創（太田伝道所宣教教師）
　辻　幸宏（大垣伝道所協力牧師）
　相馬伸郎（名古屋岩の上伝道所宣教教師）
　望月　信（高蔵寺教会牧師）
　三川栄二（稲毛海岸教会牧師）
　小野静雄（多治見教会牧師）
　大西良嗣（滋賀摂理教会牧師）
　芦田高之（新浦安教会牧師）
　後藤公子（神戸改革派神学校講師）
　橋谷英徳（関キリスト教会牧師）
分級展開例
　幼稚科　　上福岡教会教会学校
　小学科下級　片岡継（徳島教会牧師）
　小学科上級　坂戸教会教会学校
　中学科　　坂井孝宏（勝田台教会牧師）
イラスト作画
　表紙　片岡契一（高島平キリスト教会長老）
　本文　岡野美佳（青葉台教会会員）

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻　幸宏	大垣伝道所協力牧師
二宮　創	太田伝道所宣教教師
長谷川潤	四日市教会牧師
望月　信	高蔵寺教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』
2013年1・2・3月号（季刊）
第48号
2012年11月25日発行

発行　日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所　日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
名古屋岩の上伝道所　宣教教師 相馬伸郎
〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座　00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷　株式会社あるむ
頒価　900円（本体価格）